
ツイートピア

・J

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ツイートピア

【Nコード】

N49870

【作者名】

・J

【あらすじ】

時は西暦2100年。人間の体内にツイッターを組み込むシステム「バイオツイッター」が実用化された時代のお話。主人公の「ノルコ」は、ごく平均的な家庭に育った女の子。彼女を中心として過ぎてゆく日常は、一見ありふれたもの。が、バイオツイッターによる相互監視が当たり前になっていたり、お金を必要としない経済システムが確立していたり、よくわからないことになっている。しかしそんなことはノルコにはどうでも良いことで、目下の課題は「良いお嫁さんになる！」ということだった……。 (ワンシーン1

40文字以内)

ツイートピア1〜18（前書き）

【用語】

ツイート：何気ないつぶやき。会話とはちょっと違ったりする。

TL：タイムライン。ツイートを新しいものから順に並べたもの。

リプライ：特定の人に向けたツイート。

ツイトピア1〜18

(1)

ジリリリ、ジリリリ——目覚まし時計を止め、ベッドから起き上がった少女。彼女の名前はイズミ・ノルコ、小学五年生だ。寝癖がピンピンとはねた頭をポリポリしつつ、「おはよー」とつぶやいた。ここはツイトピア。いつしか世界はツイト（つぶやき）で結ばれるようになったのだ。

(2)

ノルコは鼻歌をつぶやきながら服を着る。そしてランドセルを持って一階のリビングに駆け下りた。朝ごはんの仕度が出来ていた。ノリコ「めだまやきだ！」母「今日はお米を買ってこなきゃ」父「また円高かー」弟「ウエーイ」みんな好き勝手につぶやいてばかり。だってここはツイトピア。

(3)

ノルコは目玉焼きの黄身とご飯を混ぜて、醤油をちよつとかけてプチ卵ごはんを作って食べるのが好き。イズミ家は父母とノルコと弟の四人家族。弟の名前はイズミ・セルゲイビッチロマーノフ（自称）なんだけど、長いから弟でいいよね。弟「ウイイイ？」

(4)

朝食を食べたノルコと弟のワク（本名）は、集団登校のために玄関の前でみんなを待つ。ノルコ「あうう、寝癖が」何度もクシを入れてみるが、てっぺんの毛が手ごわいのだ。そのうち皆がやってきた。「アホ毛」「アホ毛だ」「アホアホ！」「アホ毛」ノルコ「うるへえ」

(5)

ノルコ達、つぶやね 咄音小学校の一団は、朝日が照らす小綺麗な街角を歩いていく。集団登校するのは治安が悪いからではなく、その方が楽しいからだ。「ノルコのニーソ、シマシマでいいね!」「うわー、犬のウンコー!」「大丈夫にや問題にやい」 通学路をにぎやかなリプライが飛びかう。

(6)

校門付近に変な人が立っていたので、一行はリプライをいったん止めた。男「ビヴァーチェ! ついにここにたどり着いた! 素晴らしい!」 男は一人ツイートを繰り返しながら歩き去っていった。少し不思議な人であるらしい。ノルコは「一人ツイートって楽しいのかな?」と思った。

(7)

教室に入ると自動的に全クラスメートと相互フォローになる。レイタ「ちっ、今日の授業つまんねーの! 体育も音楽もねーじゃん! 楽しみ給食しかねーじゃん!」 ジェネ・レイタ君がいつも通り呟きまくっている。彼は金髪ツンツン頭の自称イケメンだ。ノルコは正直ウザイないつも思う。

(8)

ノルコ「算数だっておもしろいよ?」 レイタは「へっ!」とって机の上に飛び乗り、くるくる回ってからビシッとノルコを指差しつつやいた。レイタ「算数が好きな女って変だな!」 女子「そんなことない!」×15ツイート。少年は朝から全女子を敵にまわってしまったようだ。

(9)

レイタ「割り切ってやるぜ! $7 \div 3$ でも $9 \div 2$ でも、俺なら割

り切ってみせるぜ！」一同が全員ため息をついた時、予鈴がなつて先生がやってきた。先生「そうか、じゃあまずキミから割り切つてあげようね」先生はそう言つてレイタの両耳をつまむと、思いつきり引つ張つた。レイタ「ア”ッー！」

(10)

レイタ「体罰反対」午前の授業中、彼はずっとそう呟いていた。おかげで午前中のタイムラインは「体罰反対」と「レイタうるさい」で8割埋め尽くされてしまった。給食の時間、彼は先生と目が合うや否や「たいばt……」とうとうクラス全員にリムーブされたようだ。

(11)

お昼休みのあとの授業はお昼寝の時間と決まっている。しかも科目は「つぶやき史」で、先生は癒しのウイスパーパーボイスの持ち主、ツブヤ・クオ先生だ。クオ「じゃあ今日は教科書11ページから始めるんだお」もう既に3人寝た。

(12)

クオ先生はメロンを片手に持ちながらつぶやき始めた。クオ「今から一世紀くらい昔に、世界中でインターネットというものが流行つたんだお。ちょうどこのメロンの表面の模様みたいに、地球上に通信ケーブルが張り巡らされてたんだお」そしてまた6人ほど寝た。

(13)

クオ「このメロンはあとで先生が美味しくいただくんだお」そういつてクオ先生は教え子達の反応を待つ。どうやらウケを狙つたらしい。「zzzz……x3リツイート」クオ先生はにっこり微笑むとメロンを教壇に置いた。クオ「じゃあ、続きを話すんだおっ」

(14)

クオ「インターネットが普及してしばらくたったある日、頭のいい人たちがツイッターっていうソフトを開発したんだお。それをみんな、パソコンという極めて原始的な情報端末で操作して楽しんだんだお。それなりに面白くて便利なものだっただお」

(15)

クオ「パソコンはやがてモバイルに、モバイルはブレイン・インプラントに、ブレイン・インプラントはナノ・インサートにどんどん進化していったんだお」 自称「けなげな美少女」のノルコも、横文字がいっぱい並んだために我慢できず、気絶するようにして寝てしまった。

(16)

クオ「パソコンと呼ばれていた装置は、今はみんなの体に組み込まれてるんだお。耳たぶをクリックするとＴＬ画面が出るのもそういう仕組みだお。何か質問あるお？」 しかし起きているものは誰もいない。それを見て先生はニッコリ微笑む。クオ「じゃ今日はこれで終わりだお」

(17)

チャイムとともにノルコは目を覚ます。ノルコ「あうう、今日も耐えられなかったか」 そして自分の耳たぶをクリックし、クオ先生の授業ＴＬを呼び出した。ノルコ「うわあ」 先生はくねくねと身振り手振りを駆使し、わかりやすい説明に心を砕いていたのだ。ノルコ「いい先生だなあ」

(18)

ノルコはクオ先生のＴＬを閉じ、前の席のレイタを見た。レイタ

「zzzz……うおおっ、ひつまぶしい」 どうやらい夢を見ているようだ。腹立たしい。ノルコはレイタの椅子をボコンと蹴っ飛ばした。レイタ「敵襲?!……zzzz」 ノルコは次の授業の準備をしつつ、家族のことを考えることにした。

つづく

ツイトピア19〜40（前書き）

【登場人物】

ノルコ：小学5年生の女の子。自称「けなげな美少女」

ワク：ノルコの弟。横文字大好きな西洋かぶれ。

アフレル：ノルコの父。研究所で働いている。いつもパワーっとしてる。

ヨコ：ノルコ母。美人でたまに学生と間違われる。

【用語説明】

ファボる：ツイトをお気に入りに登録すること。

DM：ダイレクトメール。送った人と送られた人しか見れない。

耳たぶクリック：視界に画面が表示され、その場所のTLを確認できる。

つばやね市：ノルコ達の住んでる街。海に面したけっこう大きい街。

ツイトピア19〜40

(19)

ノルコが午後の授業をうけているころ、母のイズミ・ヨコはスーパーに買い物に来ていた。リプライが飛んできた。店長「奥さん相変わらず若々しいね！ お子さんがいるとは思えねえや！」 水色ワンピース姿のヨコ。よく学生と間違われ、ナンパされる。ヨコは返信する。ヨコ「うふふ、当然なのよ店長」

(20)

ヨコは野菜と肉をカゴに入れ、お米売り場に向かう。ヨコ「5kgと10kgどっちにしましょ？」 ヨコは耳たぶクリックでお米売り場のＴＬを開く。「まあ、お向かいさんつたら50kgも……欲張りねえ」 そして5kgのお米をよいしょと担ぎ——そのままスーパーを出た。

(21)

店長「奥さんちよつとー！」 店長が必死の形相で追いかけてきた。ヨコ「あらなにかしら？」 店長「奥さん、今日はシウマイが5割引なんですよ！ 買っていただくさいよ！」 といってシウマイをヨコに渡してくる。店長「まったく、奥さん欲がないんだからっ！」

(22)

ヨコは車に乗り、行き先を自宅に設定して発進させた。そしてシウマイが5割引きであることの意味を考えた。ヨコ「つまり、いつもの感覚より2倍多く買ってもひんしゆくを買わないのよね。買っても買わない、うふふ」 ここはツイトピア。ＴＬで全てが管理されているので、お金はいらないのだ。

(23)

つばやね市は太平洋に面しており、年間を通してカラっとした気候。ノルコの父、イズミ・アフレルは臨海地区にある企業の研究所で働いている。家から車で30分のところにある。アフレル「うちっち！」 試験管が絵に描いたように爆発した。ネバネバした液体が飛び散る。アフレル「やっちまったか」

(24)

アフレルは服や髪やメガネについたネバネバを溶剤でふき取る。何作ってるんです？ アフレル「口に入れても大丈夫な糊を作ります」へえ、糊ですか。地味だけど重要な製品ですよ。ところでアフレルさんは絶倫なんですか？ アフレル「いたって普通ですが?!」

(25)

アフレルさんはなぜ化学製品に関わろうと？ アフレル「本当は僕、『火星』開発に行きたかったんですよ。でも学力が足りなくてだめでした」なるほど化学製品の『化製』と『火星』をかけてるんですね。ダジャレがお上手ですね、アフレルさん。アフレル「いや……そういうわけじゃ」

(26)

アフレル「私がここで働いているのは、たんに私がこの仕事をこなせるからです。私にできる仕事の中で緊急性が高かった仕事、それが『食べられる粘着剤の開発』だった訳です。平凡な理由ですよ」なるほど。ところで一人ツイトの多いアフレルさんを見て、同僚の方が心配そうな顔をしていますよ！

(27)

実験を終えたアフレルはデスクに戻った。夕日が海に沈もうとしていた。デスク上の電子フォトに家族の笑顔が写っている。アフレル「ふう、今日も良く働いたなー」アフレルが火星を目指したのは事実なのだ。そして彼は、火星に行けたら幼なじみのヨコに告白するつもりでいたのだ。

(28)

妻のヨコは昔からよくモテた。アフレルは自分と彼女では釣り合わないと思っていた。だがある日、アフレルは意を決してこうつぶやいたのだ。アフレル「もし僕が火星に行けたら、そこからヨコにプロポーズの手紙を送るよ」と。笑って流された。しかしヨコは密かにそのツイートをファボっていたのだ。

(29)

アフレルは一心不乱に勉強した。理系大学に進学し、修士課程まで進んだ。資格を得るための職務をこなしつつ、夜遅くまで勉強を続けた。しかし彼が第5次火星開発選抜に合格することはなかった。次の選抜は10年後。彼はあの約束は忘れてくれと、ヨコにDMを送った。

(30)

ヨコ《じゃあ私も一緒に連れてってくれるのね、火星に！》それがヨコから届いた返事だった。あれから月日が流れ、二人の子供が生まれ、今に至る。アフレル「そろそろ帰るか」外に出ると空に星がまたたいていた。アフレル「ちゃんと約束守らないとね」彼はそう呟きつつ家路についた。

(31)

ノルコ「おなかすいたよう……」学校から帰宅したノルコは自室でそうつぶやいた。今日はいつもの「おやつ」が置いてなかった

のだ。弟に聞いてみたところ。ワク「ヴェイ？ シュウマイなんて知らナッシン！」とのことだった。（今夜の食事はきつと荒れるなあ・・・） ノルコは率直にそう思った。

（32）

アフレル「ただいまー」 父のその声が夕飯の合図だった。ノルコはダイニングに飛んでいく。テーブルの上にたくあんが一切れだけあったご飯が置いてあり、その前で弟がグズっていた。ワク「whyばれたし」 ヨコ「みんなわかつちゃうんだから、ワクは悪い子ね」

（33）

弟のワク（セルゲイピッチ・ロマーノフ）は友だちとの交友で悪いことを覚え始めた。食卓でシュウマイを食べると、食卓ＴＬにその記録が残ってバレルけど、自室でコツソリ食べれば大丈夫だろうと思ったのだ。ヨコ「レンジでチンした時間が、ノルコが帰ってきた時より20分も早かったのよ？」

（34）

アフレル「だめじゃないかワク。ほら、ちゃんと謝って」 しかしワクは、たくあんご飯を持って部屋に閉じこもってしまった。きつと泣いている所を見られたくないのだろうと、そうノルコは思った。部屋のＴＬは人に見られないように、部屋主の権限でロックをかけられるのだ。

（35）

ノルコは夕食中、姉としてなんとか弟を更生させねばと思っていた。そこで弟に対してDMを送ることにした。DMは二人の間にか聞こえない、言わば心の声である。ノルコ《意地はつててもいいことないよ？ お母さん、目が本気なんだから》 しかし返事はな

かった。

(36)

そのころ母のヨコもまた、密かにワクにDMを送っていた。ヨコ《今の世の中、悪いことをするとなんでもすぐにバレちゃうの。でも良いことするとすぐに褒めてもらえるの。だからお母さんはワクに良い子になって欲しいの》しかし返事はなかった。

(37)

父のアフレルもまた、ワクにDMを送っていた。アフレル《ふほほー、やっぱり母さんの作る料理はうまいなあー。この生姜焼きさいこー！ふほっふ。ワクー、早く戻ってこーい。みんな待ってるぞお？》しかし返事はなかった。

(38)

三人ともDMに集中しているので、食卓は異様なまでに静かだった。一方、ワクは部屋の机につっぱしたままDMを受信していた。ワク(シヨウガ焼き……ウウイイ)こみ上げる食欲に負け、ワクはすぐごと食卓に向かった。どうやらアフレルのへんてこなDMが、一番効果的だったようだ。

(39)

ダイニングにやってきたワクに、三つの視線が注がれていた。ワク「ソーリー……」と言ってモジモジ。ヨコ「もつとちゃんと謝るの」ワク「あ、アイムソーリーなんだYO！」三人は互いに視線を交わし、そしてワクの方を見て、同時に言った。「日本語で！」

(40)

ワク「おやつ食べちゃってごめんなさい……」ヨコ「いいわ」そう言ってヨコはワクのシヨウガ焼きを暖めなおした。その日ワ

クはご飯を2回おかわりした。育ち盛りなのだ。ヨコはおやつを増やさなきゃと思った。ノルコ「ところでシュウマイ美味しかった？」
ワケ「オフコース！」

つづく

ツイートピア41〜61（前書き）

【登場人物】

ノルコ：主人公。小学五年生の女の子。自称けなげな美少女。

ルイ：ノルコの友だち。少し男の子っぽいしゃべり方をする。

レイタ：クラスで一番ツイート数の多い男の子。

謎の男：近ごろノルコの学校に出没する不審者。

【用語説明】

よるほー：「夜」とふくろづの鳴き声「ほー」をあわせた言葉。

5秒ルール：お菓子とか、床に落として5秒以内なら菌がつかないらしい。

BOT：プログラムに従ってフォロワーのツイートの真似をしたりする。

RT：リツイート。ツイートをおうむ返しすること。

ツイトピア41〜61

(41)

ノルコはお風呂に入ってパジャマに着替え、自室のベッドでゴロゴロしていた。ルイ「ノルの明日のアホ毛はね、きつと3本!」
ノルコ「そのアホ毛というのをやめなさい……」 時々クラスメートからリプライが飛んでくる。レイタ「おま! クソ長……」 即効ブロック。

(42)

ピヨッター「今日のシュウマイのうほほ」 机の上のひよこ型B
OTのピヨッターがわけの分らないことをツイト。ノルコ「今日はとんだシュウマイだったぜ」 ピヨッター「とんだアフレルの爆発糊」 ノルコはプツとふき出してしまった。ノルコ「はしたないわっ」

(43)

ノルコは部屋Tしを操作して三日分巻き戻した。三日前、友だちがノルの部屋に遊びに来たときの光景が再現される。ノルコ「あつ」
友だちのルイが床に落としたボツキーを、みんなに見られないようにコッソリ口に運んでいた。ノルコ「5秒ルール?!」

(44)

ルイ「だって、もったいないじゃないか……」 ノルコ「ちゃんと毎日掃除してるんだから。汚くなんかないんだから!」 ルイ「え!? そういう理由で怒ってるのか?」 ルイを小一時間問い詰めた後、ノルコはコロコロで丹念に床を掃除した。ノルコ「10秒だって1分だって大丈夫なんだから!」

(45)

いい加減じゅうたんがむしれてきたころ、母からDMが来た。ヨコ《よるほー》 ノルコ「あっ！」そしてあわてて時計を見た。10時を回ろうとしている。ノルコ「ねなきや！」 ノルコはベッドに飛び込むと、地球のみんなに向かって「おやすみー」とつぶやき目を閉じた。

(46)

ピピピ……ピピピ……。朝の目覚まし時計になる。ノルコはパッチリ目を開いて起き上がる。ノルコ「おはよ……う？」 自分の頭をさわってみたら、今日は寝癖がついていなくシットリしていた。窓の外からシトシトと雨音がきこえてくる。ノルコ「今日は雨なのかー」

(47)

ノルコは朝ごはんを食べる前にトイレに行く派だ。ノルコ「TLがないことを確認……と」そういつて耳たぶをつまむ。トイレ内にTLを置くことは法律で禁止されているのだ。ノルコは確認を終えると便座に座った。ちなみに、けなげな美少女はウ○コなんてしません。

(48)

食卓にて。ワク「マアム、ソイソースプリーズ！」 アフレル「おっ、ちょっと円安になったぞ！」 ノルコは厚焼き卵をご飯に埋めてギョウギョウ固めて、なんちゃって卵おにぎりにして食べるのが好き。ノルコ「うーん」 天気が悪いと何となく家の中が陰鬱だな、とノルコは思った。

(49)

ノルコは玄関の前でみんなを待つ。花柄傘クルクル。ワク「袈裟

斬り！ 袈裟斬り！」 弟は自分の傘（別名、聖剣シツシユバルト）で雨を切ろうと頑張るもズブ濡れだった。ルイ「のーるー」友だちがやってきた。ルイ「ノーアホ毛か」 ノルコはルイにチョップした。

（50）

ノルコ「あつ、またあの怪しい人！」 校門の近くに真つ黒なレインコートを着た謎の男が立っていた。一同はリプライどころか足まで止めてしまった。男「雨……レイン……今日は重大なことが起きそうだぞお？ ビバーチエ！」 そういつて男はスキップしながら去っていった。ノルコ「なんなのかー？」

（51）

ノルコ「はつくしゅ！」 算数の授業中くしゃみをしたしまった。ノルコ「ティツシュがないなう」 RT「ティツシュ RT「ティツシュ誰か RT「ていしゅー RT「ていしゅを誰に？ RT「亭主をノルに RT「ノルの亭主？ RT「どういことなの？

（52）

レイタ「なあ、なんで俺がノルの亭主なん？」 ノルコは問答無用でこぶしをみぞおちに叩き込んだ。レイタ「うふぐう！」 そして隣りのリンちゃんくれたティツシュを受け取り「ありがとう、みんな！」と言つて鼻をかんだ。あくまでもおしとやかに。ノルコ「ちーん」

（53）

次の授業はみんな大好き体育だ。みんなで跳び箱とマットをヨイシヨヨイシヨと用意する。ノルコ（なんか頭がボーっとするな……）ルイ「ノルコ顔赤いよ？ 風邪ひいたんじゃないか？」 ノルコ「しかし体育は休みたくないなう」 体育館の屋根を叩く、雨の音

が響いている。

(54)

跳び箱が得意な子のグループは、台上前転の練習をしていた。レイタ「俺、兄ちゃんからすっげえ技教わったんだぜー！」といってレイタは台上宙返りをやってのけた。「うおお」 体育館中がその大技にどよめいた。ノルコはそれを見て、ムツとしてしまった。勝手なことをしては危険が危ないじゃないか。

(55)

ノルコ「先生やっていいって言ってないじゃない、怒られるよ？」レイタ「なんだー？ ひがみかー？」 ノルコ「違うもん！ あのくらい私にも出来るし！」 レイタ「じゃ、やってみるよー」ノルコ「やらないよ！」 そう言い捨てて、ノルコは跳び箱に向かう。

(56)

ノルコ（宙返りくらい、出来るよ……） ノルコは助走の途中、ふとそう思ってしまった。ノルコ（ロイタ板を強くけって、体が浮いてから手を突けばいいだけなの） しかし、そんなことをする気はさらさらなかった。ノルコはただ台上前転をするだけのつもりだった。しかし……。

(57)

跳び箱が間近に迫っていた。ノルコはいつも通り飛ぼうと板に踏み込む。その時だった。ノルコ（んん？！） 頭の中がムズツとした。そして気がつけば板をかなり強く蹴ってしまった。体が予想以上に高く舞い上がる。ノルコ「うそ！」 あぶない！ その場の誰もがそう思った。

(58)

ノルコは前転とも前方宙返りともいえぬ、中途半端な姿勢で跳び箱に突っ込んだ。「キャアアアアー！」ツイートではない本物の悲鳴がその場の空気をつんざいた。頭から突っ込んだノルコは台の上でバウンドし、そのままマットに向かって放りだされた。誰もが啞然とし、凍りついた。

(59)

そしてノルコは気絶した。目を覚ました場所は保健室だった。保健医のリジエ先生がそばにいた。ノルコ(ううん……) リジエ「気がついたのね」先生は身を起こそうとしたノルコを制しつつ。リジエ「頭を強く打って気を失ったのよ、まだ横になっていた方がいいわ」ノルコは小さく頷いた。

(60)

リジエネ「どこか痛むところは？」ノルコは首を横にふる。特にどこも痛くなかった。リジエネ「そう、今は大丈夫でも後から症状が出るかもしれないから。あとで病院で検査するからね」ノルコは再び、ただ黙って頷いた。その様子を見て、先生が不審げに首を傾けた。

(61)

ノルコは決して大人しい子ではない。先生もそれを知っている。そのノルコがまだ一言もツイートしていないのだ。リジエネ「もしかして……ちょっと、何かつぶやいてみてくれない？」ノルコ「……う……」二人はみるみる青ざめた。ノルコは——つぶやけなくなったのだ。

つづく

ツイトピア62〜74

(62)

医者「ファイルが壊れている」 医者は出し抜けにそう言った。
ヨコ「えええ!？」 ノルコは今、母の付き添いで病院に来ている
のだった。『壊れてる』という単語にノルコしたたかビビッたわけ
だが、何せ咳くことが出来ないのだった。ノルコ（どうなっちゃう
んだろ……）

(63)

ヨコ「な、治るんです？」 医者「再インストールすれば良い」
そう言つて医者は、棚から小瓶を取り出した。そして中身をスプ
ーンですくう。群青色のいかにも毒々しい液体だった。医者「はい、
あーんして」 ノルコは小刻みに首を振った。どう見ても、マズそ
う。

(64)

医者「注射にする？」 ノルコは速攻で口をあけた。注射は古代
における拷問の一種である。もつての他だ。医者「じゃ、あーん」
ノルコ（?!?!@¥ !!!テ） なんと例えようのない味がし
た。強いて言うなら、水色のビー玉を溶かしたような味？

(65)

「ぎょくりっ」 ノルコはその怪しげな液体を一思いに飲み込ん
だ。横で母のヨコがおろおろしていた。医者「よしよし」 ヨコ「
え、もう終わりです？」 医者「はい、10日ほどでファイルは修
復されます……いや、2週間くらいだったかな？」 ノルコはとて
も心配だった。

(66)

つぶやけなくなったノルコ。風邪で熱も出てきた。けな気で可哀想な薄幸の美少女となったノルコは、自室のベッドに埋まっていた。ノルコ(うーん、うーん……) うなされ声すらＴＬに残らない。噂によると、人は１００日つぶやかないと死んでしまうらしい……ガクガクブルブル。

(67)

ルイ《ノル、無理しちゃだめだからね。明日はちゃんと休むんだよ？ ノートは私がつとくからさ》 友だちのルイからお見舞いDMが飛んできた。ノルコ(ありがとうルイちゃん、ついでに給食のミルクも……)と返信しようとしたが出来なかった。ノルコ(歯がゆいわ！)

(68)

《えつ、ほんとにツイートできなくなったの？》 《レイタのあんぼんたんが悪い！》 《ノルちゃんかわいそう……》 《１００日もかからないって絶対！》 《つぶやけなくても元気だして！》 次々飛んでくるDM。しかし返信できない。たんに言っただけノルコは切なかった。

(69)

ノルコは何が何でもツイートを返したくなった。「ぶお？」でも「うえい！」でも良いからとにかく返したかった。ひとまず踏ん張ってみた。ノルコ(んー！ んんー！ いえやあー！) ノルコ「つとpu%；1：ヴい」 変なのが出た！ みんな「無理しちゃだめー！！」×22ツイート。

(70)

熱がさらに出てきたようだ。ノルコはＴＬを閉じた。「けふつ、

けふつ」 咳は出る。しかしスイートにはならない。ノルコ（咳をしても……ノーツイート） 滅多に泣かないノルコも流石にちょちよ切れそうになった。これが100日も続いたら、ホントに死んじやうかもしれない。

（71）

トントン——ノックが鳴る。アフレル「はいるぞー、卵がゆだぞー」 ワクも父の側にいて心配そうにしていた。アフレル「あーんしてやるか？」 ノルコは首を横に振ってお椀とレンゲを受け取った。アフレル「大丈夫だぞ、すぐに良くなる」 そう言っ父は娘の頭を撫でてやった。

（72）

アフレル「父さんなあ、もう少ししたら仕事がひと段落つくんだよ。それでな、ノルコの病気がよくなったらな、みんなで旅行でもしようと思ってるんだ。どこがいいかノルコも考えておいてくれよ？」 そう言っ再びノルコの頭を撫でて、父はサツと部屋を後にしたのだった。

（73）

ノルコが『旅どんとcom』を調べていると、突然リプライが来た。レイタ「知ってるか？ コーヒーはカフェインで牛乳はセロトニンだから、コーヒー牛乳飲みすぎるとオーバードーズ起こすんだぜ？ 別名ゲリだぜ？」 なんのこっちゃ？ ノルコは普通にスルーした。

（74）

しかし何か気になって、ノルコはレイタのTLを訪問してみた。案の定、叩かれまくっていた。「お前何言ってんだ！w」「諸悪の根源！」「お前のかあちゃんズンダモチ！」もしかしてレイタなり

の贖罪なのか？ レイタ「ちよっ、最後のヒデエ！」 そんなわけ
ないか、寝よう寝よう。

つづく

(75)

チウンチウンというスズメの鳴き声とともにノルコは目を覚ました。「おはようー」と呟こうとするが、やはり出来ない。今日は大事をとって学校を休むことになっている。ノルコ（何して過ごそうかな？） そんなことを考えながらノルコは一階へと降りて行った。

(76)

食卓では父のアフレルがコーヒーを飲みながら新聞を読んでいた。アフレル「おっ？」 しかしアフレルはそれ以上なにも言わない、呟けなくなった娘に対し、どう向き合えばいいのか計りかねているようだ。ノルコはそのままキッチンへ向かう。ヨコがパンを切っているところだった。

(77)

ヨコ「あら、早いよね。もつと寝ていていいのよ？」 そう言つてヨコはノルコの耳たぶをつまむ。「36.8度。まだちょっと熱があるわね、休んでいた方がいいわ」 しかしノルコは首を振って否定した。必要以上に心配されるのはもう嫌だと思ったから。

(78)

ノルコは卵とフライパンを用意して、自分好みの完璧な半熟加減の目玉焼きを4人分作り、食卓に持っていく。お寝坊さんの弟ワクが目をこすりながら降りてきた。ワク「は、はうどゆーゆーどうー？」 心配そうに他人行儀な挨拶をしてきたワクに向かって、ノルコは親指をグツ！ と立ててみせた。

(79)

ノルコはトーストに目玉焼きを乗せて食べたら負けと思っている。アフレルはとても急いでいるようで、ワクと同時に食卓を立った。アフレル「今日は仕事の最終報告があるんだ」 呟けないノルコはケチャップでトーストに字を書いてみた。【いてらー】 アフレル「ふほっ」 ワク「イエア！」

(80)

ワクは家を出るとすぐ学校に向けてダッシュした。ワク(トウデイは姉ちゃんがイナツシン、アンビリバーボー) そんなミステリアスなフリーダムを感じながら走っていると、後ろから黒い影が迫ってきた。謎の男「ヒーハハー、ユーアーご機嫌ボーイ?!?! ビバーチエ！」

(81)

ワク「ホワツツ!？」 ワクは思わず走りながら身構えた。ワク「フーアーユー!？」 謎の男「ふふふ、僕かい? 僕はね、見ての通りのストレンジャーさ!」 そういつて男は腰をクネクネさせながら、さらにワクに迫ってきた。ワク「ヴェイイ?! ゴーアウエイ!」

(82)

ワクはもう二度と一人では通学しまいと思った。こんなに怖い思いをしたのは初めてだ。あれから200mばかり男は追いかけてきて、ワクに聞いてきた。男「お姉ちゃんは呟けなくなったんだな? だな?」 ワク「ホワイユーノウ!？」 男「H a H a H a ! 僕は世界の全てを知っているのさ!」

(83)

ワクは速攻で職員室に駆け込み、そして先生に報告した。先生は青筋たてて驚いて、ただちに呟音市ツイッターポリスに連絡した。不審者はシステムによって3秒以内に発見される仕組みだ。これで一安心だ。……しかし、その男は何故か捕まらない。2日後にワクはそれを知ることになる。

(84)

その頃職場にいたアフレルは、ワクから連絡を受けてビックリしたものの、ひとまず仕事をやっつけることにした。研究テーマである「食べられる粘着剤」の最終報告をまとめてデータベースに登録する。アフレル「ふう、これでまた一つ、この世の中の富が増えたぞ」アフレルは意気揚々としていた。

(85)

お昼休み、アフレルが妻の特製弁当を頬張っていると、取締役の人に呼び出された。アフレル「なんでしょう？」取締役「はいお疲れさん、これ辞令ね」アフレルは自分のデスクに戻り、その辞令の中身を読んだ。そこにはこう書かれていた。【価値ある研究をしてくれてありがとう、お疲れ様でした】

(86)

アフレルは昼から1時間ばかりかけて荷物を整理した。そして休憩所の窓から海を眺めつつ、しばしボーとしていた。同僚が声をかけてきた。同僚「よう、やったじゃないか！次はどこにいくんだ？」アフレル「うーん、そうだな……何しようかなあ」同僚「おいおい、しっかりしろよ！」

(87)

アフレルは研究テーマを消化したのでリストラされた。働く必要がなければ働かなくてもよい、ごく当たり前のことだ。アフレルは

3時前に早々と帰宅した。アフレル「なんだか不思議な感じだなあ」
そんなことを呟きつつ、アフレルはしばしぼんやりする。アフレル「……自由だ」

(88)

アフレルは仕事を達成したことへの感慨をひとしきり逡巡したのち、気を取り直して新たな職を探すことにした。耳たぶをクリックしてT1を表示し、就業に関するページを次々と開いていく。求人側と求職側が相互にフォローを投げ掛け合い、ベストなマッチングを模索していくのだ。

(89)

しばらくしてヨコが買い物から帰ってきた。今夜はハンバーグのようだ。キッチンに向かう途中ヨコは、職探しに没頭して口が半開きになっているアフレルを発見した。ヨコ「まあ、あなた！」ヨコは驚きのあまり、買い物袋を落としてしまった。ヨコ「リストラされたのね！」

(90)

ノルコ(宇宙の果てみたいな退屈さだよ……) 寝るのに疲れ果てたノルコが一階に降りてみると、そこには口を半開きにした父アフレルがいた。おまけに目の焦点もあっていなかった。ノルコ(な、なにこと?) そしてキッチンの方からは……。ヨコ「シクシク……シクシク……」

ツイトピア(91)

ノルコがキッチンに入ると、そこには濡れタオルで顔をおおって泣いている母のヨコがいた。心配になったノルコは、ヨコのエプロンをギュッと強く握ってしまった。テーブルの上には合挽き肉、まな板の上に玉ねぎのみじん切り……。これか。ヨコ「ノルコ、お父さ

んがね……リストラされたのよ！」

(92)

それからノルコは母とハンバーグのタネを作った。あとは夜になったら焼くだけだ。そうして部屋に戻ろうとした時ワクが帰ってきた。そしてやはり口が半開きの父を、怪訝な目つきでしばらく眺めていた。なんだか大変そうなお父さん。呟けないノルコは心の中でこう呟く。(がんばれお父さん)と。

つづく

(93)

朝。今日は金曜日で、明日はお休み。ノルコは「もう一日休んだら？」と言われたんだけど、退屈なので学校に行くことにした。ノルコ（つぶやけないからますます退屈なの） 昨日はワクが不審者に追いかけられたということで、ちゃんとみんなを待ってからの登校だ。ノルコ（るるんん）

(94)

ミニスカニーソ姿のルイがやってきた。くしくもノルコと同じ服装だ。目が合うと同時に火花が散った。ルイ「ノル！ 無事だったんだね！」 恍惚の笑みで駆け寄ってくるルイだが……。ノルコ（みきった！） ルイ「なにい！？」 ルイの手はノルコのスカートを狙っていたのだ！

(95)

ノルコは自身の股間に迫り来る手を手刀で切り払うと、そのままルイに抱きついた。そして膝の先でそつとルイのスカートをまくりあげた。ルイ「ひやう！」 秘儀『スカートめくり返し』だ。ルイ「私の負けだとっ？」 そしてルイはくず折れた。スカートをめくり、最近女の子の間で流行ってるらしい。

(96)

ルイ「どうやら……心配することは何もないみたいだね」 ノルコはウンウンとうなずいてから、親指をグツ。ルイ「熱は下がったんだ？」 ウンウンうなずいてグツ。ルイ「今日の給食は五目おこわだぞ？」 ウンウン、グツ。ルイ「本当につぶやけないんだね……」 うグッ！

(97)

いつもの穏やかな通学路だった。近所のおじいさんが道端を掃除している。プブーとクラクションを鳴らしながらゴミ収集車が走っていく。オートカーが等間隔を保って道路を進んでゆき、空ではカラスがカアカアいいながら、コンビニの窓を拭くお兄さんを見張っている。今日も世界はいつもだ。

(98)

昨日のバラエティ番組のこと。今日の宿題のこと。いつの昔のかわからないギャグ。ワク「ゲッツ、ゲッツ」友達「ゲラゲラw」下の学年の子の会話もいつも通り。でもノルコのクラスメートはリン「私もなんか風邪ぎみかも、あっ」エリ「あのアイドルは無口なところが、おっ」

(99)

ルイ「そんでさー、うちのオヤジの会社がすっぱくなっちゃってさー」ノルコはウンウンと相槌をうつ。ルイ「そーいやノルコんとこのお父さんって……あ」ノルコ(?) ルイ「ごめん、答えようがないよね、呟けないんだし」気にしないでと伝えるために、ノルコは精一杯の笑みを浮かべてみた。

(100)

3時限目はつぶやき史だ。いつもは寝る気まんまんの子達も、今日はしっかりクオ先生を見ている。ノルコがつぶやけなくなったことが、少なからず影響しているようだ。つぶやきの秘密を知りたいという、好奇心の目が先生に注がれている。クオ(こ、これはこれでやりずらいんだお……！)

(101)

ノルコの顔をチラと見て、その空気を読んだクオ先生は核心となることから説明することにした。つまり体内ツITTERの仕組みについてだ。クオ「昔パソコンと呼ばれていた機械が、今は僕らの体の中に入ってるって話は前回した通りだお。今日はそこところを詳しくやっていくんだお」

(102)

クオ「人間の体はたくさんの要素で成り立っているお。赤血球とか白血球とかミトコンドリアとか細胞とかのことだお。それと同じようにして、ナノインサートイド・エレクトロ・デバイスというものが入ってるんだお(だ、誰か寝るかな……?)」みんな「ジー」クオ「だ、だお」

(103)

クオ「略してNED。これは顕微鏡じゃないと見られないくらい小さな電子部品で、僕らの体に大体3〜5兆個入ってるといわれているお。この部品がお互いに連携しあって、僕らの中に一つのコンピュータを作り上げてるんだお」みんな「ふむふむ」クオ(き、緊張するお……)

(104)

クオ「NEDも一種の機械だから、衝撃とかでたまに壊れるんだお。たとえば過去に、カミナリに撃たれて全身のNEDがショートしちゃった人がいたんだお。でも『リゲインスト』という薬を飲むことでちゃんと回復したんだお」そういつて先生はニッコリ微笑んだ。

(105)

だからちゃんとノルコの病気もなあるんだ、ということを理解して安心した何人かがバタバタと眠りについた。クオ(なんだかこっ

ちもホツとしたんだお） ノルコ（リゲインストってあの青いドロ
っとしたやつのことかな？） そしてノルコは、その味を思い出し
て鳥肌をたててしまった。

（１０６）

クオ「そのリゲインストって薬のほかに、『インスト』っていう
薬があるんだお。これはNEDを持たない人がNEDを導入するた
めに飲む薬なんだお。でもきつとみんな、そんな薬は一度も飲んだ
ことがないと思うんだお。何故だと思うお？ それには深い歴史的
理由があるんだお」

（１０７）

クオ「インスト薬は、実は人間が作った薬じゃないんだお。ビツ
クリなことに機械が作った薬なんだお。量子コンピュータという
物凄い計算機を使って、最も便利な通信機器とは何かという問題を
計算させた人が昔いたんだお。そしてそれは、どういうわけかドロ
っとした液体だったんだお」

（１０８）

クオ「その液体が、体内にコンピューターを作ってしまうものだ
とわかって、みんな困惑したんだお。そして何年にもわたる物議を
醸した末に、爆発的に普及したんだお。NEDを使うかどうかは個
人個人で判断すればいいってことになって、だんだんNED無しで
はいられない世の中になっていったんだお」

（１０９）

クオ「そして事件は起こったお。NEDはなんと遺伝するものだ
ったんだお。NEDを持つ親から生まれた子供は、みんな体内にN
EDを持っていたんだお。気づいても後の祭りだお。半世紀もしな
いうちに、人類の９９％がNEDを持つようになったんだお」

(110)

クオ「そしてNED化された人間社会は、政治・経済・文化、あらゆる分野において変貌をとげて、そして今の世の中が形づくられていったんだお……」　そこでチャイムが鳴り響いた。教え子は全員の眠りの底におちていた。クオ「じゃあ今日はここまでだお。ちやんと復習するお」

(111)

ノルコ(う、うう……　今日も寝てしまったか)　そして耳たぶクリックで授業終了を開いた。インスト薬がなんたら、というところまでは記憶がある。ノルコ(ふむふむ……なるほど)　そして驚愕の事実に出ちのめされた。ノルコ(スペクタクルだなあ……現実感がないわ!)　ルイ「ん、ノル?」

(112)

ルイ「寝ぼけてるのか?」　ノルコはじつと自分の手のひらを見つめ、そして見比べるようにルイの顔を見上げた。ノルコ(私達の中には私達の良く知らないものがいっぱい詰まっているんだ……)　そしてルイの手をギュツと握った。ルイ「えっ、なに?」　ノルコ(人類恐るべし!)

ツィートピア113〜130

(113)

今日の給食は五目おこわ。ちょっと珍しい。ノルコ（もぐもぐもぐ） ノルコは赤飯とかおこわとか、ずっと嚙んでたらお餅になるかなって思っちゃうタイプ。ノルコ（もぐもぐもぐもぐ） でもみんなは、ノルコが呟けないから、その代わりにやたらモグモグしてるんだと思っちゃった。

(114)

ノルコのクラスでは5〜6人で席を作り給食をとる。ノルコの島はカズノリ、レイタ、ルイ、リン、ヤマオの6人。委員長キヤラのカズノリに絡みまくるレイタに女子らが冷えた突っ込みを入れるのが定番。そして少し不思議な少年のヤマオなのだが……いや少しどころじゃない。

(115)

ヤマオはなんと生まれてから6回しか呟いたことがない。これは世界的なレアケースだ。その内容は「おぎゃあ」「うにゆる」「とでもいうかと」「右の上」「暑いと?」「それがいいと」特に4つ目の「右の上」は学術的研究にも取り上げられたりする。何かと注目されているのだ。

(116)

そんなヤマオが今、五目おこわをもぐもぐし続けるノルコをジッと見つめてるではないか！ 7度目の呟きな予感が、教室中、いや世界中に吹き抜けた。ノルコ「もぐもぐもぐ」 ヤマオ「ジー」 ノルコ「もぐもぐもぐ」 ヤマオ「ジー」 ノルコ「もぐもぐもぐ」

もぐ」　しかし何もおこらなかつた。

(117)

レイタ「グアツテム!!」　痺れを切らしたレイタがヤマオを羽交い絞めにし、そのふくよかなアゴの肉をタプタプ。そして拝みたくなるほど豊かな福耳をビーン。カズノリ「や、やめなよレイタ君……せ、世界を敵にまわすよっ」　レイタ「てめー!　今日という今日は絶対つぶやかす!」

(118)

ヤマオに加えてノルコまで喧かないので、ノルコ達の島はやけに静かだ。人一倍つぶやくレイタも今日は空回ることが多く、ついに黙ってしまった。レイ「リン、髪伸びてきたね」　リン「うん、肩にかかつてきちゃったの」　ぽつぽつと喧く二人だが……。レイタ「つまんねーの」

(119)

レイ「レイタ!　あんたね!」　レイがバーンと立ち上がった。レイ「誰のせいでノルが喧けなくなっと思ってるんだ!　まだあんた謝ってもないでしょ?!」　ノルコがあわててレイの袖を引くが。レイタ「しらねーよ!　こいつが勝手に俺の真似してコケたんだろ!?!」

(120)

レイ「真似じゃない、うつったんだ!　周りのやつに引つ張られてそうなっちゃうことあるって、ウイキにも書いてあるんだからな!」　この年頃の男子が口げんかで女子に勝つのは難しい。レイタ「……んだよ、喧けないからってなんだよ!」　そう言って走って出て行ってしまった。

(121)

ルイ「食器片付けやがれバーカ！」 ノルコはどちらかと言えば困っていた。ルイの肩を抑えつつ首をぶんぶん振る。そして気づけばクラスみんなに対し頭を下げていた。ルイ「なんで謝ってんのさ！ もう……」 その気持ちをどう説明すればよいかわからないノルコ。出来たとしても呟けないのだ。

(122)

ひとまずノルコは座った。ルイ「ごめん、ついカツとなつて」ルイは悪くない。そしてみんなが言うほどレイタも悪くない。跳び箱の件では、実はノルコにも非があった。レイタを見返したい気持ちが少しはあったのだ。ノルコ(ううう) すっかり冷えこんでしまった教室の空気、どうしよう。

(123)

ヤマオ「おこわうまい」 ノルコ(！?) ルイ「え！ なに？」 クラス中「シャベッタアアアアア！」 全世界「ギヤアアアアアアアア！」 シャベッタアアアアアアアアア！」 ヤマオが……しゃべった！ こんな時に！ 七番目の呟きはなんと、「おこわうまい」だった！

(124)

ヤマオの機転(?) によつて給食時間のピンチを乗り切ったノルコは、午後の授業をつつがなく済ませて家路へとついた。あの後クラスの話題はヤマオの7度目のツイートで持ちきりで、海外の研究者からも詳しい状況を知りたいという問い合わせが殺到するほどだった。

(125)

たぶん今も教室で、ヤマオのツイートに関するリプライが飛び交

っている。ノルコもそれに加わりたかったのだが、なにぶん呟けない身だ。ノルコ（つぶやけないって、つまんない！）　そうノルコがため息をついたその時。　謎の男「フフフ……ビバーチェ」　ノルコはゾットした。

（126）

目の下に濃いクマのある怪しげな青年がそこに立っていた。ウネウネした黒髪で顔が半分隠れている。そして襟の高い黒のコートで全身を包んでいる。ノルコ（この人、昨日ワクを追いかけた人だ！）　特徴が一致していたのですぐにわかった。　謎の男「ふふふ、そんなに警戒しないでくれよ」

（127）

謎の男「ああ、君はまるで鳴声を失った小鳥のようだね」　ノルコ（なんで知ってるの?!）　謎の男「僕は何でも知っている。そう僕は知りすぎた男なのさビバーチェ！」　男はまるでノルコの心を読んだようにそう呟き……いや。　ノルコ（この人、つぶやいてない!）　なんと彼の言葉はTLに映らない!

（128）

この世界の人は言葉を口にすればそれがツイートになる。逆にツイート能力を失えば言葉を口に出来なくなる。今のノルコがその状態だ。しかしこの青年はツイートすることなく言葉を口にしている。それはつまり。ノルコ（ネイティブ?）　そう、それは生まれつき体内ツイッターを持たぬ者のことだ。

（129）

謎の青年「ふふ、それはちょっと違う」　青年は指をチッチとやり、おもむろに髪をかき上げた。ノルコ（!?!）　なんと青年には耳が無かった。あれでは耳たぶクリックが出来ない。　謎の青年「

僕はね、昔々とある事情でツイートを失ったんだ」 事情はわかったが……しかし。ノルコ（私に何の用？）

（130）

謎の青年「何の用事があるのかと君は思っているね？」 ノルコ（だから何？） 通報してしまおうと、ノルコが耳タブに手をあてると。謎の青年「君は僕を通報しない。その代わり僕についてくる」 ノルコ（なにゆえ？） 謎の青年「僕が君の病気の治し方を知っているからさ！」

ツイトピア131〜166

(131)

ノルコは知らない人について行くほどお尻は軽くない。ぷんつとそつばを向いてその場を後にした。ノルコ（しかし、何か気になる）特にあの失われた両耳が。そして何もかもを見通したような、あの言動が。振り返えってみると、男はちょうど曲がり角に消えていくところだった。

(132)

ノルコ（ちよつとだけ……）ノルコはいったん道を引き返し、近くのマンションの植え込みに隠れて、あの青年の動向をうかがった。謎の男「トウルツトウ」、ルーララ、やあ！」男はクルクル周りながら通りを歩き抜け、時々通行人に唐突な挨拶をして驚かせていた。ノルコ（風変わりだわ！）

(133)

ノルコ（ただの変わった人なのかな？ 本当に悪い人ならとつくに捕まってるだろうし）体内ツイッターによる監視網が徹底された今は、歩きタバコ犯でさえ一瞬で捕まってしまう世の中だ。ノルコは男が角を曲がったのを見計らうと、小走りでその後を追いかけた。ノルコ（どこに行くんだろ？）

(134)

男は太い通りから、徐々に入り組んだ住宅地へと進んで行った。体内PCのナビがあるので迷子になることはないが、追跡がだんだん難しくなっていく。ノルコは男の後ろ10mくらいを歩き、一戸建ての塀や植え込みに隠れながら尾行をつづけた。しかしとうとう

見失ってしまった。

(135)

ノルコ(あれね?) あちこちキョロキョロしてみるも、どこにも居ない。そしてハツと気づく。君は僕について来る、という青年の言葉通りのことをしてしまった。ノルコ(口惜しいわ……)そして諦めて引き返そうとしたとき。「ビバーチェ！」ノルコは飛び上がった。

(136)

謎の男「ほうらやっぱりついて来た！僕んちすぐそこだよ、カモン！」そういつて青年はノルコを担ぎ上げた。ノルコ(！~~~~)謎の男「ハハハ！」男はそのまま100mほどダッシュ。その先にあつたのはなんと……ツイッター互助協会の施設だった。謎の男「ただいまー！」

(137)

教会ではなく協会だ。ふつう十字架とかが立ってそうな場所に鳥の姿をしたモニュメントが飾ってある。ツイート鳥だ。ノルコ(あわわ……)男は建物の中に入るとロビーのソファーにノルコを下ろした。謎の男「君はここでちょっと待つ。おばさんが紅茶を運んでくる」

(138)

男はの奥へと消えていった。どうやら何人かの人がここで共同生活をしているようだ。ノルコがどうしたものかと思案していると、お茶のポットを持ったおばさんが、たまたま通りがかった。おばさん「あら？」ノルコがあわてて立ち去ろうとすると。おばさん「お待ちなさい！」

(139)

おばさん「そこに座って、お茶でも飲みながらお話ししましょう？
何か事情があつて来たんでしょ？」 ノルコ（困ったなあ……）
話そうにも呟けないし、来たというより連れてこられたのだ。お
ばさん「まあ、もしかして呟けない？ 何かあつたのね。ともかく
いったん落ち着きましょうね」

(140)

おばさんは茶器とスコーンを持ってきてノルコにふるまった。お
茶はハーブティーのようだ。本当は別の所に持っていくものだった
のだろう。ノルコはまるで自分が、迷える子羊になつてしまったよ
うな気がして、ぶるぶると恐縮してしまった。おばさん「遠慮し
なくていいのよ、どうぞ召し上って」

(141)

ノルコはそう言われてお茶を一口。ノルコ（おいしい！）おば
さん「ここはスイッター互助協会。世間では『スイートピア』なん
て呼ばれているわね。スイート社会になじめない人や、問題を抱え
た人達の相談にのったり、保護をしたりしているの。あなた小学生
？」 ノルコはコクコクとうなずく。

(142)

おばさん「下校してすぐここに来たのね。何か帰れない事情があ
るのかしら？ ときどき家出して行き場がない子がたずねてくるこ
ともあるのよ、ここは」 ノルコはぶんぶんと首を振った。そして
建物の奥の通路を眺めた。あの男の人はどこに行ってしまったんだ
ろう？

(143)

おばさん「無理して呟かなくてもいいのよ。落ち着いたら少しず

つ教えてくれればね」 その時、あの男が戻ってきた。黒コートを脱いで、白のカッターシャツ姿になっていた。謎の男「おばさん！ その子呟けない病気なんだよ！ 僕の言うとおりにくつついてきたから、そのまま連れてきちゃった！」

(144)

おばさん「またお前が連れてきたのかい？ これで何人目か……まあ仕方ないわね」 ノルコ(また?) 謎の男「それよりおばさん！ またユウタがふさぎ込んでるよ！」 おばさん「そうだよ、いま昼のおやつにしようと思ってたんだけどね」 謎の男「よし、じゃあみんなでお茶しよう！」

(145)

謎の男「さあさあ！ こっちこっち！」 男はノルコの手を引つつかむとグイグイ引つ張っていく。謎の男「おばさんお茶とお菓子もってきてね！」 おばさん「ちょ、ちょっとお前！ お待ちなさい！」 男は通路の奥の部屋を開けて中に飛び込んだ。謎の男「友達を連れてきたよ！」

(146)

部屋の中にはワクと同じくらいの歳の少年がいた。床の上に座りこんで、うつむいている。視線の先には2体のBOTが置いてある。猫型BOTと犬型BOTだ。二人が入ってきてても少年は微動だにしない。遅れておばさんが来た。おばさん「やれやれ、まったくこの子は……」

(147)

おばさん「ごめんねお嬢ちゃん、この人もこの職員なんだけど、ちょっと変わったところがあってね……」 男は少年の側にしゃがみ込んで話しかけた。謎の男「さあ、BOTばかりみてないで、

(152)

ユウタ「あああああー！」　ホウ「ユウタ君！」　ホウは咄嗟にユウタを抱きしめた。そして一緒になってオイオイ泣き始めた。ノルコとおばさんは、わけも分からず立ち尽くしていた。やがて。ホウ「ちよつと待ってるんだ！　すぐ楽にするよ！」　そういつてホウは部屋を飛び出していった。

(153)

ホウはすぐに戻ってきた。なにやら旧式の薄型ディスプレイを抱えてきて、ユウタの前にドンと置いた。おばさん「あんたそれは！」　ホウ「今こそこれを見せる時なんだ！」　見せるつていったい何を？　ノルコはだんだん怖くなつてきて、足がすくんできた。少年の慟哭がただ事じゃなかったから。

(154)

ホウ「ノルコ。君はいま僕に説明を求めている」　ノルコ（だから何なの！）　ホウはディスプレイの電源を入れた。そこに表示されていたのはTLのようだった。しかし見たことも無いほどの超高速でTLが流れている。ホウ「これは、グローバルタイムライン、GTLだ」

(155)

ホウ「GTL。この世の全てのツイートが流れるタイムラインだよ！」　ノルコはその名前は知っていたが、見るのは初めてだった。そして少年は泣き続けていた。ホウ「さらにこれがパーソナルタイムライン、PTLだ」　そういつてスイッチを押す。すると今度は、訳のわからない暗号の羅列が表示された。

(156)

P T L？ そんなものは聞いたことがない。　ホウ「P T Lは通常、その存在が公開されていない。個人情報をも分に含むもの、というより個人そのものだから」　ホウはノルコの顔をキッと見つめて言った。ホウ「そしてさらにその上位T Lが存在する。それが…グロスオブP T Lだ！」

(157)

グロスオブP T L、何だそれは？　ノルコはもうわけがわからない。そしてふと気がつく。ユウタが泣き止んでいる。そしておそらくユウタ自身のP T Lが表示されてるのであるうディスプレイを、ボーッと覗き込んでいるのだった。ホウ「グロスオブP T L。それはつまり、神のT Lだ！」

(158)

ホウ「神のT Lは全ての苦しみを癒す。全ての孤独を埋める。そして、この世の全てを見るものに教える！」　そういったホウはスイッチに指をかけた。おばさん「やめなホウ！　それを見せたらその子もお前みたく……！」　ホウ「だけど今この子に必要なのはこれなんだ！　ノルコ、君も見るかいい？」

(159)

ノルコは直感的に理解した。このグロスオブP T Lこそが、ホウがノルコの病気を治せると言った理由なのだろうと。　ノルコはディスプレイを見つめた。呪文のように暗号化されたT Lだ。ホウがスイッチを押せば、そこに全世界の人間の意志が、暗号化されて表示されるのだ。

(160)

ノルコは咄嗟に両目を手で押さえた。見ない、絶対に見てはいけない。眩けない病は早く治したいけど見ちゃいけない。戻れなくな

る。そんな気がする。　ホウ「フッフ……そうだね、それで良いんだ、君は」　カチツとスイッチが押される音がした。数秒してもう一度カチツと音が鳴った。

(161)

ホウ「もう目を開けて大丈夫だよ。お茶にしよう！」　ノルコが恐る恐る目を開けると、少年ユウタの表情が見違えるほどに明るくなっていった。ユウタ「リツちゃん……いつでも一緒なんだね……もう痛くないんだね！」　その代わりにおばさんが顔を抑えてシクシクと泣いていた。

(162)

ユウタは驚くほど元気になり、お腹がすいたと言ってお菓子をねだってきた。4人はロビーに戻ってスコーンを食べ、紅茶を飲みながらお話をした。ノルコは聞いているだけだったけど、ユウタが幼馴染みのリツちゃんの事をあまりに楽しそうに話すので、ついつい顔がほころんでしまった。

(163)

ノルコの事情を理解したおばさんは「このバカモンが！」と言ってホウの頭を叩いた。ホウは「すべてはGPTLの思召しさ」といつてとぼけた。なぜホウがGPTLを見れるのか、ユウタの幼馴染に何があったのか、それをノルコは聞かないでおくことにする。もう帰らなきゃいけない。

(164)

ユウタ「また遊びに来てね、お姉ちゃん！」　ノルコは3人に手を振りその場を後にした。そして家路を歩みつつ色々と反省する。今日起きたことをお父さんが知ったらきつと酷く怒られる。お父さんは普段はアレだけど、怒ると本当に怖いのだ。ノルコは想像して

ブルブル震えた。

(165)

道路を横断するため歩道橋を渡るノルコ。呟音市の光景が目の前
いっぱい広がる。手を繋いで買物に行く親子。道路を行き交う自
動車の流れ。マンションの影からちよこんと覗く、あの協会のツイ
ート鳥。いつもと同じ景色のはずなのに、いつもと違う景色に見え
る。ふとノルコはそう思う。

(166)

不意に、ノルコの瞳に一筋の雫が伝った。ビクリして思わず袖
で拭う。ノルコ(今日の私、なんだか変……) 帰ろう。ノルコは
強くそう思う。暖かいご飯と優しい家族が待ってる自分の家へ。ノ
ルコはキツと前を見て、静かな微笑みに満ちる街角を、一目散に駆
けていった。

ツイトピア（番外編）（前書き）

震災に向けて。

ツィートピア（番外編）

（1 i）

話は3年前に飛ぶ。21世紀も終わろうとしていたある日、東京湾の沖合い200kmの地点でマグニチュード8の地震が起きた。太平洋湾岸に位置するノルコが住む岬音市は、激しい横揺れの後に大津波に襲われたのだ。

（2 i）

ノルコが学校から帰宅した直後だった。ノルコは母のヨコと、当時まだ保育所に通っていたワクと身をよせあって地震に耐えた。直後にアフレルからツィートが来た。アフレル「大丈夫か！」そうして安否確認を済ませると、ノルコ達は歩いて避難場所の学校に向かった。

（3 i）

父アフレルの職場は太平洋湾岸に位置する研究所だった。鉄筋コンクリート造の研究所は、津波が来た際の避難場所に指定されていた。アフレル達職員は屋上に上がり、一切のツィートを伏せて避難。困難者の声を探った。

（4 i）

研究所から500mほどの個人住宅に住むお年寄りが、徒歩で避難していることがわかった。津波到達まであと15分という速報が緊急ツィートされていた。間に合わないかもしれない。警察も消防も間に合いそうに無い。アフレル達は直ちに救出作戦を立てた。

（5 i）

大至急、車を回すようオートカーコントロールに申請してみるもパニック状態だった。そこで自衛隊の予備役だった研究員の一人が、自ら車を運転して現場に向かうことになった。その間アフレル達は、津波の状況を調べて知らせることに全力を挙げることになった。

(6 i)

沖合いに出ていた漁船は、全て波に対して船を立てていたが、漁港付近にいた1隻が波を乗り越えられず転覆した。数名が波に飲まれて見えなくなった。連絡を受けていたレスキュー隊がスクランブル出動し、ヘリコプターによる決死の救助を開始した。

(7 i)

出発した研究員がお年寄りの元にたどり着き、連れて戻ってきてまもなく、津波の第一波が到来した。研究所1階のガラスを突き破り、2階の上まで水が押し寄せた。高さ4 mの大津波だった。アフレル達は身を寄せ合い、海へと去って行く引き潮をい眺めながら、いま生きていることに感謝したのだった。

(8 i)

津波が完全に引くころには、全ての人の安否状況が確認された。犠牲者が波に飲まれる際のラストツイートは丁寧なフィルタリングされたが、間に合わず見てしまった人が数人いて、後にカウンセリングを受けることになった。ノルコ達は避難場所の体育館からアフレルと連絡を取り、互いの無事に安堵した。

(9 i)

体内ツイターの普及により、自然災害による被害は最小限に抑えることが可能になった。しかし、今なお救いきれない命は存在する。時代がどんなに豊かになっても、技術がどんなに進展しても、人々の生きるための戦いは終わらないのだろう。

(10 i)

翌日の昼には呟音市は平常通りの活動にもどった。ノルコのクラスでは地震に関する臨時講習が開かれ、そこでノルコは父の職場の人達が、逃げ遅れたお年寄りを救ったことを知った。ワクはその日一日、父親自慢ツイートをして不謹慎だと母のヨコに怒られたりした。

(11 i)

その夜ノルコは犠牲になった人のために何が出来るのかを考えた。でも答えなどあるわけがなかった。そんなノルコに父はいった。「祈るしかない」と。祈ることでは何が救えるのか、今はまだわからない。でもノルコは祈ることにした。大きな明るい月の夜空に向けて未来のために。

ツイードピア167〜184

(167)

ノルコは家につくと、静かにドアを開けてソーッと中に入った。いま父に見つかったらきつと「殺すぞ！」と言われてしまう。ソーッと、あくまでもソーッと。アフレル「おかえり、ノルコ」居間からノツソリと父が現れた。ノルコはゾーっとした。

(168)

アフレル「遅かったね」そう言つて父はノルコの肩を掴んだ。以前、ノルコが黙つて門限をやぶった時、父アフレルはこう言つたのだ。アフレル「誰かにノルコを殺されるくらいなら、いま父さんが殺してやるぞ！」と。どんだけ心配したんだろう。

(169)

帰宅が遅れた言い訳をしようにも、ノルコはつぶやけないのだった。小刻みに顔を振つてオロオロしていると、父は出し抜けにこう言つた。アフレル「ヤマオ君がしゃべったんだってね！」ノルコは一転して顔を縦にウンウン振つた。ヤマオ君は本当に偉大だ。

(170)

どうやらヤマオ君が七度目のツイートをしたことは、父アフレルが仕事探しを中断してしまうくらいの衝撃をもっていたらしい。ノルコの帰宅が遅れた理由もそれだと、すっかりアフレルは信じ込んでいて、変な人について行つたとは微塵も思つてないようだ。

(171)

部屋に入つてすぐヤマオ君のTシャツを開く。相当なリプライがヤマオ君宛てにあつたはずだが、それでもツイート数は七つのままだっ

た。『おこわうまい』 ヤマ才君はこのツイートでノルコを助けてようとしてくれたのかな？ ノルコはそう聞いてみたかったけど、残念ながら呟けないのだった。

(172)

そのころ、耳のない青年ホウ（本名キナシ・ホウジ）は協会の詰め所で液晶ディスプレイをいじっていた。調子が悪いようだ。ホウ「画質がとつてもバルラツチョ」 おばさん「そりゃ何年前の代物だね」 17インチの極薄LCD。ざつと半世紀前の代物だ。

(173)

ホウは体内ツイッターを持っていない。そのため、こうして旧式のディスプレイに電子回路を組み込むという古典的手法でもってツイッターを使用しているのだ。今日やつと協会のコネで増設メモリを手に入れて組み込んだところだ。ホウ「ビバーチェ！」

ツイートピア（174）

グロス・オフ・パーソナル・タイム・ライン

ホウは設定を終えると、GPTLを表示させた。全世界の人間の心の声が、おびただしい速度で流れていく。その様子はまるでナイアガラの激流のようだが、それでも前よりスクロールが滑らかになった感じがする。

(175)

ホウ「クルミナーレ！」 イタリア語で絶頂を意味する言葉を発したのち、ホウは癲癇の発作を起こして気絶した。おばさん「もういわんこっちゃない」 おばさんは慣れた様子で、ホウの足を引っ張って部屋まで運んで布団をかけた。ホウはその布団の中で、ヌクヌクと眠りについた。

(176)

おばさん「まあ頑張りなよ、われらが英雄さん」　そう言っておばさんは、耳のないホウの頭を撫でて退室する。ホウはムニヤムニヤ言いながら、まるで子供のような寝顔で眠っている。そして事実、彼はいま子供の頃の夢を見ていたのだった。

(177)

ホウは捨て子だった。ホウを育てあぐねた両親は彼にツイッターアンインストール削除の薬を打ち、万が一にも耳たぶクリックが作動しないようにと耳まで切り落とし、そして道端に捨てたのだった。彼は運良く協会に拾われたが、ツイッター能力は元に戻らなかった。

(178)

子供の頃のホウは、ツイッターを失っていたためか、まったく他人と交流しなかった。ありとあらゆるコミュニケーションを拒絶し、部屋にこもって本を読むばかりだった。そしてある日、思いついたように古典電子技術の勉強を始めたのだ。

(179)

おばさん（当時はお姉さんだった）をはじめ、協会の人たちはホウの変わりように困惑した。彼は彼が学ぶために必要なあらゆるツールを要求してきた。そしてやがてその意図がわかった。彼は彼なりの手段でツイッターを取り戻そうとしていたのだ。

(180)

彼が古典式タッチパネルでのツイートを取り戻したのは11歳の時だった。体内ツイッターのバイオロジネットワークと、古典的ワールドワイドウェブの接続を確立することは、専門家でも難しいことだ。しかし彼は自力でそれを成し遂げたのだった。そして彼はさらに独自の研究を続ける。

(181)

一人一人の人間をノードとして自然生成されているバイオロジィネットワークだが、ホウはその中にコアとなる領域を見つけた。すべてのツイートが必ずその場所を通るといふポイントだ。彼はその場所を「世界の中心」と名づけ、そこに接続するための専用機器を作った。

(182)

その過程でホウはパーソナルタイムラインを発見し、そしてまた神のTLとでも言うべきGPTLを発見した。そしてそのストリームを眼にした瞬間、彼の世界の全てが昇華した。光が弾け飛び、鐘の音が鳴り響き、限らない幸福感と万能感に包まれたたのだ。

(183)

ビバーチエ——イタリア語で「快活」を意味するその言葉が、ホウの口癖になったのはそれからである。その後ホウは、自分で開発したGPTLディスプレイを使って、心に傷を持った多くの人を救ってきたのだ。あたかも奇跡の人のように。それが彼が「英雄さん」と呼ばれる所以である。

(184)

ホウ「ううん……」　ホウは30分ほどで眼を覚ました。起き上がって軽く腕を回す。首をひねる。立ち上がって屈伸運動をする。ホウ「オウエイ」　どうやら調子が良いようだ。そして彼は、本来彼が知るはずもないその言葉を、最大限の確信をもって口ずさんだのだった。ホウ「おこわうまい」——と。

ツイートピア185〜205

(185)

ノルコはカレーライスをぐちゃぐちゃにする人とだけは結婚したくない主義。ワク「チェーンジ！」　ワクはもう2杯目のおかわり。そして父アフレルは落ち着かない様子でキョロキョロ。ヨコ「どうしたのあなた？」　アフレル「いやーその」　ワク「チェーンジ！」　アフレル「食うの早いなあワク」

(186)

アフレル「えーとだ、父さん思ったより早く暇になっちゃって、明日あたりどつか遊び行こうかなって」　そしてノルコをチラと見る。まだノルコのツイートは治っていないのだが。アフレル「どこか行きたいところある？」　するとノルコはすかさず手をあげた！　ノルコ「\$あ；r1」　そしておろした。

(187)

アフレル「ノルコ？」　ノルコは「てへっ」と頭を叩くと、メモ用紙をとりだした。そこには「東京のおうち」と書かれていた。アフレル「東京？」　ヨコ「あんな田舎に？」　ワク「チェーンジ！」　そこでノルコはテーブルの上に手をおき、カタカタと何かを打つしぐさをする。アフレル「あっ、そうか！」

(188)

ヨコ「何かわかったの？」　アフレル「ノルコは頭がいいな、その手があったな」　と言ってノルコに向かってグッ！　ノルコもグッ！　ヨコ「??」　アフレル「いけばわかるさ。ということで明日は東京の爺さん婆さんに会いに行くぞ！」　ワク「チェーンジ！」

げふっ」 ヨコ「ワク、食べすぎよ！」

(189)

翌日、一家はアフレルの実家がある東京に向かった。東京は呟音市から車で1時間ほどの場所にある大田舎だ。かつて日本経済の中核だった街は、超高層だんだん畑と首都高速水田、大地下トンネル促成栽培場からなる食料基地になっている。ヨコ「いつ見てもすごい街」 誰がこうなることを想像しただろう。

(190)

アフレルの両親、ノルコにとっては祖父母にあたるイズミ・クメゾウじいとウメナばあ。名前から察する通りあまり仲はよくないんだけど、トヨスの造成地に住んでいて、かぼちゃとかとうもろこしとかを作っていて、ときどきモンゼンナカに繰り出してオールしたりするハイカラな人達なのだ。

(191)

青々と風になびく稲草の海を抜けて車は走る。巨大なドーム型集光屋根をくぐり、色とりどりの果実がゆれる高層だんだん畑を見送る。やがて潮の香がかすかに漂う、見晴らしの良い畑作地にたどり着く。見渡す限りの畑のなかに民家が点々と建つそのなかに、アフレルの実家はあるのだ。

(192)

クメゾウ「おい、うおーい！」 遠くで手を振っているのはクメゾウお爺さんだ。農作業の途中で抜け出てきたらしい。迷彩柄のニッカポツカに麦藁帽子、トレードマークのサングラス。アロハシヤツから伸びるごつごつした腕も、シワのよった顔も真っ黒に日焼けしている。クメゾウ「よおーきたのー！」

(193)

ノルコとワクは車を飛び降りると、まっしぐらにクメゾウおじいちゃんの元に駆けていった。クメゾウ「いよう！ チビっこども！」ワク「イエア！ グランパ！」といって飛びつくワクをおじいちゃんは軽々と持ち上げる。力仕事でこぶ立った手、老いてますます盛んなのだった。

(194)

クメゾウおじいちゃんは、ノルコ達の知らない遊びをたくさん知っている。まるで歩く玩具箱のような人なので、ノルコもワクもおじいちゃんが大好きだ。本当はノルコも「ヘイ！ ジーじ！」と言って飛び込みたかったのだが、つぶやけないことの氣後れが少しあったりして。

(195)

クメゾウ「んん？ なんじゃノルコ？ さつさと来んかい！」そういつてホレホレとワクを担いでない方の腕を差し出す。ノルコは“うん！”とうなずくと、その腕に飛びついた。おじいちゃんはノルコの体を持ちあげて、あつという間に肩の上に担いでしまった。

(196)

アフレル「父さんただいま」 近くの空き地に車をとめたアフレルがやってきた。クメゾウ「おー、よく来たな！ 仕事は見つかったか？」 アフレル「いや、それがまだ」 クメゾウ「なんだ、お前まだニートなのか！」 アフレル「に、ニート？ 父さんそれいつの言葉？」

(197)

クメゾウ「はっはっは、まあ今では遠い昔の言葉だな！」 ヨコ「うふふ、昔の方は何かと大変だったんですよねー」 クメゾウ「

うんむ、そうなじやぞー。ワク、ノルコ。ヨコさんは相変わらずベ
ッピンさんだのー、うちのヒキニートにはもったいないわ！」　ア
フレル「ひ、ひどお！」

(198)

ヨコ「うふふ、私の旦那はヒキニート。うふふふ。ところで、お
義母さんはお庭に？」　クメゾウ「ああ、かぼちゃ畑の雑草抜いと
るわい、いって手伝ってやってくれるかのー。さあチビども！　今
日はなにして遊ぶかな！　H a H a H a！」　そういつて二人を担
いだまま家の中に入っていつてしまった。

(199)

ヨコが家の裏のカボチャ畑にいくと、ウメナがせつせと除草をし
ていた。紫色のレギンスにシルクの長袖シャツ。ひさしの長いピン
ク色のバイザーをかぶり、首の日焼けを防ぐためのスカーフがなん
ともお洒落。そのシャンとした姿を見るたびにヨコは「あんな歳の
とり方をしたいもだわ」と思うのだ。

(200)

ヨコ「お義母さん、来ました」　ウメナ「よお嫁か。じいさんは
どこ行ったい？」　ヨコはさりげなく手袋をはめつつ。ヨコ「お家
へ」　ウメナ「あんのくそじい！　野良仕事を嫁にまかせて孫と
遊んどるんかい、ドタワケ！」　と言いつつカマを手に取り立ち上
がる。　ヨコ「いつものことですね！」

(201)

ウメナ「いつかキンタマ刈り取ってやるわ！」　と言いつつカマ
をぶんぶん振るウメナさん。ウメナ「ところで用意はしてきてるん
だね？」　ヨコ「はいもちろん」　手袋の上に腕抜きをはめている
ヨコの装いは、もうばっちり農作業仕様になっていた。ウメナ「ふ

んっ、イビリがないね！」

(202)

太陽の下、草をむしって汗流す。薬剤は使わないポリシーだ。大変だが一つ一つこだわりのこもった野菜が出来る。ヨコ「実も大きくなって」 ウメナ「そろそろ収穫できるね」 ヨコ「毎年楽しみなんですよ、お義母さんの力ボチャ」 ウメナ「世辞はいいから手を動かし」 口は悪いが本音では喜んでいたり。

(203)

ウメナ「ノルコの調子はどうなんだい？」 ヨコ「まだ治る気配は……。お医者さまが言うには有機パラメトリの再結合がなんとら……。」 ウメナ「細かいことはログを読んだからいいよ、友達とうまくいってないとか無いんだね？」 ヨコ「それはありがたいことに、みんな良い子たちで」 ウメナ「うむ」

(204)

ウメナ「しかしあの歳の頃が呟けないなんてのは、しんどいだろうねえ」 ヨコ「ええ、時々無理やり呟こうとしたり。こっちも何とか察して代弁してあげるんですけど……。歯がゆいです」 ウメナ「ノルコはもつと歯がゆい思いをしているはずさ」 ヨコ「ええ」 ウメナ「早く治るといいんだけどねえ」

(205)

ヨコ「そういえば、ノルコが何かを思いついたみたいで」 ウメナ「あ？」 ヨコ「呟けなくても呟ける方法とか。でも教えてくれないんですよ、アフレルさんは気づいたらしんですけど」 ウメナ「呟けなくても呟ける？ なんだいそれは？」 禅問答のようなその問いに、二人はそろって首をかしげた。

(206)

クメゾウ「ゲンじいさんのパソコンなら仏間の押入れじゃ」ノルコはアフレルとともに仏間にいた。アフレル「まずは仏様を拝もう」そして仏壇のろうそくを点け、遺影をとりだす。先祖代々の写真の中からアフレルは、二つを選んで仏壇に立てた。アフレル「お爺さんお婆さん、遊びにきたよ」

(207)

羽織袴のいかめつらしい表情をした人はアフレルの祖父で、ノルコにとっては曾祖父にあたる「イズミ・ゲン」お爺さんだ。そしてその隣、白いワンピースに麦藁帽子姿の若い女の人は「イズミ・ミチコ」ノルコの曾祖母にあたるが、若くして亡くなったためアフレルも会ったことが無いのだという。

(208)

チーンと仏鈴をならし、二人は手を合わせた。アフレル「よし、じゃあ探そうか」仏間の押入れを開けると、いつの昔のものかわからない電気機器がホコリをかぶった状態で詰まっていた。このキラキラした丸いのはDVDと言らしい。ノルコ「??」アフレル「それはノルコにはまだ早いな」

(209)

ややしばらくして、押入れの奥から一台のノートパソコンが出てきた。二人ともホコリまみれ。クメゾウ「だがパスワードがかかるとるぞい。ほれ王手！」どうやらワクと将棋をして遊んでるらしい。ワク「サンドウィッチ！リバーズ！」クメゾウ「それは

オセロじゃ！」

(210)

誰も知らないゲン爺さんのパスワード。でもノルコは覚えていたのだ。4つか5つのころ、ノルコはお爺ちゃんの膝の上で、PCを起動させるところを見ていたのだ。ノルコはゲンお爺さんにこう聞いた。ノルコ「これなんてよむのー？」 ゲン爺さんは言った。ゲン「ツイト、ウイズ、ブレイビー」

(211)

ノルコ「ぶれびー？」 幼い頃のノルコに、その意味がわかるはずがなかった。しかし今ならわかる。そしてノルコ自身の名前と生年月日、それがゲン爺さんのPCを開くパスワードだ。「twee t | w i t h | b r a v e r y | 5 0 5 n o r u k o」 ノルコはただたどしい手つきで入力し、そしてリターンキーを叩いた。「ウエルカムWINDOWS」

(212)

ウィンドウズXYZが起動され、背景画面に3人の赤ちゃんが写し出された。ゲンお爺さんの3人の孫の写真だ。つまりそのうちの一人はアフレルということになる。とぼけた口元が特徴的だ。ノルコ（お父さんかわいい！） お父さんに言ったらどんな顔するかな？ ふとノルコはそう思ったり。

(213)

アフレル「この赤ん坊はいつたい誰なんだろうね？」 とかやっぱりとぼけつつ。アフレル「ノルコのお目当てはこれだろ？」 そう言っつてさざ波のような形をしたアイコンを指差す。ノルコ（ツイーブ……これだ！） そしてアイコンをダブルクリック、ついクセで耳たぶクリックしそうになる。

(214)

ツイッター 12.4 これは当時最先端のツイッター用ブラウザだ。フローワー同士のネットワークを図式化したり、自分のツイートがどう波及していったかを解析する機能があり、かつ直感的に使いやすい構成。体内ツイッターの普及によりその役目を終えたが、今でもご高齢の方が使用していたりする。

(215)

ツイッターの最終バージョンである12.4は、体内ツイッターとの接続をサポートしている。よってこのブラウザを使えば、眩けない病気にかったノルコでもツイッターが出来るのである。しかし、その設定方法は古の彼方に忘却されてしまい、知る者は少ない。

(216)

ひとまずノルコは適当に何かツイートしてみることにした。ゲン「あーあー」 当然だが、ゲンお爺さんの名前で眩かれてしまう。ノルコ(ルイちゃんに手伝ってもらおう) そしてアフレルの助言も得ながら、何とかしてルイのプロフィールを検索し、そしてフォローした。

(217)

ノルコはルイに何か話しかけようと、たどたどしくキーボードを手にかける。アフレル「じー」 アフレルが覗き込んでいる。ノルコ(うーん) 書いている途中の文章を見られるのって何だか気恥ずかしい。アフレル「ん？」 どうやら気づいたようだ。アフレル「お父さん畑を手伝ってくるよ！」

(218)

空気を読める父をもったノルコは幸せ者だ、そう思いつつ文章作

成にとりかかる。ゲン「ルイちゃん。わたしノルコ」しかし反応がない。ルイのステータスは読書中になっている。たぶん自室でマンガを読んでいる。しばらくして。ルイ「ど、ど、どちらさまででで?!」明らかに困惑してる。

(219)

ノルコが状況を説明しようと文章をつづっていると今度は。カイザワ「ふ、ふおおお……」ヨシシゲ「げ、ゲンじいさんが……」ギンジ「黄泉帰りよったあああああ!」なんだが大変なことになってきたぞ。ノルコはだんだん焦ってきて、おでこには冷や汗までにじんできた。

(220)

ゲン「えと、私ゲンおじいさんのhmご、のることいいま〜」焦ってキーボードを打ったのでメチャクチャになってしまった。カイザワ「うおおー! なんまんだー! なんまんだー!」ヨシシゲ「どーまんせーまん!」ギンジ「ベントラー! ベントラー!」ますます大変なことに。

(221)

ノルコ「ゲンおじいさんおpcかりてます!」必死に事情を説明するも埒が明かない、お父さんと呼ばうと思ったその時。ルイ「ノルコなの? お爺ちゃんのpcからツイートしてるの?!」ノルコはそのリプライをすぐさまリツイートした。ありがとうルイちゃん。

(222)

カイザワ「おお! そういうことか!」ヨシシゲ「ゲンさんのお孫さんとな!」ギンジ「とうとうゲンさんがお迎えにきたのかと思っただわwww」ノルコはホッと胸をなでおろす。ルイ「いき

なり95歳のお爺ちゃんから呟かれて何事かと思つたよ!」

(223)

ゲン「めんごめんg」 ルイ「いや、別にいいんだけどね。とにかく呟けるようになったわけだ」 ゲン「でもmんどの、キー打つの、へんかんも」 ルイ「え?」 カイザワ「キーボードなんぞよく打つのー、わしらでもよう使わん昔の機械なのに」 ルイ「ええ?」

(224)

ルイ「ごめん、ちょっとググるわ」 キーボードなんて古代の代物は、最近では殆ど知られていないのだった。ゲン「お爺ちゃんの膝の上でめてたから」 ヨシシゲ「賢いのう! 5つかそこらだったろうに」 ギンジ「ゲンさんに似たのだろうな、あの人も切れ者であつたし」

(225)

ルイ「ノル……君は1世紀も昔の機械を使っているのかね」 ゲン「うぬn」 ルイ「??」 ゲン「まちがい、うんうん」 ルイ「そ、そう……。まあ大変そうだけど頑張つて」 ゲン「んはnを二回押すと出る」 ルイ「へええー、なんか大変そうだけど面白そうでもあるね」

(226)

ゲン「ゲンお爺さんはこれでしゃべるより早くしゃべつてた」 ヨシシゲ「まあ、昔の人はみんなそうだったのう。ブライントタッチといつてな、手元を見ないでキーを打つんじや」 ノルコは試しに、キーを見ないで打つてみた。ゲン「あwse d r f t g y ふじこ」 想像を絶する技術だった!

(227)

ゲン「むryだー」 ヨシシゲ「まあ、今はもう失われし古代の技である」 ノルコは画面の前でフウと一息ついて、そして何を呟こうかなと考える。ノルコ（初対面のおじいちゃん達と何を話せば良いのか？） そのとき。 ウメナ「お、お義父さん！？」 ヨコ「どうして呟かれてるんです？！」

(228)

ノルコ（あわわ…… やっぱりお爺ちゃんの名前で呟くとみんなを驚かせちゃう……） ノルコはこの作戦はやっぱりあきらめようと思った。知らない人に迷惑をかけてしまう。「私はゲンお爺ちゃんの子孫のノルコです、みんなを驚かせるのでやっぱり呟くのはやめます」そうツイートしようとした、その時。

(229)

アシオ「ゲン爺さんが生き返ったと聞いてやってきました！」
サトコ「ああ？ ゲンさんがよみがえったって？ ウメナとうとうイカレたかい？」 イシゾエ「いやあ、どうやらゲンさんのお孫さんのようだあ」 ヨネクラ「え？ ゲンさんの孫さんって男ばっかじゃなかったけ？」

(230)

ルイ「ゲンさ…… じゃなかったノルコ！ 私の呟きリツイートして！ みんな混乱してる！」 アフレル「ノルコ、お父さんのツイートもだ」 ヨコ「ああ、なんだノルコだったの」 ウメナ「へえ、うまいこと考えたもんだね、義父さんのPCまだ生きてたんだね」

ツイートピア(231)

ステイブ「oh！ ミスターゲン！ ナツカシイ！ 101」

チヨウン「わー、何だか懐かしいクラスタが沸騰してきてるね！」
ケンイチ「ゲンさんって確か、ちょっとしたツブヤキストだった
よね。まとめウィキないかな」ジブ「何だ何だ！ 祭りか！」
アゲオ「よくわからんがめでたい、酒だ！」

(232)

ノルコの意味とは関係なく、ゲンお爺さんと付き合いがあった人や、当時の世相を知っている人たちが勝手に集まってきて盛り上がってしまってる。まもなく「#FUKKASTU | GENN」というハッシュが立ち上がり、飲めや歌えやの大騒ぎになってしまった。ノルコ(うーん何だかもう、どうでもいいや！)

(233)

どんちゃん騒ぎを横目に見つつ、ノルコはゲンお爺さんのプロフィールを見る。フォロワー数750に対し、フォロワー数は4000人程度。ノルコの間感としては少な目な方だ。故人とはいえ、お年寄を召した方ならフォロワー数が数万に達していてもおかしくないのだ。

(234)

ノルコ(本当に大事な相手しかフォロワーしない人だったんだ)
当然、その550人の中にノルコも含まれている。最後にフォロワーした相手から10番目にはワクが登録されていた。PC版のツイッターなので、使用者が亡くなってからもTLはどんどん進行していくわけだ。

(235)

ゲンお爺さんのTLを流れるどんちゃん騒ぎを眺めていると、ノルコは何だか、まだゲンお爺ちゃんが生きているような気がしてきた。まだ小さなノルコを膝の上にのせ、シワシワの手でマウスを操

作するお爺ちゃんが、今ここにいるような、そんな気が。ノルコ（お爺ちゃん……元気にしてるかな？）

ツイートピア236〜251

(236)

ゲンお爺さんの最後のツイートは家族も知人もみんな知ってる。もちろんノルコも知ってる。ゲン「喜びは光、すべてに感謝」 麻酔でぼんやりとした意識の中、お爺さんは最後の力を振り絞ってそう呟いた。そして翌朝、静かに息をひきとったのだ。

(237)

ノルコはゲンお爺さんのT.Lを遡っていく。お爺さんがツイッターを始めたのが12歳の時。それ以来のツイートが全て詰まっているので、どんなに頑張ってもその一部しか見ることが出来ない。よほど根気よくT.Lを遡らないといけない。だからお爺さんの若い頃のことは、誰にもわからないのだ。

(238)

ノルコが聞いた限りでは、ゲンお爺さんはちよつとした論客だったそうだ。昔から社会問題に強い興味をもっていたお爺ちゃんは、体内ツイッター移行期の混乱の中で精力的な活動を行った一人だ。ノルコ（昔は体内ツイッターなんてなかったんだ！） ノルコはその時代をうまく想像できなかった。

(239)

時は2030年代。体内ツイッターは海外の一部でひそかなブームを起こしているだけのものだった。しかし、時の3大国、アメリカ、中国、インドにおいて本格的な普及が始まると、世界の情勢は大きく変わり始める。

(240)

当初、日本やEU諸国では導入反対の声が大勢を占めていた。人が、従来の人としての形を失ってしまう。そんな危機感が強かったのだ。しかし経済活動に体内ツイッターが用いられるようになるのとたとえ反対論を唱える人であっても、それを使わざるを得ない状況が生じてきた。

(241)

体内ツイッターを導入するか否か。その問いに対するゲンの答えはこうだった。ゲン「導入は不可避な流れだ。だから賛成とか反対とか言っていないで、導入に向けたガイドラインを考えるべし」そしてこうつけ加えた。ゲン「しかし私自身は決して体内ツイッターを使用しない」と。

(242)

体内ツイッターはコンピューターによって開発された装置だ。大規模量子演算機が膨大な計算の末に導き出した究極のコミュニケーションツール。その機能には未解明な部分が多々あった。ゲン「体内ツイッターは遺伝するかもしれない」当初は一笑に伏されたその発言は、後に的中することとなる。

(243)

『このままでは世界は、全ての人間が監視しあう究極の監視社会、デリストピアになってしまう！』過激な反対勢力が活動をはじめ、世界のあちこちで血生臭い事件がおきた。それに対しゲンはこう反論した。ゲン「ツイッターには監視能力はない、一人になりたい時はいつでも一人になれるのだから」

ツイートピア(244)

また、それと正反対の主張もあった。『体内ツイッターを使って

全ての人間の行動を把握すれば、犯罪も事故も自殺も無くなる、活用すべきだ！』 それに対するゲンは。ゲン「監視には抜け穴が常に存在する。強い監視はより深い抜け穴を作るだけで意味が無い。それよりも私は、人の善性を信じたい」

(245)

自由で透明感のある意思疎通は、人の心を正しく明るい方向へと導くだろう。そんな性善説のような考えから、ゲンは体内ツイッターの価値を認めていた。しかし、その副作用を十分知らないうちに見切り発車するのは良くないという理由で、ゲン自身は使用を拒んでいたのだ。

(246)

しかし実際に「遺伝する」という体内ツイッターの副作用が知られるのは、普及してしばらくたってからのことだった。後から知って深く後悔する者は後をたたなかつたし、ゲン自身も深く反省したものだ。もっとしっかり反対すべきだったのではないかと。

(247)

ゲンとミチコの間にも生まれたクメゾウは、体内ツイッターを持たぬ者として生まれた。ゲンはクメゾウが12歳になるまで体内ツイッターの使用を認めず、12歳の誕生日に決断させた。クメゾウはその日のうちにインスト薬を打った。もうバイオツイッターなしには成り立たない世の中だったのだ。

(248)

クメゾウお爺さんからアフレルお父さんが生まれ、そしてノルコとワクが生まれた。ツイッターを体内に宿す者として。ノルコ(ゲンお爺ちゃん)のつぶやきは、どれくらい今の歴史に影響しているんだろう?) ふとそんなことを考えたりするノルコだった。

(249)

一般庶民のつぶやきが、世界の歴史を左右すると考えるのは難しい。しかし時にはほんのささやかな呟きが、多くの人のリツイートによって増幅され、無視できないほどの大きな力をもつこともある。ゲンのツイートの他にもそんなツイートがあつたのかもしれない。可能性は誰にも否定できないのだ。

(250)

tweet with bravery——勇気をもってつぶやく。そんなゲンお爺さんの言葉が、ノルコは少しだけわかつた気がした。ノルコ(はうっ!) ビクっとなって振り返ると、ノルコの後ろにお父さんやお母さん、ワクもクメゾウお爺ちゃんもウメナおばあちゃんもいて、みんなでPCを覗き込んでいた。

(251)

クメゾウ「パスワード覚えとったんかい!」 ヨコ「こんな古い機械がよく動くわね」 アフレル「どうだい、友達とはしゃべれた?」 ワク「イエア! イツクール!」 ノルコはなんだか恥ずかしくなってしまうて、首筋をぽりぽりとやった。ウメナ「さ、ぼちぼち切り上げな。もうお昼だよ」

ツイトピア252〜285

(252)

将来は良妻賢母になるんだとノルコは心に決めている。一度PCを終了させて台所に向かう。畑で採れたカボチャをウメナお姉さん(そう呼ぶように言われている)と一緒に料理するのだ。ウメナ「ちよつと若いカボチャだからお団子にしようか」ノルコは注意深くカボチャを切ってレンジにかけた。

(253)

ウメナ「友達とはちゃんと喋れたかい？」レンジの中をジーッと覗き込んでいるとウメナがそう聞いてきた。ノルコはちよつと首をかしげ、そっぴやそれどころじゃなかったなと思い起こす。ウメナ「別のことに夢中になってたってかい？」ノルコはウンウンとうなづく。

(254)

ウメナ「ゲン爺さんのフローワーさん、まだあんなにいたんだねえ。何か発見はあったか？」ノルコはちよつと考えて、そして首を横にふった。ウメナ「そりや残念だ」ノルコはその言葉に首を傾げる。ウメナ「ゲン爺さんのことは私に良くわからないんだ、口数の少ない人だったからね」

(255)

ウメナ「ちよつとは名の知れた弁論家だったらしいけど、ミチコ義母さんが亡くなってからとんと喋らなくなっちゃった」ノルコの表情が無意識のうちに真剣になる。それをウメナは見逃さなかった。ウメナ「ミチコお義母さんのこと、聞きたいのかい？」ノル

コはウンと強くうなずいた。

(256)

ウメナ「ミチコ義母さんと会った事は3回しかないんだ」ウメナは食事の準備をしながら続ける。「家に遊びに行ったのが2回、残り1回が入院してからのお見舞いでだ」ノルコはウメナお婆ちゃんとかメゾウお爺さんが中学校以来の仲であることを知っていた。

(257)

ウメナ「体が弱いわけじゃなかったのにね、うちの畑を作ったのもミチコ義母さんだったんだよ。本当に、ガンっていうのは嫌な病気だね」そしてウメナは遠い目をする。ウメナ「綺麗な人だったよ、遺影もそうだけど、あんな麦わら帽子が似合う人はそういないやね」

(258)

ウメナ「ノルコ、自分から呟けない以外に支障はないんだね？」ノルコはうなずく。ウメナ「ミチコ義母さんの若い頃の写真があるよ、少ないけどね」それは是非見てみたい！ノルコは思わずジャンプしてしまった。それを見てウメナはニツと笑う。そして二人の間に数枚の画像が投影された。

(259)

野菜畑を背景にしたゲンとミチコのツーショット。二人とも宇宙服を思わせるデザインの「東京都公式農作業服」を着ている。すらっとした体形で長い髪を後ろに束ねていて、こうして見ると病気で亡くなったのが嘘のようだ。ウメナ「入植した時の記念写真だね」ノルコはまじまじと画像を見据えた。

(260)

イズミ・ミチコは第二次緑園都市計画における東京入植者の一人だ。南東北州の高校の園芸科を卒業している。いつどこでゲンお爺さんと知り合ったのか、それはウメナお姉さんも知らないらしい。ウメナ「こっちの写真は私がつたんだよ」それは台所で料理をしているエプロン姿のミチコだった。

(261)

ウメナ「ミチコ義母さんの作るかぼちゃ団子があまりに美味しかったんでね、教えてもらったんだよ」写真の中のミチコは、もうもうと湯気の上がるカボチャを、片栗粉と一緒にボウルでこねていた。ノルコ(！?) ノルコはしたたか驚いた。なんと素手でこねていたのだ。

(262)

ウメナ「こねる時に一さじのサラダ油を加える。それがイズミ家に伝わるカボチャ団子の作り方だ。でもやっぱりこねる時の手の感覚なんだね、あの美味しさを生んでいたのはさ。私は何回作ってもあの味にはならないんだ、不思議なことだね」ノルコは思わずうなづいてしまった。

(263)

その時ちょうどレンジがチンと鳴った。カボチャを取り出して火の通りを確認する。ウメナ「どうだい？」スーッと箸が通った。ノルコはOKサインを出す。そしてボウルの中にカボチャと片栗粉をいれ、一さじのサラダ油を加えた。ウメナ「やってみるかい？」ノルコは「おーっ」と手を上げた。

(264)

もくもくと湯気を立てる熱々のカボチャ。ノルコはぐつと息を飲む。ミチコおかあさんはやっていた。そして私はそのひ孫。やって

出来ないわけが無い！　そう意を決して手を突っ込んだ。　ノルコ（！！）　熱くて飛び上がりそうになった。片栗粉をうまくからめて混ぜないと確実にやけどする。

（265）

ウメナ「……ほう、やるじゃないか」　ノルコの眉間にびびりシワがよる。熱くて熱くてたまらない。でも我慢してかき回していく。指先は真っ赤だ。ウメナ「あんまし無理するんじゃないよ？」　でもやる、最後までやりとおす。なぜならばノルコは、健気で勇敢な、お料理上手な美少女なのだから。

（266）

なんだかんだでノルコは最後まで混ぜきってしまった。すぐに流水で手を冷やす。しばらくヒリヒリしそうだ。ウメナ「よくやったノルコ。これでお前さんも立派なイズミ家の女だね」　さあ、あとは焼くだけだ。やがて台所にたちこめる香ばしい匂い。ノルコは胸がいっぱいになった。

（267）

そのころちょうど、食卓の長机でクメゾウとアフレルがビールを一杯やっていた。クメゾウ「くーっ、仕事のあとのビールはやっぱりめえな！」　アフレル「父さん、さっきまでワクと遊んでなかった？」　クメゾウ「こまけーことはいいんだよ！」　アフレル「まあ、それもそうだね！」

（268）

ワク「ぶはーっ、ヒック！」　ヨコ「麦茶で酔っ払ってるの？　ワク」　クメゾウ「なあー、アフレル。仕事ねなら紹介するぞ？　この辺はいくらだって人手がいるんだ、ブラブラしてねーで一つやってみたらどうだ？」　アフレル「いやあ、大丈夫だから」　ワ

ク「ホワッツ、ニート、イズイット？」

(269)

クメゾウ「ニート(NEET)ってのはな、当時最先端っていわれた職業のことよ。ニード(NEED)から点々としてニート。つまり何か重要なもんが欠けてても特に問題はねえ、必要じゃなくなることたあねえってことだ！」　ワク「インタレスティン！」　アフレル「父さん意味がわからないよ」

(270)

クメゾウ「親父がよくばやいてたんだがな、昔は働かない奴はメシ食っちゃいけなかったんだ。大変な時代だったろーな」　ヨコ「ええ、それだといつも誰かが飢え死にしなきゃいけなくなっちゃう」　アフレル「全員分の仕事をいつも用意するなんて不可能だからね」　ワク「アンビリーバボー！」

(271)

クメゾウ「だからって、いつまでも無職でいいわけじゃねえんだぞ？」　アフレル「わかってるよ、ちゃんと探してるって」　クメゾウ「ま、変な仕事が好きなお前のことだ、時間はかかるのかもしれないねえ。でもいい加減妥協しろよ？」　アフレル「うん、でももうすぐ見つかりそうな気がしてるだ」

(272)

ヨコ「ねえねえあなた。いったいどんな路線で探してるの？」　アフレル「うん、まあ、やっぱあれだね」　ヨコ「あれ？」　ワク「ホワッツ、ザット？」　アフレル「夢のある……感じのかな！」　そういつてアフレルは照れくさそうにアゴをさすった。何だかみんな、ため息が出てしまった。

(273)

クメゾウ「まあ……夢もいいが、夢だけじゃ食えねえぞ！」ヨコ「うふふ、そうですね。ところでさっきからいい匂いがするんだけど、何を作っているのかしら」ノルコがウメナと一緒に料理を作っている、他のみんなは待っていてと言いついて。みんな、それとなくそわそわしているのだった。

(280)

まもなくウメナが皿を持ってやってきた。ウメナ「お前ら！今日のノルコの手作りだ！ありがたくいただけーい！」ドーンと置かれた皿の上で、焼きたてカボチャ団子が湯気を立てている。ヨコ「あら美味しそう！」クメゾウ「ほづ、これはなかなか」クメゾウはさつそく箸を伸ばした。

(281)

ウメナ「たわけーい！」一瞬で叩き落とされる箸。クメゾウ「なにすんじゃい！熱いうちに食うたろうかと思ったに！」ウメナ「先にやることあるんだよ！」すると台所から、小皿を手にしたノルコが歩み出てきた。ヨコ「ノルコ？」小皿にはもちろんカボチャ団子が乗っている。

(282)

ノルコはそのまま仏間に進むと、ゲンとミチコの遺影の前に小皿を置いた。そして正座し、仏鈴を鳴らし、厳かに手を合わせて瞑目した。クメゾウ「フム」アフレル「ああ、なるほど」ヨコ「……ノルコ」ワク「オーマイガッ」何となくみんな、そつちを向いて手を合わせてしまった。

(283)

ノルコは戻ってくると、さあ食べて食べてと手をバタバタさせた。

ヨコ「ノルコもこの味を伝授されたのね！」　クメゾウ「じゃあ食うぞ！　腹が減って減ってたまらんだ！」　クメゾウに続いて、みんなも次々と手を伸ばし始めた。ウメナ「ふふん、じゃあ他の食いもんもぼちぼち出すかね」

(284)

ウメナの手によって次から次へと食事は出され、いつしか食卓は料理でびっしりに。ノルコが作ったのはカボチャ団子だけだったので、ノルコはまだまだ修行が必要だなと思った。でもみんな喜んで食べてくれたので、ひとまず満足することに。ノルコ（少しでもミチコお姉さんの味に近づけたかな？）

(285)

お茶を飲んで一服して、落ち着いたところで帰ることになった。クメゾウ「これ持ってけい！　ノルコ」　そう言つてクメゾウはノルコに例のPCを手渡した。クメゾウ「ここにあっても仕方がないしな」　ノルコはウンと頭を下げた。そして帰りの車の中ずつと膝の上に抱えて、大切に持ち帰った。

(286)

ホウ「ベアトリーチェ！」　なにやら人名のような言葉を叫んでホウはぶっ倒れた。おばさん「またかい」　ホウ「おお……マイスイート……マイディア」　おばさん「??」　ホウは顔を赤らめ、両手で胸を押さえて高揚しているようだ。おばさん「もしか……恋!?」　しかし一体誰に？

(287)

ヨコ（あら……何だか寒気がするわ）　ヨコが街角で背筋を振るわせていた。彼女は今「古着パッチワーク英会話教室」の帰りである。ヨコ（今夜はおでんにでもしようかしら？　暑いからって冷たいものばかり食べてちゃいけないわ）　さっそくヨコはアフレルにリプライを飛ばした。

(288)

アフレル「おでん?!　いいね！　ガンモドキいっぱい入れてね！」　アフレルは面接先から即効リプライを返してきた。ヨコ「決まりね」　ヨコはそそくさといつものスーパ―に入って行く。ところで奥さん、旦那のことニートとか言っておきながら無職なんです？　ヨコ「主婦は立派な職業よ！」

(289)

ヨコは大根を手に取り、商品T.Lを確認した。ヨコ「あら、これクメゾウお義父さんのところの」　どんな商品にもマイクロサイズの電子タグが取り付けられており、全てツイッターと連動している。生産者はもちろん、種まき時期から使われた肥料の情報、果ては運

搬車両のナンバーまで調べられる。

(290)

クメゾウお義父さんが作ったのなら安心と、ヨコはその大根を力ゴに入れた。ヨコ「あら」隣にキャベツを手にしたまま直立不動になっている男性がいる。ヨコ「何をそんなに調べているのかしら？」品物の情報は芋づる式に際限なく調べられるので、気付いたらとんでもない情報まで調べてたりってことも。

(291)

ヨコもいつだったか、板子ヨコの情報を芋づる式に調べていつて気づいたら南米の地質学に詳しい人と話し込んでしまっていたことがあった。ヨコ「ほどほどにしないとねえ……」そしてヨコはほどほどに買い物を済ますと、やっぱりレジを通らずに店を出た。

(292)

ヨコ「あっ！」ヨコはハッと気づいて立ち止まった。ヨコ「ガンモドキを忘れたわ！」ああしまった、亭主の大好きなガンモドキ、早くもどつて買い足さなければ。店長さんに笑われてしまうかもしれないけど。そしてヨコが踵を返したその時だった。ハウ「その美しいお姉様、お忘れものはこれですね？」

(293)

イタリア風のシックな縦縞スーツに身を包んだハウが、手にガンモドキの入った袋を持って立っていた。ヨコ「ええ!？」ハウ「あなたがガンモドキを忘れるだろうことを予感していたので。きつとお困りになると思いますので」ヨコは激しく困惑した。確かにガンモドキなのだけ。

(294)

ヨコ「あ、あの、ありがたいんですけど、知らない方から頂くわけには！」　そう言ってヨコは逃げるようにその場を立ち去った。
ホウ「ああ……なんてエレガントな人なんだ……ビヴァーチェ！」
ホウはガンモドキを強く胸に抱きしめる。そして堪えきれぬ喜びの発露として、小刻みに震えた。

(295)

ヨコ(いったい何だったのかしら……どうして私がガンモドキを買い忘れたことを?)　ヨコは不審に思いながらも、心の奥ではドキドキしていた。色んな男の人に声をかけられてきたが、あんな風にアプローチされたのは初めてだ。ヨコ(いけないわヨコ。私は子も夫もある身よ!)

(296)

ヨコは始終落ち着きなく、ガンモドキを買うだけのために店内を3週ほどグルグルしてしまった。店長「お、奥さん？」　ヨコ「え?、ああ、ちょっと買い忘れをね。うふふ」　そうして店内をうろついていると大変恥ずかしいことに、お化粧直しに行きたくなくなってしまった。　ヨコ(いやだわもう……)

(297)

たかがトイレ、されどトイレ。トイレには人の世の全てが流れていると言う。そんなトイレだが、世の中に数少ない「非ツイッター領域」でもある。誰にも見られることのない秘密の空間であり、同時に誰の庇護も受けられない孤独な密室でもある。ヨコ(スーパーのトイレを使うのは億劫だわ!)

(298)

たとえ情報共有化時代であっても、トイレの秘密などはちゃんと守られるのがツイートピアである。しかし同時に、トイレで何か事

件が起きてても、誰の助けも求められないのだ。しかし背に腹は変えられないので、ヨコはよくよく注意してスーパ－のトイレに入り、お化粧を直すことにした。

(299)

ホウ「ビヴァーチエ」　ヨコ「ひいっ！」　トイレの中からさきほどの男が現れた……ような気がした。ヨコ「……ほっ」　極度の緊張でいるわけの無い人まで見えてしまったのだ。ヨコ（ドキドキするわ……）　ヨコは恥ずかしいやら恐ろしいやらで、ひどく落着かなかった。

(300)

ヨコは家に帰る道中、ずっと先ほどの男のことを考えていた。ヨコ（リプライをみられていたのかしら……？　でも、私とアフレルさんの共通フローワーに、あんな方いたかしら……）　ヨコはさんざん首をひねってみるが良くわからない。そうこうしているうちに、家に着いてしまった。

(301)

ヨコ「ああ！」　ガンモドキを買っていなかった！　ヨコはその場にくず折れた。ヨコ「もういやだわ」　仕方ない、ガンモドキは何かで代用しよう。そのため息をつきつつ玄関を開けようとしたヨコの目の前に。ヨコ「これは……」　そこには袋いっぱいガンモドキが。そして一刺しの赤いバラが。

(302)

ヨコはしばし放心状態のまま、その場に立ち尽くした。ヨコ（このガンモドキは……捨てましょう）　そう思いつつ赤いバラを抜き取って、草むらに捨てようと手を上げるが。ヨコ（……いいえ、この花に罪はないわ！）　そして結局家の中に持ち込んで、キッチン

の窓際に生けたのだった。

(303)

少し落ち着いたヨコは、赤いバラの商品ＴＬを開いた。何の変哲もない赤バラのようだ。購入者はトキワ・チカコ(43歳) 近所にあるツイッター互助会の管理人さんだった。ヨコ「どうゆうことなのかしら」 そうポツリつぶやくヨコ。ヨコ「あつ、ノルコ」 いつのまにかノルコが近くに来ていた。

(304)

ヨコ「えと……これはね、そこで拾ったのよ。綺麗でしょ？」

ノルコはぴーんと背伸びをして、赤いバラの花をしげしげと見つめ、うんつと一つうなずいた。そしてテーブルの上においてある食材に気づく。ガンモドキがいつぱいある。お父さんの大好きなガンモドキ。ノルコ(今夜はおでんだ！)

(305)

ヨコは困ったなと思う。これでガンモドキを捨てるに捨てられなくなった。そして気づく。もしガンモドキの商品ＴＬをノルコが調べてしまったら……。ヨコ「ねえノルコ、お願いがあるんだけど」

ノルコはうんつとうなずく。ヨコ「お風呂を掃除しといてくれない？ お母さん少し疲れちゃって」

(306)

暇で暇でしかたが無かったノルコはダッシュでお風呂に向かっていった。ホツとしたヨコは、ガンモドキの商品ＴＬを調べた。こちらの購入者もツイッター互助会の管理人さんだった。しかしそこからの譲渡情報がまったく無い。紛失物と同じ扱いになっているのだ。ヨコ(やっぱり気味が悪いわね……)

(307)

ヨコは購入者のチカコさんに直接問い合わせることにした。ヨコ「かくかくしかじか」チカコ「あら、それは申し訳ありませんでした。うちのホウの仕業です」ヨコはチカコから詳しい説明を受け、例の男がツイッター能力喪失者であることを理解した。ヨコ「そういうことでしたか」

(308)

事情を理解したヨコは、まるで喉に刺さった骨がとれたような気持ちになった。そして鼻歌まじりで晩御飯の仕度を開始したのだ。た。ノルコ（じー）ヨコ「はっ」疲れているように見えない母を、ノルコが訝しげに見つめていた。ヨコ「あ、ありがとうノルコ、おかげでお母さん元気になったわ！」

(309)

その夜の夕食、アフレルは好物のガンモドキをモシヤクシャとほお張りながらビールを飲んでいた。アフレル「こんなにたくさん入れてくれるとは思わなかったよ！」 喜びいっぱい表情のアフレル。ヨコ「え？ それほどでもないわよ？」 微妙な微笑のヨコ。ノルコ（お母さん何かあった？）

(310)

ヨコ「そういえばあなた。今日の面接はどこに行ったの？」 アフレル「牛を見に行ってたんだ」 牛？ みんなそう思った。アフレル「父さんの紹介でね、見てくれるだけでもいいからってさ」ヨコ「牧場の仕事を見学してきたの」 アフレル「うん。あと、ちよっとカウボーイ的なことをね」

(311)

そう言々とアフレルは、動画ファイルを起動して食卓の上に投影した。ワク「カウボーイ?!」 ヨコ「あらホント」 のどかな牧場の光景だった。動画の中でアフレルは、手綱を引いて牛を引つ張り出しているところだった。アフレル「これが結構大変なんだ。なかなか言うことを聞いてくれなくて」

(312)

牛を引つ張るといふより、引つ張られているアフレル。それを見て牧場主さんがゲラゲラ笑っている。ヨコ「これじゃどっちが牛だかわからないわ」 アフレル「そう？」 ヨコ「それで面接は受かったの？」 アフレル「来てもいいって言われたけど断った。思っ

た以上に大変な仕事だつてわかったから」

(313)

ヨコ「そう……」 夫がカウボーイというのも悪くないかと思つていたヨコは、少し残念に思つた。アフレル「あつ！」 なんと動画の中で、1頭の牛が放尿を始めてしまった。アフレルが飲んでいゝるビールと同じような色をしている。お食事中にこれはいけない。アフレル「うわー、あー」

(314)

ワク「ライク・ア・ビアー！」 アフレル「ワク、それは言っちゃいけない……。ごめんよみんな」 そう言つて動画を消すアフレル。ヨコがポツリと一言。ヨコ「牛さんはいいわねえ、どこでもおトイレできて」 ノルコ(ん?) その一言にノルコは、何となくピンときてしまったのだつた。

(315)

ノルコ(お母さん、きつとおトイレで困つたことがあつたんだ) トイレにツイッターを設置してはいけないという法律がある。そのせいか「トイレで起こつた犯罪は世間に知られることがない」という都市伝説が広まっているのだ。おかげで公共のトイレは何となく使いにくい状況だ。

(316)

ノルコはちくわぶをモジュモジュしながら思う。学校のトイレも使いにくいなど。世の中にはトイレに行くとからかわれるという理由で我慢し続けて、腸閉塞になつてしまつた子もいる。さらに問題なのが、仮にトイレを覗かれたりしても、そのことを訴える手段がないということだ。

(317)

ノルコ(でも、いつ誰がどれだけ使ったか、なんてことが全部記録されちゃうのもいやだな) これは根の深い問題だとノルコは思った。アフレル「どうしたノルコ? 難しい顔して」言われてハッと感じて、おもむろに首を振るノルコ。お食事中に何てこと考えてたんだろう。ノルコ(はしたないわっ)

(318)

ノルコは食器をキッチンに返す時に、母が昼に拾ってきたという赤いバラのTシャツを調べた。ノルコ(あつ……) 購入者は互助協会のおばさん。この間会ったあの人だ。ノルコ(ということは) 高確率でホウさんが絡んでるはずだ。そうノルコは推理した。何だか気分がゲンナリしてきた。

(319)

ノルコは自室に戻りつつ考える。お母さんのトイレの話とホウさんの間に因果関係があるのだとしたら、それは一体どういう状況だろう? ノルコ(あの赤バラ……もしかしたらホウさんがお母さんに上げたのかも?) ほぼ正解といえる推理。しかし、それとトイレとの因果関係は?

(320)

ノルコ(お母さんがトイレから出た直後に、ホウさんがお母さんに赤バラを渡した?) そこまでノルコは考えて、やっぱりワケがわからないなと思った。ホウさんの動機がわからない。なぜお母さんに赤いバラを? 赤いバラってどんな時にプレゼントする? ノルコ(あああ!)

(321)

ノルコ(お母さん、ナンパされたのかも!) そして母はそのバ

ラを受け取って帰ってきたのだ。これは由々しき事態。そう思った
ノルコは、何が何でもホウさんとコンタクトを取らなければと思っ
た。しかし。ノルコ（ホウさんにはリプライを飛ばせない……）
直接会って話すしかない。いや。

（322）

青年ホウには不思議な能力がある。あのGPTLとかを見たせいで、人の心が読めるようになったようだ。心が読まれてしまうのは、正直言気分の良いものではないが、ならばそれを逆手に取ることも出来るはずだ。ノルコ（私達の平和な食卓を……乱さないで！）
ノルコは目を閉じ、強く念じた。

（323）

《ビヴァーチエ》 どこからともなくそう聞こえてきた気がした。
ノルコ（私のお母さん美人だから気持ちわかるけど、お願いだから変な気を起こさないで！） ノルコは10回くらいそう念じてから目をあけた。ノルコ（伝わったかな？） それを確かめるためにも、明日ホウさんに会いに行かないと。

（324）

ノルコ（お母さんの様子をもう一度確かめておこう） ノルコは一階に下り、キッチンへと向かう。ノルコ（……こっさり） 入り口の影から母ヨコの姿を覗うノルコ。ヨコは食器を洗っている。いつもと様子は変わらない。ノルコ（あっ） キッチンから赤バラが消えているのを、ノルコは見逃さなかった。

（325）

ノルコ（まだ生き生きしてたのに……なんで？） ノルコはそこでハッと気付く。隠蔽したのだ――と。ヨコ「ん？」 ヨコに気付かれた。ヨコ「なあにノルコ。ご飯足りなかった？」 ノルコは首

を横に振って、その場を後にする。アフレル「おつ、ノルコ」 その時ちょうど、父が風呂から出てきた。

(326)

スウェット姿で頭から湯気を立ててるアフレルは、どうやらノルコが微妙な表情をしていることに気付いたようだ。ノルコはマズいと思い、顔を伏せる。どう切り抜ける？ ノルコ(……そうだ！)

ノルコはお腹を押さえてモジモジした後、ダッシュでトイレに駆け込んだ。ノルコ(セーフ！)

(327)

もちろんお腹なんか痛くない。というかけなげ美少女はウ。コなんてしない。ノルコは便座に腰掛けたまま、しばし考え込んだ。ノルコ(こういうときはどうしたらいいんだろう？ お母さんが浮気するかもしれない……誰に相談することもできない) いうかつぶやけない。ノルコ(……孤独だわ)

(328)

ノルコはリビングのＴＬにアクセスする。ヨコとアフレルが会話している。というか、普通に声が聞こえてくるのだけだ。アフレル「また明日も面接だから、早くに出かけるよ」 ヨコ「そう？ 朝ごはん6時くらいでいい？」 アフレル「ううん、5時にはここを出るから。移動しながら食べてくよ」

(329)

ヨコ「そんなに早く？」 アフレル「そうなんだ。南房総の先まで行くからね」 ヨコ「結構遠いわね。受かったとして通えるの？」 アフレル「出社はたまにいいんだ。あとは殆ど自宅でできる。また研究職なんだけど」 ヨコ「そう、受かるといいわね！」 アフレル「え？ う、うん。がんばるよっ」

(330)

ノルコは手を洗ってトイレを出た。自室に戻りつつ思う。お母さんの様子がやっぱり変だ。何となく、お父さんと話したくないみたい。会話を出来るだけ早く切り上げようとしている感じがする。ノルコ（お母さん……まさかとは思うけど）　そうしてノルコの不安な一夜は更けてゆく。

(331)

そして翌朝。現在8時半。今日は日曜日なのでワクは朝寝坊している。4時に起きてアフレルのお弁当を作っていたヨコモ、ソファでうつらうつらしている間に眠ってしまった。一人でイチゴトーストを食べたノルコは。ノルコ（好機！）　そう心の中で気合を入れて、家を飛び出して行った。

(332)

ツイッター互助協会に行つて、ハウに会って確認して帰ってくる。ただそれだけだ。スムーズに行けば10分で行つて帰つて来られる。しかし。ノルコ（どっちだっけ……）　住宅地の隘路は思いのほか複雑だったりする。体内ツイッターの地図機能を使っていたにも関わらず、ノルコは迷ってしまった。

(333)

ノルコ（勝手に出かけたって、お父さんに怒られる！）　ノルコは血の気がサーッと引く思いで、まるで迷路のような戸建住宅の細道をさまよっていた。すると。「おはよう！」　ノルコは喉から心臓が飛び出すかと思った。後ろを振り返ると。ハウ「来るんじゃないかと思っていたよ、ビヴァーチエ！」

(334)

ノルコは内心ホツとしたが、それを顔に出すわけにはいかない。
ノルコ（確かめなきゃ！）そしてジツと相手の顔をにらむ。昨夜の祈りが届いたなら、ホウは何らかのリアクションをしてくるはず。ホウ「そんなに僕の顔が気になるかい？」と言つて髪をかき上げ、無い耳を見せてくる。ノルコ（あれ？）

（335）

私の心を読めるのなら答えてくれるはず。ノルコは念じた。ノルコ（お母さんに何かしたの？！）するとホウは少しうな垂れた様子で、一つため息をついた。ホウ「昨日ね、ユウタ君が家に帰っちゃったんだ。寂しくなるよ」ユウタ君とは、以前に協会で会った少年のことだが。ノルコ（とぼけてる？！）

（336）

ホウ「君は僕に聞きたいことがあつてここにきた」ノルコは首を縦に振る。ホウ「だが僕はそれに答えることが出来ない」ノルコは首を傾げる。ホウ「なぜならそれは、僕の極めてプライベートな部分だからだ」ノルコはその場で地団駄を踏む。ホウ「そして君は今、不公平を感じている」

（337）

そっちはプライベートとか言つておきながら、こっちが考えていることはお見通しではないか。そんなの不公平だ。確かにノルコはそう思つて地団駄を踏んだのだ。はしたないとは思いつつも。ホウ「でも君は、その気になれば心を隠すことが出来るはずだ。僕は全てを支配しているわけじゃない」

（338）

ホウ「君は恋をしたことがあるかい？」ノルコはドキリとした。そう改まって聞かれてみれば、ノルコは未だ誰にも恋をしたことが

なかった。ホウ「恋とは不思議なものさ。お互いの気持ちと気持ちが合わせ鏡みたいに向き合って、どこまでも互いの姿を連ねていく。果てしが無い。ビヴァーチエ」

(339)

ホウ「僕が君の心を読めたとしても、僕が僕の心を読めない限り、僕は何も掴めやしない。つまりはそういうことだよ」ノルコはホウの言葉をただ黙って聞いていた。お母さんのことがどうか言う以前に、その言葉には強い説得力があるように思えたのだ。そして自分にとって大事な言葉であることも。

(340)

ホウ「さあ、そろそろ帰らないと、きつと大変なことが起こるぞ」ノルコはギクリとしてその場でたじろいだ。ノルコはホウに何か一言いいたかった。でも呟けないのだ。ノルコは奥歯を強くかみ締めてウンウンと唸って見たが、鼻で空気がヒューヒュー言うだけだった。ホウ「ふふ。また今度だ！」

(341)

ノルコは家に帰ってソーっと中に入る。ワク「ホウエア？」寝ぼけたワクが突っ立っていたので、ノルコは反射的に「シー」と唇に指をあてて黙らせた。リビングのソファーでは、ヨコがまだすやすやと眠っている。ノルコはホッと内心ため息をついて、自室へと戻っていった。

(342)

ノルコは学習机の引き出しからゲンお爺さんのPCを取り出した。そして起動させている間に考える。先ほどのホウの話をまとめると、やはりホウはお母さんに恋をしてしまったようだ。そして合わせ鏡の例え話から察するに、その顛末はホウにもわからないのだろう。

ノルコ（ますます厄介だわ）

（343）

『GPTLは世界の全てを僕に教える』　ホウが言っていたあの言葉はウソなのだろうか。ノルコはふとそう思う。GPTL、グロス・オブ・パーソナル・タイムライン、神のTL。そんな良くわからないものに取りこまれてしまった人が、今私のお母さんに恋してる。ノルコは気が気じゃなかった。

（344）

まずはGPTLについて知らなければならない。ノルコはゲンお爺さんのPCでそれを調べることにした。キーワード検索機能を使って「GPTL」の単語を含むツイートを片っ端から調べていく……つもりだったが。ノルコ（無い……全然）　GPTLという言葉は、どこをどう探しても見つからなかった。

（345）

まるで何か大きな存在によって、言葉そのものが隠されてしまっているようだった。ノルコは薄ら寒い気分になってきた。ノルコ（そうだ！）　あの管理人のおばさんなら知ってるかもしれない。ノルコは思いつくや否や、ツイッター互助協会の管理人、トキワ・チカコさんのプロフィールを検索した。

ツイートピア346〜363

(346)

ゲン「こんにちはチカコさん。私はこの間お世話になりましたノルコです。ゲンというのは私のひいお爺さんの名前です。今私は、ゲンお爺さんのPCを使ってツイートしています。チカコさんに聞きたいことがあります」 ノルコは頑張ってこの長文をこしらえて、そしてチカコさんにリプライした。

(347)

チカコ「あらノルコちゃん、お久しぶり。何となく事情はわかったわ。聞きたいことってなあに？」 ゲン「少し時間がかかります。うつのに」 チカコ「構わないわ、今はお昼ごはんのホットケーキを作っているところなのよ」 ノルコはお腹がグウと鳴るのを抑えつつ、キーボードを手にかけた。

(348)

ゲン「ハウさんのGPTLのことを知りたいんです」 TLの向こう側でチカコさんがピタツと手を止めたような感覚があった。ゲン「どうしても気になって。調べてもわからなくて」 チカコ「あれはね……何て説明したらいいのかしら」 どうやらチカコさんにも良くわからないようだ。

(349)

ゲン「ハウさんはGPTLで、世界の全てを知ったと言っていました」 ノルコはそこまでツイートして手を止めた。今朝ハウと会った時のことは、チカコさんに伝えない方がいい。なぜなら「ハウにどんな用事があったの？」と聞かれたとき、どう返事をして良いか

わからないからだ。

(350)

ゲン「もしホウさんが世界の全てを知っているのなら、ノルコ達の将来とかも知っていることになります。それが私には不安です」

チカコ「うーん。確かにそれはわかるわ。ホウがその知識を使って何をしでかすかわからないものね」　ゲン「はい」　チカコ「でもね、その心配はきつとないわ」

(351)

ゲン「どういうこと？」　チカコ「今のところ、ホウがGPTLの力を悪用したことはないわ。それに、世界の全てを知っているなんてこと自体、私はちよつと疑わしいと思っている。もしかすると、ただのあの子の妄想なんじゃないかしらって」　ゲン「妄想」　チカコ「そう、ただの妄想かもよ？」

(352)

チカコ「あら、ホットケーキが焦げてきたわ、ちよつと待ってね」　ゲン「すみません」　チカコ「いいのよ」　ノルコは、チカコがホットケーキをひっくり返している間に考えた。ただの妄想、確かにそれはあるかもしれない。でもホウさんはしばしば人の心を読むじゃないか。

(353)

ノルコはそのことをチカコさんに聞いてみた。チカコ「ホウは昔から勘の鋭い子だったわ。ツイッター能力を早くに失った影響かしらね。どこか人を見透かしたような所があったわ」　ゲン「そうですねですか」　GPTLという単語そのものがホウの創作物なのだろうか？　ノルコはそう思うようになってきた。

(354)

ゲン「GPTLというもホウさんの妄想？」　チカコ「妄想かもしれないし、実際にあるものなのかもしれないし、まあ、私にもちよつとわからないわね」　ノルコは正直ガツカリしたが、チカコさんの話を聞くうちに、ホウさんはノルコ達の悪いようにはしないのではという安心感もわいてきた。

(355)

チカコ「ホットケーキが一枚出来たわ。ゲン……じゃないノルコちゃん。食べに来ない？」　ノルコは必死で首を横に振って、すぐにそれが意味の無いことだと気付き、とっさにキーボードを叩いた。ゲン「もうおh r g h nたばまちt」　そんなことしたらお父さんに怒られちゃう！

(356)

チカコ「もうお昼食べたの？　それは残念」　ゲン「おかまいなくです」　チカコ「ほらほら、匂いにつられてホウがやってきたわよ。GPTLのこと聞いて見る？」　ゲン「おねがいしまu s」　焦って打つと相変わらず変な言葉になってしまうのが齒がゆい。チカコ「あのねホウ、かくかくしかじか」

(357)

そしてノルコは大変なことに気付いて、座ったまま飛び跳ねてしまった。　ノルコ（ホウさんがさっき私と会ったってこと言っちゃったらどうしよう！）　ノルコはなすすべなく、ただホウがそのことを言わないようにと念じるのみだった。ノルコ（ないしよないしよないしよないしよ！）

(358)

しばらくして。チカコ「ノルコちゃん。ホウがね、今とってもわ

かりやすい例え話をしてくれたわ」　どうやら祈りは通じたようで、ノルコはホッと胸をなでおろした。ゲン「聞きたいです！」　チカコ「ええ、もちろん。ホウはGPTLのことを、『すごく良い映画のようなもの』って例えたの」

(359)

すごく良い映画と聞いて、ノルコが真っ先に思い浮かべるのは、オードリー・ヘップバーン主演のローマの休日だ。「世界で一番素敵なレディ」というキーワードで色々調べていたら、この古い映画に行き当たった。その日のうちに二回見て、それからもちよくちよく見ている。素敵な映画は何度見ても素敵だ。

(360)

チカコ「良い映画って、何回見ても面白いものでしょう？　結末とかみんなわかってるのに」　ゲン「わかります」　チカコ「何もかもがわかっていても、ぜんぜん飽きない。何度見ても新しい発見があつて、胸がドキドキする。ホウはGPTLのことを、そう例えているのよ」

(361)

何度見ても新しい発見がある。その言葉にノルコはピンときた。先ほどホウは言っていた。恋とは合わせ鏡のようなものだ。今ある自分の状態によって、相手の見え方が変わってくる。それと同じように、GPTLから見えるものも変わってくる。言わばそれは、自分と世界との間の合わせ鏡なのだ。

(362)

ゲン「すごくよくわかりました。ありがとうございます」　チカコ「いえいえどういたしまして。また何か気になることがあったら、遠慮しないで聞いてきてね！」　ノルコはひとまずチカコさん

とさよならした。今日のところはこの辺にしておこう。なんだか頭の中がいつぱいだ。

(3 6 3)

グウー。またお腹が鳴った。ノルコは部屋で一人、顔を赤らめた。ノルコ(頭を使うとお腹が減るの)　そろそろお昼ごはんの間。ノルコ(腹が減ってはなんとやら！)　ノルコは椅子から飛び降りて、一つグーンと背伸びをすると、パタパタと足音を立てて一階に降りていった。

ツイートピア364〜393

(364)

窓辺からあふれ出す陽射しがダイニングテーブルを照らしている。テーブルの上にはバターと蜂蜜の瓶。キッチンから漂ってくるは香ばしき匂い。ヨコ「もう少しで焼けるからね、ホットケーキ」ノルコ(！?) チカコさんもホットケーキを作ってた。これは何か関係があるとノルコは思った。

(365)

ノルコはテーブルについて、コップにミルクを注いで一口飲む。ノルコ(ふうー) 牛乳を飲むと気分が落ち着くのは何故なんだろうと、ノルコはしばし思いを馳せる。そしてダイニングがとても静かなことに気付く。ワクは? ヨコ「ワクはお友達の家でご馳走になるんだって、いいわねー」

(366)

ワクが日曜日に関達の家に住居する。ノルコ(毎週恒例のアレか)アレとは何か。それはまた後の話。それより家の中が静か過ぎて落ち着かないノルコは、ひとまずテレビをつけてみた。JPN48000の特集でもやってないかな? テレビ「お昼のニュースです」どうやら期待は外れたようだ。

(367)

テレビ「今国会において法案が提出されていましたが、公衆洗面所におけるツイッター常設に関する法律、通称『トイレ法』の集中審議が週明けから始まります」どうやら政治関連のニュースらしい。ノルコ(トイレ法?) また訳のわからない法律を作ろうとしている

るなー、とノルコは思った。

(368)

ヨコ「できたわー、ちよつと作りすぎちゃった」　ヨコがお皿の上に三段重ねになったホットケーキを持ってやってきた。ノルコの隣の席に座ってナイフで八等分にする。ヨコ「トイレ法ねえ、これってなにげに切実な問題よね」　ヨコはテレビを眺めつつ、ため息を一つついた。

(369)

ノルコは聞きたくても聞けないことがたくさんあったが、どのみちつぶやけない身なので黙ってホットケーキをパクパクと食べた。ヨコ《ねえノルコ、ここだけの話なんだけどね》　ヨコは形式的にあたりを見回してから、そつとDMを送ってきた。ヨコ《……実はね、お母さんナンパされちゃったの！》

(370)

ノルコはもう少しで舌を嚙んでしまうところだった。ひとまず眉間にシワを寄せて困惑の意を伝えておく。ヨコ《シツクなスーツに身を包んだ、若い紳士だったわ。ねえノルコ、お母さんどうしたらいいと思う？》　シツクなスーツに身を包んだビバーチェ、もといホウ。ノルコはプツと噴出してしまった。

(371)

ヨコ《ちよつとノルコ！　お母さんは本気でノルコに相談してるのよっ》　ノルコはペコリと頭を下げて謝った。ヨコ《まあ、お母さんの気持ちはもう決まってるんだけど、ノルコにも話しておきたいと思ったの。ノルコももうすぐ大人になつて、お母さんみたく殿方に声をかけられるようになるから》

(372)

お母さんの自身満々な所は是非とも見習いたい。そうノルコはいつも思う。ヨコ《1、一度だけデートする。2、すげなくことわる。3、お友達になる》ヨコはそう言いながらホットケーキの切れ端を選択肢代わりに置いていく。ノルコはうーんと考えるふりをした。本当はもう決まってるんだけど。

(373)

ノルコは3番のホットケーキをフォークで刺し、そして口の中に放り込んだ。モグモグ、おいしい。ヨコ《うん！ ノルコなら3番を選んでくれると思った！》そう言いつつ、ヨコは1番と2番のホットケーキを食べてしまった。ヨコ《やっぱりね、こういうご縁は大切にしないといけないわ！》

(374)

お母さんはやっぱり魔性の女だ、ただそこにいるだけで男の人を苦しめてしまう。ノルコは率直にそう思った。そして自分もその血を受け継いでいるのだなとしみじみ実感し、未だ小さな胸の奥でフツツと女の魔性をたぎらせたのだった。ヨコ《ノルコに相談したら、お母さん何だかすつきりしたわ！》

(375)

——その頃。アフレルは、妻と娘がホットケーキを囲んで不適な笑みを浮かべていることなど露にも思うことなく、面接先の研究施設を見渡していた。アフレル「なんて大きい施設なんだろう」クサヨシ「ふふふ。これが人類最後の砦、ガンバール研究基地の全貌だよ」アフレル「人類最後の……砦！」

(376)

館山市から車で30分、南房総の先端に位置するは野島岬。そこ

から太平洋に突き出す形で全長2km、幅60メートルの滑走路が延びている。その付け根には巨大な巻貝を思わせるフォルムの施設が建っている。巨大ロボット研究所兼対悪性地球外生命体迎撃基地、通称「ガンバール研究基地」である。

(377)

アフレル「現実感がない……」 アフレルは研究基地の近くの高台公園にきていた。先ほどクサヨシさんに基地を案内してもらったのだが、体育館ぐらいの建物に格納されている「巨大な鉄の手」やら、一機で100トン超の出力を生み出すロケットブースターやらですっかり目が眩んでしまった。

(378)

クサヨシ「もし、悪意を持った地球外生命体が侵略してきたら、あの滑走路から我らがガンバールロボが出撃し、持てる力を奮って戦うことになるのだ」 アフレル「うわあ……」 そのガンバールロボは現在開発中でバラバラになっているが、完成すれば全長80メートルを超える巨大ロボとなる予定。

(379)

アフレル「でもまだ未完成なんですよね？」 クサヨシ「我々がその気になれば4時間以内に組み上げ出撃させられる。設計上の3%ほどの戦力しか発揮できないが」 アフレル「倒せるんですか？！」 そうアフレルが問うと彼は。クサヨシ「ふふふ……無理に決まっているだろう？」 と、自身満々に答えた。

(380)

クサヨシ「だってアフレル君、宇宙空間を何万光年も渡ってこれるほどの生命体だぞ？ 今の人類がどう『さかしま』になったって勝てるわけがないじゃないか」 と言っておきながら自信満々であ

る アフレル「じゃ、なんで作ってるんです？ 面接受けに来た僕が聞くのもなんですけど……」

(381)

クサヨシ「アフレル君、君はそんなことも調べないで我々が研究基地の門を叩いたのか」 アフレル「はい、そうなんです」 クサヨシ「ふふ、君が来たタイミングから察するに、我々が求人を出した瞬間に飛びついたのだらう、時間にして今から2時間前だ」 アフレル「まさしく！」

(382)

アフレルは本当は別の研究所の面接を受ける予定だった。しかし行きの電車の中で求人検索をしている際、「巨大ロボット開発の研究員募集」の文字をついつかり発見してしまい、即効で食いついて、受けるハズだった面接を蹴ってまで、ここガンバール研究基地を訪れたのだった。

(383)

第5次火星開発選抜の3次審査を通ったアフレルの実績が評価され、こうして飛び込みの就職面接と相成ったのだが、十分な予備知識を蓄える余裕などあるわけがなかった。クサヨシ「まあいい、立ち話もなんだ、そこに座りたまえ」 アフレルは促されるまま、近くにあったアヒルの遊具にまたがった。

(384)

クサヨシは白衣をサツと翻すと、音も無くアヒルの隣のカエルにまたがった。スプリングの足を使って前後にギツタンギツタンするアレだ。クサヨシ「倒せるアテのない宇宙人への対応として、巨大ロボットを建造するのは何故か。君の質問はそういうことだね？」 アフレル「はい、そうです」

(385)

クサヨシ「ではその質問をそのまま君に返すでしょう。何故だと考えるかね？」 アフレルはハッと息を飲んだ。つまりこれは口頭諮問なのだ。アフレルは試されている。アフレル「はい、私が考えるにその理由は……」 アフレルは一息おいて宙を見やる。遊具が僅かに傾いだ。アフレル「心意気です」

(386)

クサヨシは常時険しいその表情を僅かに緩めて言った。クサヨシ「心意気とね？ その意は？」 アフレル「はい、つまり勝てないからといって戦う気持ちまで捨ててしまう訳にはいかないからです。そんなことでは全ての宇宙生物に見下されてしまいます。さらに僕たち人類の尊厳を自ら放棄することにもなります」

(387)

クサヨシは黙って耳を傾けている。アフレル「悪意ある侵略者から地球人類の尊厳を守る。その目的のために持てる力を結集することの意義は、実際とても大きいのではないだろうか」 アフレルは自分の考えを言葉にするたびに、目の前の非現実的な研究基地の光景が、ごく当然のもののように思えてきた。

(388)

アフレル「さらに、最先端の技術を集結し、科学の可能性を追求するための絶好の場となり、ここで開発された技術は、僕たちの生活の中に確実に生かされていくはずですよ。そして何より……」 クサヨシはもうかなり満足げな表情だ。アフレル「子供達が喜びます！」 クサヨシ「ハッハッハ！」

(389)

クサヨシ「うむ、ほぼ合格と言っていいだろう。子供が喜ぶか。言われて見ればそういう意義もあったな」 アフレル「では……」
クサヨシ「さっそく本部に通達しよう。また一人、我が秘密基地に熱い野郎が加わったとな！」 アフレルはグーッと胸の前で拳をにぎりしめ、そして天に突き上げた。

(390)

クサヨシはカエルの遊具をギツタンギツタンしながら続ける。クサヨシ「君はこれまでの経歴から、有機化学の応用に精通しているようだ。現在、油圧駆動系の開発部隊に不足がある。さっそく明日から現場に加わって欲しい。開発資料はオープンソースだ。膨大な量だが君なら処理できると信じている」

(391)

アフレル「明日からですか？」 クサヨシ「善は急げというではないか。何か問題が？」 アフレル「僕は呟音市に住んでいるので引越す必要があるんです」 クサヨシ「基地のB2に寮がある。すぐにでも手配できる。完全個室で共同の温泉もあるのだ」 アフレルは正直困った。家族にどう説明しよう。

(392)

クサヨシ「時間が必要かね？」 確かに時間が必要だった。しかし巨大ロボットの開発なんてなかなか出来ることじゃない。一瞬の躊躇も許されないとアフレルは直感していた。アフレル「いいえ、大丈夫です。明日から出向いたします」 クサヨシ「よろしい。では本日はこれにて終了、また明日だ！」

(393)

クサヨシはカエルの遊具からエレガントに飛び降りると、そのままスタスタと歩いて基地へと戻っていった。アフレルはその背が見

えなくなるまで目礼を続け、再びアヒルに跨る。どつと疲労が押し寄せてきた。アフレル（単身赴任……）　遠い水平線を眺めつつ、アフレルはしばしボーっと佇んだ。

ナビゲーターをつけることが出来る。

(398)

ワク「エネミー・イズ・カミング。3・5・7」 タケシ「おつと複数敵か、胸が熱くなるぜ！」 現在、全世界に三千万人のプレイヤーがあり、それぞれ腕を競いあっている。そして万が一、本当にエイリアンが侵略してきた時は、上位20名が本物のガンバールの操縦者に選ばれることになっている。

(399)

ワクはこのアプリのことを最近知ったのだが、実は公表から15年以上が経過している。いまだその人気は色あせない理由は、まさしくガンバールが実在しているためである。ワクもその仕組みを初めて知ったときは、おでこが真っ赤になるほど興奮した。パイロットに選ばれる可能性は、常にあるのだ。

(400)

このゲームのユニークなところは、年齢が低ければ低いほど撃破ポイントが高く与えられるところだ。そこには「巨大ロボットの操縦者は少年に限る」という開発者の思想がこめられている。世の中には30歳すぎのプレイヤーもいるが、加齢でポイントを稼げなくなるので、いずれは引退する。

(401)

というわけで、今を生きる少年ならば、誰でも一度はガンバールのパイロットを目指すご時世なのだ。タケシ「いっちょ撃破！」 ワク「キープ・ユア・ガード！ レフト！ カミン！」 左9時方向から慣性の法則無視して突っ込んでくる円盤が、ガンバールの足を掠めた。タケシ「くっ！」

(402)

タケシはスロットルを上げ、敵の追撃を振り切る。ガンバールの脚部に装着されたブースターから灼熱色のジェットが噴出する。ブースターの燃料は最大稼動で3分しか持たない……が。ワク「ファイナルアタック・オールレディ」 タケシ「ロックオン！」 ワク&タケシ「ヒア・ウィ・ゴー！」

(403)

メインブースターから太陽の如き閃光があふれ出た。機体の限界を超えてガンバールが飛翔する。反物質燃料の投入による、桁違いの出力が開放されたのだ。タケシ「耐えてくれ！ ガンバール！」 機体そのものを超高速の弾丸に変えて、ガンバールは残り2体の敵に突っ込んでいく！

(404)

体当たりで一体撃破し、進路変更。強烈なGに耐え切れず、バールを装着した方の腕が瓦解した。タケシ「がんばれー！」 ワク「ガンバール！」 レールガンを頂点として、流星のような弧を描いて敵に突っ込むガンバール。衝突と同時にトリガーオン！ タケシ「シュウウウトー！」 ワク「エキサイティイン！」

(405)

ボロボロに傷ついたガンバールは、それでもなお、その巨体を雄々しく空に羽ばたかせていた。その背後で最後の円盤型エイリアンが爆散飛散激散する。タケシ「やったぜ！」 ワク「ウィー・ウィル・ウィン！」 撃破ポイント198。タケシ「ちつくしよー、これでもまだワクに負けてるぜー！」

(406)

現在の最高撃破ポイントは302で、保有者はルーマニアに住む

10歳の少年だ。ガンバールのプレイヤーは世界中におり、ワク達も彼らとタッグを組んで遊ぶ。ワク「グッゲーム！」 タケシ「ぐっげーむ！」 だからワクは頑張って英語を勉強したのだ。独学なので見事な日本英語になってしまったが。

(407)

タケシ「よし、次だ次！」 二人が次のステージに進もうとしたその時、ワクにアフレルからDMが来た。ワク「アリトル・ウェイティン」 タケシ「ほい？」 ワクはいったんアプリを切ってDMに集中した。こんな時間にお父さんからDM。なんだろう？ アフレル「ワクー、今ちよつといいかい？」

(408)

ワク「ホワツツ？」 アフレル「仕事が決まったぞー」 ワク「コングラッチュレイション！」 アフレル「ありがとー。でも困ったことに単身赴任なんだ」 ワク「タンシンフニン？」 アフレル「ソロ・アサインメント」 ワク「OH！」 英語で言った方が通じるって……とアフレルは思ったり思わなかったり。

(409)

アフレル「やっぱ、いやか？」 ワク「うーん……ノープロブレム！」 アフレル「そ、そうか」 あっさり問題なしと言われてホッとしたような、でもちよつと寂しいような、そんな複雑な思いがアフレルの脳裏に巡った。ワク「ホワツツ・ワーク？」 アフレル「んとなー、ガンバールの開発なんだ」

(410)

ワクは興奮のあまり、その後30分くらいの記憶が吹っ飛んだ。タケシ君がいうには、部屋の壁が突き破られるかと思ったとか。防音性の高いお家にも関わらず、近所から「子供が雄たけびを上げて

いてうるさい」との苦情が入ったとか。とにかくすごい興奮っぷりで、一時的にフロロワーが半減したくらいだ。

(411)

——その日の夕方。ヨコはタケシ君のお母さんにお詫びのリプライをしているところだった。ヨコ「うちのワクがご迷惑をおかけしました」タケシママ「いえいえ、男の子はあれくらい元気な方が良いんですわ、オホホホ。我が家の防音機能がまだまだということですよ、ウフフフ」

(412)

ヨコはリプライを切ると、家族のみんなに向かってポツリつぶやいた。ヨコ「タケシ君とこのママは、なんであんなにこだわるのかしら？ 防音に」みんな一様に首を傾げたが、これはという回答を思いついた者はいなかった。それよりもっと大事なことがある。ヨコ「あなた、就職おめでとう」

(413)

アフレル「あ、ありがとうお母さん」ヨコ「ううん、明日からお仕事頑張つてね。今夜はお祝いにお赤飯を炊いたのよ」アフレル「うっ」実はアフレル、赤飯があまり好きではない。特に甘い豆の入っているのが苦手で、彼の中で甘いご飯は、ご飯とすら認識されない程のシロモノなのだ。

(414)

アフレルは自分で背広のシワを伸ばしながら、正直肩身の狭い思いだった。明らかに妻の機嫌が悪くなっている。それもそうだ、単身赴任なんて大事な事を、相談もなく決めてしまったのだから。アフレルはDMを送った。アフレル「ねえヨコ、やっぱり怒ってる？」ヨコ「ううん全然。なんで？」

(415)

アフレル「いや、僕一人で大事なことを決めちゃったからさ……。気にしてないならいいんだ」 ヨコ「うん、別にそのことは気にしてないわ。あなた甘い赤飯苦手だったけど、塩豆入りなら大丈夫よね」 アフレル「え？ うん、全然OKだよ！ 何でも食べるよ！だって、明日からはもう……」

(416)

ヨコ「秘密基地のごはんってどんなかしらー、あなた何食べたかちゃんと教えてね。参考にしなきゃ」 アフレル「うん。ご飯を食べる時間はみんな合わせよう。食べるものは別になっちゃうけど、やっぱりみんなで食卓囲むって大事だと思うし」 ヨコ「ええ、そうね。ちゃんとしないとね」

(417)

——夕食後。ノルコはワクの部屋で、ガンバールについて教えてもらっていた。ワク「ウィ・ビート・エイリアン・ウィズ・ガンバール」 ノルコ「ようわからんのう、巨大ロボットってなにかー？」話をしたり聞いたりしながら姉弟は、晩御飯の時から両親が口を開いていないことを気にしていた。ワク「hum……」

(418)

イズミ家のTLは現在、ワクのツイートだけになっている。きつとパパとママはDMで話し合ってるんだと思う。しかし両親ともムツツリしている状況は、子供にとって居心地のよいことではない。ワク「喧嘩？」 珍しく日本語DMのワク。しかしノルコに出来ることは、口をへの字にするくらいなものだった。

(419)

ルイ「ノルコノルコノルコー！」 突然ルイからノルコにリプライが来た。ルイ「ちよつとちよつと！ お父さんがガンボールの研究员になったって本当？！ マジ本当？！」 突然まくし立てられて、ノルコはしばらくポカーンとしてしまった。しかし考えて見れば、どのみちつぶやけない。

(420)

ルイ「ああー、もう！ ノルコと話したい話したいー！ 最近全然遊んでないじゃないか！」 そんなルイの熱烈ラブコールに、ノルコはほんのりと頬を赤らめる。ノルコ「そうだ！ こういう時こそお爺ちゃんのPC！」 ノルコはさっそくゲンお爺さんのPCを立ち上げた。

(421)

ゲン「私もみんなと話したいと、いつも思っているよ」 ルイ「わっ、びっくりしたー。ノルコか。うん、そうだよね。ごめんねなんか無理言っちゃってさ。でも凄いいねお父さん。巨大ロボット開発なんて、地球中のちびっ子たちの憧れじゃないか」 ゲン「んー、でもノルコにはそれが良くわからなくて」

(422)

ルイ「わかんない人にはわかんないのかなー、巨大ロボットのロマン！ 強くて大きくて黒光りしてるんだぜ！」 ノルコはそういうのより、可憐で小さくて薄桃色なものの方にロマンを感じるタイプ。ゲン「そんなに凄いの？」 ルイ「うん、超すごい！ JPN 48000のメンバーになるくらい！」

(423)

それはちよつと微妙な凄さだなとノルコは思う。JPNのメンバーってそこそこオシャレで、あとは踊りと歌をちゃんと覚えれば、

案外簡単になれちゃうものだ。なんとって4万8千人もいるのだから。ルイ「なんかさ、最近ノルコの周りで色々起きるね。気付いてるか？　今ひそかなノルコブームなんだぞ？」

(424)

ゲン「私がブーム？」　ルイ「うん、近頃フォロワー数どんどん増えてるだろ？」　確かに、ルイの言うとおり、近頃ノルコのフォロワー数はうなぎのぼりだ。ヤマオ君がつぶやいた時にドンと増えて、ゲンお爺さんのPCを使うようになってからもジリジリと増え続けている。ゲン「ふーむ」

(425)

ゲン「そんなことよりツイート治したい」　ルイ「あはは、まあそうだよな。フォロワー数が増えたって自分がつぶやけないんじゃないよね」　ゲン「うん」　呟けないことは確かに切ない。しかしノルコは最近、呟けないことを逆に利用するようになってきた。つまり、体よく無視できるのだ。

(426)

ゲンお爺さんのPCを使うようになってから、知らない人にフォローされたり、リプライされたりすることが多くなった。その多くはゲンお爺さんのフォロワーさんだ。お爺さんは本当に気に入った人以外はブロックしていたようだけど、亡くなってからもそれを続けることは出来ない。不良フォロワーも増えてきている。

(427)

亡くなつてからもフォロワーが増えるなんて、ゲンお爺さんは凄人だったんだなとノルコは思う。でもそのフォロワーさんの中には、殆ど嫌がらせに近いリプライをノルコに飛ばしてくる人もいるのだ。そういう人たちをノルコは、呟けないことを理由にして無視

している。

(428)

ルイ「ノル？」　ノルコは少し考えたのち、DM機能を使ってルイに返事を送った。ゲン《このごろ、変なりプライが来るの。知らない人から》　ルイ《え、まじで？　痴漢か？！》　ゲン《ううん、何か政治みたいなこと》　ルイ《政治？　何て言われるんだ？》　ゲン《私がゲンお爺さんの正統な後継者だとか、そんなの》

(429)

ルイ《うわ、それってゲンお爺さんの熱烈な信者なのかな。迷惑な話だね。ブロックしちやえば？》　ゲン《そのほが いいかな？》　ルイ《うーん、その人が何て言うてくるのか詳しく知りたいな。明日、学校の後にノルんち寄っていい？　見てみたいよそれ》　ゲン《そうしてくれるとうれしいな》

ツイトピア430〜471

(430)

ノルコは母に、明日お友達が遊びにくることを伝えようとしたけど、咳けないので代わりにルイが伝えることに。それから母がノルコに「OKよ」とリプライを入れるという、ちょっと回りくどいことをする。ノルコはPCを閉じ、ガンバールのことでずっと友達と喋っているワクをよそ目に、お風呂に向かった。

(431)

ノルコはお風呂の脱衣所に入って扉にカギをかける。洗濯機の上に畳んだパジャマを置き、そして服を脱ぎ始める。ノースリーブの夏物セーター。苺のプリントが入ったシャツ。ベージュ色のショートパンツ。水色の横じまが入った靴下。全部綺麗に畳んで、洗濯機の横のカゴに入れていく。

(432)

全ての衣服を脱ぎ終えて、カゴを覆うようにしてバスタオルを置くと、ノルコは浴室へと入っていった。ノルコ（ふーんふーんふーん……） 咳けないので頭の中で鼻歌をハミング。まずはシャワーを浴びる。こうして体を流してから湯船につきり、それから体を洗ったりするのがイズミ家の流儀だ。

(433)

ボディソープで体を洗いながら、ノルコは自分の体をチェックする。最近とにかく肉がつく。小さかった頃のノルコはガリガリにやせていて、あばら骨とか尾てい骨とか、とにかく骨が突き出ていた。ノルコ（……お相撲さんになっちゃう！） 成長期なので仕方ない

ことなだが、やはりそこは女の子。

(434)

ノルコ(……ハッ!) ノルコはお風呂場にＴＬが設置されていることを思い起こして、一瞬息を飲んだ。でもすぐ、それがなんのこっちゃと思い直す。お風呂場で自分の体をしげしげと観察している女の子なんて、はしたなすぎて家族にも知られたくない。でもＴＬにはそこまでは記録されない。

(435)

イズミ家のお風呂ＴＬには色んなことが記録される。誰がどれだけお湯を使ったか、何のお湯に何分かつたか、お風呂のフタはちゃんとしたか。さらには、どんな歌をハミングしたかとか。どれも資源の有効利用と、家族の健康管理のために欠かせない情報だ。そのためノルコは、先ほど監視されているような気分になったのだ。

(436)

ノルコ(お風呂にはＴＬがあるけど、トイレにはＴＬがない。不思議) 体を洗い終わったノルコは、再び湯船につかりつつ思う。お風呂とトイレの間に何か違いがあるのか？ わかるような、わからないような。しかしとにかく法律で決まっている。トイレにＴＬを置くことは現在タブーなのだ。

(437)

ノルコ(そもそもトイレにＴＬを置いてどうするかー?) お小水の量でも調べて記録するのだろうか？ 後はいつ誰が何分利用したかとか？ そんなことはまっぴら御免だと、ノルコは素直に思う。もっともらしい利用目的としては、緊急時の通報用だが、それだつて別にＴＬでやる必要はない。

(438)

ノルコは顔を湯船に半分沈めてブクブクしつつ、改めてＴＬを設置することの意義を考えた。一番重要なＴＬの機能は、その場でなされた会話や独り言を記録するというものだ。記録しておけば、あとでゆっくり状況を省みることが出来る。必要があれば、かなり過去まで遡って検討することができる。

(439)

次に、その場に人や物がどれだけ存在したかを記録することだ。人々がお互いの行動を把握しやすくなり、亡くし物をした時もすぐにＴＬをたどって発見できる。誰もいない場所で一人ぼっちになっても、かつて人々がそこで活動していた時のＴＬを眺めたりして暇をつぶすことができる。

(440)

いまやＴＬは、生活に欠かせないものという次元を超えて、空気や光のように、ごく当たり前に存在するものになっている。それがトイレだけには適応されていないのだ。トイレにＴＬを設置しないことで、人々は一体何を守っているのか？ 改めて問われてみれば、なんとも答えようもないことだ。

(441)

こんな難しい問題を、まだ小学5年生のノルコに解けるはずも無く、しかも何だかのぼせてきた。ノルコ（そろそろあがろうー……）そうノルコが思ったとき、唐突に一通のリプライが飛んできた。ミギノウエ「この間リプライした件、考えてくれたかな？ ノルコちゃん」またきた。ノルコは風呂場の中で一人、臨戦態勢をとった。

(442)

しかしノルコは、いつも通り無視することにした。ミギノウエ「君はミスター・ゲンのひ孫さんだ。そしておそらくは彼と似たポリテイクスを持っている。と僕は推測する。やはり君は、ゲンお爺さんの意思を継いで、政治の表舞台に立つべきだし、それが出来る人物だと僕は思う」

(443)

ミギノウエという人物は、トウキョウのアカサカに住んでいる男の人で、年齢は34歳。職業はプログラマーとなっている。彼はノルコに対し「政治の表舞台に立て」という一貫した主張を続けている。ノルコ(……一体何なんだろう?) さらに困ったことに彼は、ゲンお爺さんの相互フォローなのだ。

(444)

ゲンお爺さんがフォローしている(生前の話だが)ということ、ノルコはこの人を信用したのも思っている。しかしその主張が「政治に首をつつこめ」だというのは、いかにも胡散臭い。ノルコは逆に色々質問してみたい気分だったが、いかんせん呟けない身。それに相手も気にしていないらしい。

(445)

ミギノウエ「君が呟けない病気だっことは良くわかってるし、別にそれで全然かまわないんだ。ただ僕の話聞いてくれさえすれば。その方が僕らにとっても都合が……いや、特に深い意味は無いんだよ、ゲフンツ」このような含みのある言い回しをちよくちよく使ってくることも、ノルコをイラツとさせる。

(446)

ミギノウエ「改めて言っておくよ。君にはゲンお爺さんの意思を継ぐ資格と、そしておそらくは義務がある。この国の国会議員は、

全国民による相互投票によって、法案ごとに選出される。そこに年齢制限は存在しない。つまり小学生の君でも国会での議決投票に加わることができるんだ」

(447)

ノルコ(それは知ってます!) 体内ツイッターの普及によって、選挙システムも変化した。国民は、自分達の知る人の中から「この人が国会議員だったらいいのに」と思う人に投票することができる。しかし選出されるのは投票数の多い人ではなく「投票関連度」の高い人だ。これは少しわかりにくい。

(448)

例えば、ノルコがルイに投票し、ルイがヤマオに投票した場合、ノルコは“ヤマオを支持するルイ”を支持したことになる。つまり、ルイとヤマオの両方に投票したことになり、票が累積されるのだ。この場合、ノルコ0票、ルイ1票、ヤマオ2票という形で、票が振り分けられることになる。

(449)

もし、その状態でヤマオがノルコを投票すれば、そこにノルコ・ルイ・ヤマオのループが出来上がる。こうなった場合、票は累積されず、それぞれ1票として処理される。この操作が現在の日本国民の間で行われるわけだ。つまり理論上の最大獲得票数は(全人口・投票棄権者数)となる。

(450)

ノルコ(だからって私が国会議員に選ばれるわけない、常識的に考えて) ノルコ達は、友達同士で投票しあったりするが、結局ループがたかさんできてしまうので、大した票にはならない。ミギノウエ「果たしてそうかな?」 ノルコ(!?) ミギノウエ「おっ

と、なんでもない。ゲフフンッ」

(451)

ノルコ(今の、頭の中を覗かれた感じは……)　ホウさんみたいだとノルコは思った。そしてその仮定が意味するところは。ノルコ(GPTL!?)　ホウ以外にもGPTLを利用している人がいてもおかしくない。ノルコは愕然とした。このミギノウエという人はきつと、私を利用して政治を動かそうとしているんだ、と。

(452)

ノルコはお風呂を出ることにした。そしてパジャマに着替えている間中『何も考えないこと』に徹した。思考を読まれてしまうのなら、何も考えなければいい。ミギノウエも潮時と思ったのか、ピタリとリプライを止めた。今の世の中、夜遅くに偏執的なリプライをし続けても、何ひとついいことはない。

(453)

ノルコは脱衣所を出た後も何も考えなかった。何も考えずお風呂上りのスポーツドリンクを飲み、自室の絨毯にコロコロをかけ、ランドセルにノートとマイ箸を入れ、机の上のピヨッターをジッと見つめ、洗面所に行つて歯を磨いた。ノルコ(思ったより簡単だ何も考えないの。あ!)　考えない考えない。

(454)

何も考えないようにしていたノルコは、家族に話しかけられたら何かしら考えなきゃいけないかな、なんてことも考えず、まるで夢遊病に罹つたようにフラフラとダイニングに歩いていつて、食卓の椅子に座つた。向かいの席にアフレルが座っていた。テレビがついていて、弓道講座をやっていた。教育チャンネルだ。

(455)

ノルコ() ノルコはもうまったく完全に無思考の境地に達していた。自分が何も考えていないことにも気付いていなかった。一方アフレルは、テレビの方を向いてはいるが、目の焦点はそこではなく、遙か彼方だった。何か物凄い勢いで思考しているようにも見えたし、ノルコと同じく何も考えていないようにも見えた。

(456)

そのまましばし時が流れた。テレビだけが、ダイニングの沈黙を癒していた。テレビ「弓は強く握ってはなりません。人差し指と親指の股に軽く気持ちをこめ、小指の付け根を締めます。俗に卵握と呼ばれ、ちょうど生卵を手につくくらいの力加減です。強く握ってしまうと弓が返らず、矢勢が弱まり、狙いも定まりません」

(457)

テレビ「執り掛け、打ち起こし、引き分け。一連の所作の中でも常にこの卵握を意識します。何度も繰り返し練習し、意識しなくとも出来るようになりましょう。親指が的に向かって伸び、角見が十分に利いていれば、離れの際に弓がクルリと手の甲側に返ります。以上が『手の内』の作り方です」

(458)

テレビ「手の内を隠すという言葉がありますが、それは弓道の手の内からきていると言われています。手の内の作られ方は射手の数だけあるといわれ、弓道において最も工夫がなされる個所です。日々の鍛錬の中、何年もかけて作る大切な手の内ですので、そうやすやすと人に教えるわけにはいかない訳ですね」

(459)

何も考えていないノルコは、もちろん弓道講座の内容など頭に入

っていなかった。目の前でアフレルがボーっとしていることも頭になかった。今、ノルコの頭にあるのは、真っ白な心地よい海だ。真っ白な海水が、真っ白なしぶきをあげ、真っ白な砂浜に押しは引いている。ざざーん、ざざーん。

(460)

アフレル(……………あっ) アフレルがノルコの存在に気付いた。アフレル(いつからそこに…………?) 娘は弓道講座を熱心に見ていた。まるでテレビの中に溶け込んでしまったのではないかと思うくらい、熱心に。アフレルはいつか娘が弓をやりたいと言ってきたら、喜んで了承してあげようと思った。

(461)

ヨコ「あなた、お風呂は？」 寝室で布団を敷いているヨコがツイートした。家ＴＬが一段下がり、その上にヨコのツイートが書き加えられる。アフレル「あっ、うん、今入る！」 アフレルはノルコを横目にチラッと見ると、せかせかとお風呂に向かっていった。ヨコが寝室で、一人静かにため息をついた。

(462)

妻がムツツリとした様子で「別に怒ってないわ」という時は、間違いない怒っている。事実ヨコは怒っていた。夫が勝手に単身赴任を決めたことではなく、一番最初にワクに相談したためにだ。仮にも一家の大黒柱が、まだ10にもならない息子に、就職に関する相談をしたのだ。

(463)

その事実はヨコの美意識に反していた。アフレルの美点は、いつでも純真で裏表がないことだが、しかしそれは時として「いくつになっても大人にならない大きな子供」という印象をヨコにもたらず。

先ほどの「あつ、うん、今入る！」だって、まるで言葉を覚えたばかりの子供のようだ。

(464)

単身赴任のことも、いつそ夫の独断で決めて欲しかった。なんなら家族ごと引越したって良かった。「オレは秘密基地の研究員になることにした、だからお前達もついてこい！」男ならそれくらいの強引さや気概があってもいいんじゃないかとヨコは思う。そうじゃなきゃ張り合いがない。

(465)

しかしそれを今の夫に求めることは、たぶん難しいだろう。ヨコ(……あらやだ!) 私は今いつたい何て考えた? 今の夫にはって思った? 夫は今も昔もこれから、あの人だけのはずではないの? そう思いつつも、ヨコの脳裏には、先日ナンパをしてきたイタリア風の青年の面影が浮かんでいた。

(466)

——あなたがガンモドキを忘れるだろうことを予感しておりましてので——。それって一体どんな予感なの? ヨコは今日までに何度そう問い直したか知れない。確かに変わったナンパ術だ。しかし重要なのは形ではなく、思いの強さだ。ヨコ(いけない、疲れてるせいか、おかしいことを考える……)

(467)

ヨコは早めに寝てしまおうと思う。寝る前に炊飯器のタイマーを確認しようとキッチンに向かった。通りがけのダイニングにノルコがいた。ヨコ「あら? ノルコなに見てるの?」ノルコは弓道講座が終わったあとの「これからの番組予定」を見ていた。恐ろしく熱心に。まるで目がテレビになってしまったかのように。

(468)

ヨコ「??」 ヨコは何がそんなに気になるのだろうと首を傾げた。何かとても重要な番組でも予定されているのだろうか? いや、そんなことはない。ヨコ「……えっ?」 ノルコが唐突に椅子から立ち上がった。そして耳たぶ操作でテレビを消す。まるでゼンマイ人形のような力チ力チとした動きだった。

(469)

ヨコは変だなと思った。しかし出来ることは一つしかなかった。ヨコ「ノルコ」 ノルコは反応しない。ヨコ「ノルコ!」 強く言っ
て肩をさすった。ノルコがその場でビクツと跳ねた。ヨコ「どうしたの?」 ノルコはしばらく口をポカーンと開けて、それから何かに気付いたように首を横にプルプルさせ始めた。

(470)

ノルコはその後すぐに走って出て行ってしまった。ヨコはキツチンでオロオロとした。どうしちゃったの私の子。明日お医者さん? それとも今すぐ? しばらくしてヨコにリプライが来た。ゲン「おふろでのぼせた」 その1ツイートで、ヨコの胸中の不安がスツと溶けた。ヨコ「もうノルコったら!」

(471)

ノルコもノルコでホツとした。変な子と思われてしまうところだった。やはり人間、何も考えないで生きて行くのは難しい。ノルコ(もう寝るから!) ノルコは自分の心を覗いているかもしれない誰かに向かってそう唱える。そして布団をかぶって電気を消すと、すみやかに夢の世界へと潜り込んだ。ノルコ(おやすみ!)

ツイートピア472〜493

(472)

——きーんこーんかーんこーん。朝の予鈴がなった。遅ればせに登校してきた子供たちが、足早に教室へと向かっていく。ジェネ「うーん……」保健室の一角では、机の上で保険医のジェネ先生がノルコのバイオデータをチェックしていた。ジェネ「なかなか治らないわねえ……ノルちゃんのツイート」

(473)

ジェネ先生はウェーブがかったブロンドをさりげなくかき上げ、淹れたばかりの特濃コーヒーを口に運ぶ。近ごろ蒸し暑い夜が続いて寝不足ぎみなのだ。ジェネ「バイオロジーマットワークに異常はなし、もういつツイートが戻ってもおかしくない状態だけど」そう言うってジェネ先生はうーむと考え込む。

(474)

ジェネ「もしかして、つぶやき方を忘れている？何かきっかけみたいなものが必要？」しかしジェネ先生には、そのきっかけの作り方が今ひとつ思いつかない。ジェネ「困ったわね。そのうち自然になおるのかしら？」とんとんとん。ドアがノックされた。ジェネ「はい、どうぞー」

(475)

クオ「失礼するおっ」入ってきたのは「眠りのウィスパーボイス」の二つ名を持つクオ先生だった。ジェネ「あら、どうしたんですか？」クオ「いやあ、そのお。ちょっと今朝からお腹の調子がよくないんだお。何かいい薬ないかなと思っておっ」ジェネ「ふ

わああゝ。ちょっと待って下さいね」

(476)

生あくびを噛み下しつつ、ジエネ先生は棚から整腸剤を取り出した。ジエネ「はい、どうぞ」 クオ「どうもなんだおっ」 クオ先生は薬を上着のポケットにいれると、ぼんやり窓の外に目をやった。クオ「今日はいい天気ですお」 ジエネ「ええ、本当にー。うつらうつら」 ジエネ先生、今にも寝そう。

(477)

クオ「今週いっぱい天気がいいらしいんですお。それでその……今度の水曜の祝日、もしお暇だったらお……」 ジエネ「こつくり、こつくり」 クオ「一緒にパラグライダーなどやりにいきませんかおっ、おっおっおっ」 クオ先生は額に汗だったが、ジエネ先生は鼻からzzzマークがもれていた。

(478)

——きーんこーんかーんこーん。お昼休みの予鈴がなる。ジエネ先生が催眠術のような眠りから覚めたころ、ノルコ達のクラスでは給食の準備をしているところだった。ヤマオがトレイを渡し、ルイが白飯をよそい、ノルコがつみれ汁をつぎ、レイタがだし巻き卵をのせ、リンが金平と佃煮を添え、カズノリが牛乳を配る。

(479)

給食の準備ができたころ、突然レイタがノルコに言ってきた。レイタ「だし巻きやるよ。好きだろ？」 そういつてだし巻き掴んだトングをググイと突きつけてきた。ノルコはオタマを持ったままポカーン。ノルコ(……いったいどういう風のふきまわし?) しかし、だし巻きはしっかり頂いた。

(480)

レイタ「……悪かったな、いろいろ」そう気まずそうに言い捨てると、レイタは自分のトレイを持って行ってしまった。ルイ「なんのかな？ いまさら」ノルコは首を傾げつつ、自分の分のつみれ汁をついで席へ向かう。そして全員着席し「いただきます」をする段取りとなった、その時……。

(481)

レイタ「ちよつとまった！」レイタがいきなり立ち上がって叫んだ。教室にどよめきが走る。レイタ「今、この場でガンバルやつてるやつ、スタンダアップ！」申し合わせたかのように、クラスの上半分以上が立ち上がった。ルイもなんとなく、つられて立ち上がってしまった。

(482)

ルイ「レイタあ？」レイタはルイの怪訝な視線も気に留めず言う。レイタ「俺は……俺は今ほど嬉しいと思ったことはない！」といって胸の前に握りこぶしを作る。レイタ「全員、ノルコに向かって敬礼だ！」ばばっ！いくつもの敬礼が、突然ノルコに向かってなされた。ノルコ（な、なにごと！？）

(483)

——ノルコばんざーい！ノルコのパパばんざーい！戦え我らのガンバル！地球の未来に光あれ！——謎の唱和斉唱が、ノルコを中心としてなされていた。ルイ「……そういうことか」レイタ「俺、ノルコのクラスメートでほんとうに良かったぜ！友達の父さんが秘密基地の研究員だなんて、まじ最高だぜ！」

(484)

レイタ「なあノルコ！俺たち友達だよな！な！食いもんを

交換する仲だよな！ 大親友だもんな！」 そしてノルコの手をとり強制ハンドシェイク。レイタ「で、今度ノルコの親父さんの職場に行ってみたいんだが――」 と、そこまで言ったところで、ノルコのみドルキックが彼の尾てい骨に炸裂した。レイタ「あゝー！！」

(485)

給食後、ノルコ達は会議を開くことにした。例の迷惑リプライについてだ。放課後ノルコの家について、ゲンお爺さんのPCで「ミギノウエ」について調べるのだ。ルイ「犯人はミギノウエってやつなのか、変わった名前だな」 カズノリ「しょ、小学生に政治の話をけしかけるなんて。ふ、フトドキな人だよ！」

(486)

ノルコの席を囲むようにして、ルイ、リン、カズノリが座っている。少し離れた窓際では、ヤマオがボーっと外を眺めている。レイタは体育館だ。テコンドーの修行をするらしい。リン「ミギノウエ……さん？ なんだかどこかで聞いたような？」 ルイ「えっ、どこで？」 リン「どこでっていうか……なんだろう？」

(487)

カズノリ「あ！」 秀才肌のカズノリ君が何かに気づいたようだ。そしてヤマオの方を振り向いた。カズノリ「や、ヤマオ君の。よ、四番目のツイート」 ノルコ（！！） ルイ&リン「あ！ そうだった！」 そして4人の視線がヤマオに集まる。ヤマオ「……………」 ヤマオの切れ長な目と福耳が、ゆっくりこちらを向く！

(488)

一同 ヤマオはしばし首だけをこちらを向けた状態で佇み、そして再び窓の外に視線を戻した。ルイ「なあヤマオ。まさかとは思うけど、何か関係あったりするか？ ミギノウエって人と？」 ヤマ

才は両腕を組むと、やや上方を見やって考え込んだ。そしておもむろに首を振る。知らないということだ。

(489)

ルイ「そうだよな、ただの偶然だよな。ごめんなヤマオ」 ヤマオは手の平をこちらにかざし(問題ない)と伝えてくる。カズノリ「な、何はともあれ、げ、ゲンお爺さんとの、か、関係を、し、調べないと、ねっ」 政治問題とかに強そうなカズノリも、今日はノルコの家に行くことになっている。

(490)

やがて5時限目の始まりを告げるチャイムがなった。ノルコ達は席に戻って準備をする。タッチパネルになっている机の天板を綺麗に拭いてノートを起動し、耳たぶクリックで教科書を表示、タッチペンを机の隅に置いて準備完了。ノルコ(……ん?) ヤマオがノルコの方を見ている。なんだろう？

(491)

先生が教室に入ってきて、電子黒板の落書きに黒板消しをかけていく。その間中、ヤマオはジッとノルコを見つめていた。ふくよかな顔の輪郭に埋もれる切れ長な瞳。その瞳がさらに細く糸のようになる。極限にまで収斂されたその視線は、ノルコの網膜さえ貫いて、まるで頭の中に直接メッセージを伝えてくるかのようなだった。

(492)

「起立！ 礼！ 着席！」 日直の号令とともにノルコはヤマオの視線から開放された。ノルコは席に着きつつ思う。ヤマオ君は私に向けて何か重要なことを伝えてきたのでは？ 実はミギノウエっという人と関係がある？ ヤマオ君とミギノウエさんは、実はやっぱり知り合いなのか？

(493)

考えるほど謎は深まるばかりだ。ノルコ（問題が山盛りだわ！）
つぶやけない病氣、ミギノウエの政治勧誘、秘密基地員になった
お父さん、ナンパされたお母さん、ホウとGP TL、ヤマオの意味
深な視線……。ノルコ（もう何が何やら！） まったく思考がまと
まらない。ノルコはひたすらタッチペンを回し続けるのだった。

(494)

放課後になると、一同はまっすぐノルコの家に向かう。女子3人の中に一人のカズノリ、それとなくヤマ才君をさそってみた。すると以外なことに、二つ返事で了承してくれたのだった。ルイ「ヤマ才が放課後寄り道って珍しいな！」そう、ヤマ才が誰かの家に遊びに行くなんて滅多にないことなのだ。

(495)

ノルコは家に着くと、心の中で(ただいまー)と言いながらドアを開けた。カズノリ「お、おじゃましますっ」ルイ「こんにちわー」リン「おじゃままですっ」ヤマ才「……………」母のヨコはダイニングから顔をのぞかせつつ、ヨコ「はいはい、いらっしやいー。ゆっくりしていつてね！」

(496)

ヨコは子供たちが二階に上がっていくの見送った後、お菓子のジュースの用意を始めた。ヨコ(ヤマ才君ってああいう子だったのね。なんて大人びてるのかしら、まだ小学生なのに) 玄関先でのお辞儀の仕方なども堂に入っていて、夫のアフレルにも見習って欲しいくらいだった。

(497)

ヨコ(ヤマ才君のおうちにはお父さんがいないのよね……確か)ヤマ才は母と二人暮らしである。父親はヤマ才が生まれてまもなく、まさに煙のように消えてしまったらしい。しかも、生まれてきたヤマ才はなかなか言葉を発しなかった。この当時のヤマ才の母の気持

ちは、想像に余るなとヨコは思う。

(498)

言葉を発しないヤマオは、当然ながら知能障害が疑われた。しかし3歳時の知能テストの結果、ヤマオの知能指数は平均を上回っているということがわかった。事実、ヤマオは殆どと言ってよいほど母親の手を煩わせなかった。それどころか、気落ちしがちな母を慰めるような行動さえ見せたのだった。

(499)

EQ・IQともに人並みはずれた天才児。しかし滅多につぶやかない。ヤマオはある種のサヴァンなのではないかと考えられ、発達心理学や児童心理学に関わる人達の目を引くこととなった。ヨコ(よく考えれば物凄い子だけど、それでもノルコのお友達に変わりはないわ) そうしてヨコはノルコの部屋にお菓子を運んでいった。

(500)

子供達はお菓子を持ってきてくれたノルコの母親にお礼を言っと、さっそく例のPCを起動させた。ルイ「これがPCってやつか！なかなか使えるようになってないな」リン「このカリカリって音なんだろ？」カズノリ「た、たぶん。き、記録装置が、う、動いてるんだよっ」ヤマオ「……………」

(501)

PCが起動すると、すぐにツイッター用のブラウザを立ち上げる。カズノリ「む、む、僕らのツイッターと、に、似てるね」ルイ「だな。これでツイートをどんどん逆登っていけば、いずれミギノウエって人のリプライに行き当たる」リン「でもどれだけ逆登ればいいのかな？ 下手すると明日の朝までかかるかも」

(502)

一同どうしたものかと首をひねったその時、ヤマオの瞳がキラールンと光った。ヤマオはノルコの肩を軽くつつく、まるで「ちよつとPCいじつてみていい？」とでも聞くように。ノルコはウンウン首を縦に振る。ヤマオはさっそくマウスを片手にPCを操作しはじめた。カズノリ「や、ヤマオくん……すごい」

(503)

ヤマオがやったことは至極単純な操作だった。ゲンとミギノウエの名前、両方を含むツイートの検索をかけたのだ。ルイ「そうか、この手があったか！」リン「こんなの普段やらないから、わかんなかったねー」誰かさんと誰かさんが何を話していたか、なんてことノルコ達の世代は気にしないのだ。

(504)

カズノリ「さ、流石だね、や、ヤマオ君。尊敬するよ……」そうこう喋っている間にも、ノルコはゲンとミギノウエの会話をどんどん読んでいった。最初の方は、ゲンお爺さんが亡くなった時の御悔みのツイート、その下が闘病中の励ましツイート、その中に、どうも政治っぽい話題がチラホラ混ざっている。

(505)

ミギノウエ「@ゲン：ああ、人類はまたかけがえのない人を失なうんですね。ああ……ご冥福を」ミギノウエ「@ゲン：しっかり！ 気をしっかり持ってくださいミスター！ 僕はもっと貴方と話いたいことがあるんです！」ミギノウエ「@ゲン：落し物管理法案が否決、やりましたよ！」

(506)

ルイ「なんだか普通に親しかった感じだね」ゲンお爺さんが亡

くなつた時、ノルコは5つか6つくらいだったからよく覚えてないのだが、でもその時にミギノウエ氏とこんなやりとりがあつたなんて、正直おどろきだった。ノルコ（私に政治の話ふってくるのも…わからなくもないかな？）

（507）

一同はさらに古いツイートを読んでいく。ゲン「@ミギノウエ：落し物管理法案の『管理』は『監視』の婉曲表現だと私も思います。紛失物の情報を第三者機関により一元管理し、落とし主に確実に返却する。聞こえは一見よいが、要は特権団体による情報の独占であり、一方的社会監視の一助となるだろう」

（508）

カズノリ「な、なんとも本格的、的な議論だ、ね」リン「落し物ひろつた時って、たまに返す返さないでもめるんだよね」ルイ「この『監視』って言葉が重要なんだな？」ノルコはウンウンうなづく。監視という言葉が、世の中を底なしのドロ沼に引きずりおろすのだと、お爺さんはよく言っていた。

（509）

ゲン「@ミギノウエ：もう100時間くらいぶっ続けてPCの前におるな？ 散歩でもして日に当たってきなさい」ミギノウエ「@ゲン：うわなぜバレタwww」ゲン「@ミギノウエ：わしが何年ツイッターやってると思っちやるw」ミギノウエ「@ゲン：ちよっとコンビ二行ってきますwww」

（510）

ミギノウエ「@ゲン：ゲンさんは、宇宙人の存在って信じてる口ですか？」ゲン「@ミギノウエ：いてもおかしくないじゃろ」ミギノウエ「@ゲン：侵略とかしてきます？」ゲン「

@ミギノウエ：全力でバトる」 ミギノウエ「@ゲン：えっ！」
ゲン「ミギノウエ：血の気の多い奴等にはそれが一番」

(511)

ルイ「ずいぶん仲よしさんだね。Wの連発にはちよつと時代を感じるけど。ゲンお爺さんはどんなきつかけでこの人と相互フォローになったんだろうね」 リン「ゲンおじさん、相互少なめ」 カズノリ「あ、相手を、え、選んでたんだ、ね。な、何かき、基準があったの、かな？」 ノルコはしばし考えた後、キーボードに手をかけた。

(512)

ゲン「何となく良い感じのする人をフォローしてた」 カズノリ「な、なんとなく?!」 ゲン「言葉の汚い人はフォローしなかった」 ルイ「まあそれはあるね」 ゲン「神秘的な感じのする人が好き」 カズノリ「な、なんでそんなこと知ってるの？」 ゲン「むかし好きな女の人のタイプを聞いたの」

(513)

ルイ「うんまあ、ツイートしてる分にもそれとなくわかるかな。ノルコのお爺ちゃんって、きつと風変わりな人に好かれるタイプなんだ」 言われてみれば、ミギノウエという人はどこか理解不能なところがある。自分だけベラベラ喋って、相手の返事を待つことなく消えてしまうあたりなんか。本当に何を考えてるんだろう。

(514)

ルイ「頑張ってTL逆登ってみよう」 それからノルコ達はひたすらマウスをカチカチやってTLを過去へと逆登って行った。ノルコ（みんなお菓子食べるの忘れてない？） ノルコに促されて気づいたみんなは、マウスを交代でカチカチやりながらボッキーやら揚

げ団子やらをつまんで食べた。

(515)

ヤマオ「……………」 ヤマオはジュースのストローを咥えたままジーツとディスプレイを見つめている。マウスを必死にカチカチやってるのはカズノリで、だんだん慣れてきたためか、TLは結構な速度で流れていく。しかしヤマオはその一文一文をしっかりと読んでいた。ノルコ(読めるの?!)

(516)

ルイ「よし！ 行き着いたぞっ、みんな！」 一同、PCの前につめよる。【投稿日時：2090年8月2日12時34分】ミギノウエ「貴方の考える愚民思想の問題点とは？ RT@ゲン：とかく大抵の発案者は愚民思想の持ち主で自分だけが賢いとおもつとる」これが二人のファーストコンタクトだった。

ツイートピア517〜551

(517)

ルイ「……な、なんだ？」 一同沈黙 カズノリ「に、人間のほとんどもは愚かだから、だ、誰か頭のいい人が、し、し、指導してあげなきゃ、い、いけないって考えただけど……」 ルイ「そうなのか？ なんだかムカツとする考えだな。アホはアホなりに考えてやってるしんだし」 リン「うーん、私は政治の話とかさっぱり」

(518)

カズノリ「つ、続きを読んでみよう」 カズノリの提案で一同Pに目を戻す。思いがけないキーワードに、みな少々恐縮している。ゲン「特権集団による情報の独占は、往々にして公共の利益に反する決断を生む。もっとも、これは一般論だが。RT@ミギノウエ：貴方の考える愚民思想の問題点は？」

(519)

ミギノウエ「@ゲン：個人の管理能力を超えた今日の情報氾濫が、市民生活を混乱させている事実があります。それを防ぐための一元管理は、検討されて然るべきでは？」 ゲン「@ミギノウエ：その混乱を乗り越えることでのみ人は進歩する。一方監視が作る仮初めの平穏は、いずれ利権の温床となり社会を蝕むだろう」

(520)

ノルコ（ゲンお爺さん、なんだかとっても難しいお話してる……）
ノルコはそう思ったが、その一方で。ノルコ（……でも何となくわかる気がする） とも思った。カズノリ「ど、どうやらミギノウエさんは、げ、ゲンお爺さんのポリティクスに、興味を持って、り、

リプライしてきたんだね」

(521)

ルイ「いやまてよ、何となく対立してるように読めないか？」
リン「うんっ、私もそう思う！」　そして一同はさらに読み進める。
ミギノウエ「@ゲン：ではプライバシー問題はどうします？　バイ
オツITTERは個人情報秘匿性を奪いました。取り戻すにはセキ
ユリティー団体による管理が必要です」

(522)

ゲン「@ミギノウエ：プライバシーという概念は不変ではない。
時代によって変化する。現在のような相互監視社会において、プ
ライバシーは一種の贅沢品であるし、過剰な保護はかえって猜疑心を
深め、人々を孤立させる」　ミギノウエ「@ゲン：隠し事が人々を
孤立させると言うのなら、いずれ人は服すら着られなくなります」

(523)

ルイ「そりやただのあてつけじゃないか！　やっぱちょっと変だ
ぞこのミギノウエって人」　リン「服は着ないわけにいかないよ…
…」　カズノリ「ん？　ん？！　っ、次のツイート！」　ゲン「@
ミギノウエ：世の中には、一家そろってスッポンポンという方々も
ある。いずれ人類がみなそうなる可能性は否定できまい」

(524)

ノルコ「……確かにいるけれど」　いわゆる裸族と呼ばれる人々
であるが、まさかそんな切り替えしをするとは。みんな、自分なら
こんな質問された時点で無視を決めてしまうだろうと思っていた。
ルイ「凄いね、ノルコのひい爺さん」　リン「で、でもすっぽんぽ
ん?!　えー?」

(525)

ノルコ(そういえば……) 以前、こんな事件があった。プライバシーの保護を訴える過激な人たちが、無作為に抽出した人々の入浴シーンをネット上にばら撒いた。そうすることで、人々のプライバシー意識に火をつけようとしたのだ。今の世の中、その気になればこんなことも出来てしまうのだ、と。

(526)

無論、隅々まで相互監視の行き届いたツイート社会において、彼らの行動は見逃されるものではなかった。すみやかに晒し上げられ、社会的な制裁を受けた。件の入浴シーンは、発信元から末端までくまなく検索され、完全に消去された。全てバイオツITTERを使っていたのである、労力はそれほどかからないのだ。

(527)

晒された側の人達は「別に恥ずかしいとかはない」と主張。晒そうとする側が逆に恥を晒して懲りるという、相互監視社会らしい決着がついた。ルイ「服を着ることが常識じゃなくなるって、あるのかな？」リン「お、大昔はみんな裸だったんだろうけど」カズノリ「つ、続きを読む……」少年は顔を赤らめていた。

(528)

ゲン「@ミギノウエ：こう考えればどうか。生まれたままの姿を保護すべき個人情報と捉え、裸になったり裸を表現したりしてはいけない、という決まりを作ったとする。それで個人のプライバシーが守られるのだろうか？ 私たちはただ『裸を表現する自由』を特定団体に奪われただけではないだろうか？」

(529)

ゲン「@ミギノウエ：決め事というものは、だいたいが人から自

由を奪う。バイオツイッターによる情報拡散は自然現象として不可逆であるから、それを制限したら際限がない。世の中は際限なく窮屈になり、行動は自ずから決定され、人々は自由意志を失うだろう。それは良くない事と私は考える」

(530)

ミギノウエ「@ゲン：貴方は今、自由意志という言葉を使われましたが、この相互監視が隅々まで行き届いたツイッター社会にだって、はたして自由意志があるのかどうか。僕たちは今、裸を表現するどころか、夕食の献立を考えるにだって、世の中の目を気にしなければなりませんよ？ 行動は自ずから決定されつつある」

(531)

ゲン「@ミギノウエ：自由とは何もかもが思い通りになることは違うと私は思う。問題は相互監視ではなく一方監視。一方監視の行き着く果ては独裁であり、果ては人類の単体化だ。そもそもバイオツイッターが無ければ監視はないのか？」

(532)

ミギノウエ「@ゲン：少なくとも昔は、夕食時の会話まで衆人監視の下におかれることはありませんでした。今はその気になれば地球の裏側のご家庭の内情まで瞬時に調べられる。果たしてこのままでもいいのでしょうか？ 相互監視下における自由は気球みたいなものだ。全ては世の中の空気次第です」

(533)

ゲン「@ミギノウエ：人は本質的に、衆人監視の下で生きるものだと私は思うが……。自由を気球と比喻することは、言いえて妙と思う。バイオツイッターが無くとも、近くに一人でも他者がいれば、それは監視されていると同じこと。我々はみな、相互監視という名

の空気に漂う、一隻の気球なのかもしれん」

(534)

ゲン「@ミギノウエ：少し、昔の話をしよう。私はかつて完全なプライバシーを保った生活を体験したことがある。完全な個室で一人で暮らし、外に出るときもネットに出るときも、完璧な匿名性が保たれていた……と思っていた。実際は、監視カメラや通信ログなどで、常に誰かが監視していたわけだが」

(535)

ゲン「@ミギノウエ：自由気ままと実感できる日々も、やがて終わりが来た。バイオツwitterの爆発的な普及によってだ。推進派と反対派が激しくせめぎ合い、血生臭い事件もおきた。しかしその抗争は不思議な構造をもっていた。推進派も反対派も、『個人の自由を守る』ことを旗に掲げていたのだ」

(536)

ゲン「@ミギノウエ：推進派は相互監視を広めることで世の中を公平にしようとした。隠し事や不正が出来ない社会でこそ、人は真に自由になれると考えた。反対派は、個人が内面的な秘密を持てる事こそが自由であるとし、それを守ろうとした。本音と建前を、外向きと内向きを、あくまでも仕切ろうとしたのだ」

(537)

ゲン「@ミギノウエ：まさしくそれは、自由とは何かを定義するための闘争だった。正直、いまだ私には判断がつかない。みなバイオツwitterは便利だからと言って導入しているが、私は確かな判断がつくまではと導入していない。この歳になってもまだ、自由とは何なのかわからないのだ」

(538)

ゲン「@ミギノウエ：ただ一つ、確信を持つて言えることが一つだけある。それは、情報の拡散は不可逆であるということだ。どんな隠し事もいつかはばれる。完全なセキュリティは存在しない。いずれ遠い時の彼方、私達は魂だけの姿になって生きているやもしれん。ただ一つの、情報塊として」

(539)

ミギノウエ「@ゲン：そこが幸せな場所なのか、僕にはわかりませんね。出来ればそうなつて欲しくないと思えます。それは自由というより単体化。情報拡散の終局は人類の単体化ですよ、そんなのいいわけがない……いやでも、情報収束の終局もまた人類の単体化？」

(540)

ゲン「@ミギノウエ：まだ人間はそこまで極端な状況にはないよ。何のためにトイレがあると思っているのかね。一人で思索にふけるくらいの自由は、まだいくらかも残っている。なんなら部屋のTLを外すなり、いつそログオフするなり、好きにすればよい。人はいまだ試行錯誤の最中」

(541)

ミギノウエ「@ゲン：ログオフなんてとんでもない！ そんなことしたら慈善団体が心配して部屋に乗り込んできますよ！ 世の中おせっかいな人がいっぱいいて、ありがた迷惑なことですよ……まったく。私は部屋TLはつけてませんが、それだけでも色んな人から怪しまれるんですよ？」

(542)

ノルコ達はゲンとミギノウエのやりとりを眺めながら、首をひね

っていた。難しい話のようで、実はとても身近な話のようだ。リン「確かにー、部屋のＴＬってつけるのが当たり前になってるね」ルイ「つけないと逆に怪しまれるんだよな。あの部屋で何かコソコソ変なことしてるぞっ、て」

(543)

カズノリ「く、空気、ってやつ、だね」リン「そうそう、空気空気」世の中、空気というものは法律以上に生活を拘束している。ノルコ（だからトイレのツイッターは「禁止」ってことになってるのかな？）トイレにまでＴＬつける空気が流行ったら世界は終わりだなと、ノルコは根拠なく思う。

(544)

ゲン「@ミギノウエ：怪しまれるとて、それを選ぶのもその人の自由だと私は考えるがな。先ほども言ったが、情報の拡散は自然現象として不可逆であるし、相互監視化も後戻りできない所まで来ている。我々は状況に従ってこれからを考えていく他あるまい。本当の自由とは何か、考えていく他あるまい」

(545)

ミギノウエ「@ゲン：自然現象として不可逆ですか。その果てにある理想の社会は、一つの巨大な村みたいなものなのでしょうか。誰もがみな村の全てを知っているながら、空気を読んで見てみぬふりをする。そして少なくとも僕達は悩む自由を持っている。ちよつと考えて見ます。フォローしても？」

(546)

この後、ゲンの「勝手にするよろし」の一言で、二人のリプライ合戦は終わっている。ルイ「どういっいきさつでフォローしてんだか」カズノリ「さ、さんざん言い合って、ぎゃ、逆に仲良くなっ

たつて感じ、かな？」 ノルコ（そうれはどうか……そういえば、何のために集まってたんだっけ？）

（547）

リン「ところでね、あの単体化っていうのはなんのことなのかな？ あの辺のやりとりがよくわからくて」 カズノリ「う、うーん、じ、人類単体化、ってのは、え、SF小説とかで、よ、よくある、し、シチュエーション」 ルイ「みんな同じような人間になっちゃうってアレだろ？」

（548）

カズノリ「う、うーん、そうだな、た、例えるなら……」 その後、カズノリは『おばちゃん』と『引きこもり』を例に挙げて説明した。もし世の中が、空気の読み合いに長けたおばちゃんだらけになっても、逆に名無しの引きこもりだらけになっても、みんな同じようになるという意味で単体化してしまう、というようなことを。

（549）

ルイ「んで、結局どっちも嫌だねって結論？」 カズノリ「い、いやぁ……」 リン「ミギノウエさんは、プライバシーを守るための管理を誰かやったほうが良いって言って、ゲンさんはそれに反対して、ミギノウエさんはわからなくなってしまうって、悩む自由があるんだー、って結論じゃない？」

（550）

なぜか一同、ヤマオ君の方を向いた。ヤマオ君はしばしジッとリンを見つめた後、一度だけウンと首を縦に振った。ルイ「うー、よくわかんねー。んで、結局私らは何がしたかったんだっけ？」 カズノリ「ん？」 リン「あっ！」 ルイ&リン&カズノリ「あー！！」 そして一同、今度はノルコの方を向いた。

(551)

ノルコ(……そうだった) ミギノウエ氏をブロックすべきか否かという話だった。ノルコ(……どうしよう) リン「リンはー、別にブロックしなくていいと思うのー」 ルイ「ん、まあ、悪い人じゃなさそうだぜ？」 カズノリ「ちょ、ちょっと困った人かも、し、しれないけど」 というわけで結論は出たようだ。

(552)

その後ノルコ達は、WEBアプリで夕方までひとしきり遊び、それぞれの家へ帰ることに。ルイ「あ、カラスがいないでるぜ」リン「カラスがなくなから」カズノリ「か、帰ろうか」ヤマオ「……」ノルコはみんなを玄関前で見送り。ヨコ「ちょっとみんな、これ持って帰って食べてっ」

(553)

そういつてヨコは、リボンでラッピングされた袋をわたす。中身は手作りマドレーヌだ。一同「ありがとうございます！」ヨコ「また来てねー」みんなバイバイと手を振って、それぞれの家路につく……が。リン「私、ちょっと買い物してかえるね！」そしてどういうわけかヤマオとアイコンタクト。

(554)

ルイ「お、おおう。気をつけてな！」カズノリ「ま、また明日」そしてリンとヤマオは二人で別方向に歩いていつてしまった。ルイとカズノリはそれを見送ると、照れくさそうにモジモジし始めた。カズノリ「お、送るよ」ルイ「べべ、別に一人で帰れるってっ」カズノリ「で、でもそんなと、遠くないし……」

(555)

なんだかんだ言いつつ、二人は並んで歩き始めた。街は夕日に照らされていた。カズノリ「きよ、今日は、なんだか色々、べ、勉強になった、ね」ルイ「あ、ああ……そうだな」二人ともまったく逆の方を向きながらのぎこちない会話だ。ルイ「ノルコも大変だ

よ。つぶやけないってだけで、こんなに色々面倒になるんだな」

(556)

それでぶつとりと会話は途切れた。でもそれで構わなかった。なにせ保育園からの仲だ。いまさら会話の間に気にするような間柄でもない。二人はただ黙って家路を進む。茜色に染まった街角は、夕食の買出しをする人や仕事を終えて帰宅する人で賑わっている。野球道具を肩に担いだ、部活帰りの学生もいる。

(557)

二人は特に意味もなく、それぞれの耳たぶをクリックした。すぐさま視界に夥しい数のAR情報が空間投影される。道行く人の頭上に簡易プロフィールとTシャツが表示され、店先には広告用AR映像が流れ始め、監視装置の存在を表す光点がいたる所で光りだす。生まれた時から慣れ親しんだ、ごくありふれた光景だ。

(558)

カズノリ「と、特に危険は、な、ないみたい」 ルイ「まあ……街の中だしな」 市街地は相互監視網の密度が非常に高いので犯罪はめったに起こらない。カズノリはコンソールを操作して「不審者チェッカー」を表示させた。これは人々の移動経路を調べ、挙動不審な人をピックアップするサービスだが、よほど用心深い人しか使わない。

(559)

同じ所をウロウロしたり、不自然にゆっくり歩いたりするとチェッカーに引つかかる。誰かにくつついて歩いても引つかかる。それが赤の他人でも友達でも関係ない。そのため、今のルイにとって一番の不審者はカズノリという結論が出てしまっている。カズノリ「わ、わけがわからないっ」 ルイ「ほへ？」

(560)

とはいえ、カズノリはやはり男の子であり、好きな女の子のことを何としても守りたいと思うのは当然だった。ルイ「カズノリはホント心配性だなー」 カズノリ「そ、そんなことないよっ」 二人の馴れ初めは保育園時代までさかのぼる——ルイは今にもまして男らしく、そしてカズノリはさらに吃音がひどかった、あの頃に。

(561)

いじめっ子1「ちゃんとつぶやけっつーの！」 昔の話である。保育園のすみで本を読んでいたカズノリが、少年達にいじめられていた。バイオツイッターの形成に不具合のあったカズノリは、深刻な吃音障害を抱えていた。カズノリ「ほ、本……か、かか、かえ、え、えし、かえして！」 いじめっ子2「ちゃんとつぶやけたら返してやるよ」

(562)

ルイ「てめえらなにやってんだー！」 口と同時に手足が出る。腰の入った右ストレートと後ろ回し蹴り、一瞬のうちに二人を吹き飛ばした。ルイ「人の弱みにつけこむなんてサイテーだな！ その本返しやがれ！」 いじめっ子2「暴力だってサイテーだろこの男女！」 ルイ「なに！？ もういつぺんいつてみる！」

(563)

いじめっ子1「何度だって言うてやるよ男女！ ぜってー嫁の貰い手ねーぞお前」 いじめっ子2「そーだよこんにやろー！」 お返しとでも言わんばかりに、少年はルイの顔めがけて拳を振るってきた。ルイ「っ！ てめえら顔ねらいやがったな！」 いじめっ子1「いーだろ、おめー女じゃねーもん！」

(564)

いきなり勃発した肉弾戦に、周囲の子供らがざわつき始めた。「またルイちゃんがつてる……」「せ、先生呼ばなきゃ!」「喧嘩しちゃだめー!」いじめっ子1「女扱いしてほしかったらもつと女らしくすればいいんだ」いじめっ子2「そーだそーだ。またルイが人殴ったってリツイートしまくつてやる!」

(565)

ルイ「うぐっ……」普段から「もつと女の子らしくしなさい」と大人たちに言われているルイは、またカツとなつて思わず手を出してしまったことを後悔した。逆に弱みを握られるハメになったのだ。ルイ「……てめえらホントに腐つてやがる!」いじめっ子達はそのルイのつぶやきをすかさずリツイートした。

(566)

いじめっ子1「口の汚い女子はいやですなー」いじめっ子2「いやですのおー」ルイ「ぐぬぬ……」いじめっ子1「てめえらじゃなくて、あなた様方、つて言いなさい?」いじめっ子2「くくく、がはははっ」ルイ「間違つてる……お前ら絶対間違つてる!」

(567)

カズノリ「……る、るる、ルイち、ちゃん。も、ももも、もう、もうい、いい」ルイ「カズノリ?!」いじめっ子1「だーからちゃんとつぶやけての! うひゃひゃ! 笑い死ぬ!」カズノリ「き、ききき、きみの、の、ひひひょうばん、わ、悪く、な、ななちゃうよ」

(568)

ルイ「だけどさ!」カズノリ「い、いい、いいい、ん、だ」

そしてカズノリはルイと少年らの間に割って入った。いじめっ子1「なんだあ？」 いじめっ子2「やんのかこのもやし野郎」 カズノリは彼らに奪われた本を指差す。カズノリ「あ、あああ、げ、あげ、る、よ、そ、そそ、それ」

(569)

いじめっ子1「はあ？」 カズノリ「べ、べべ、べん、きよ、きよきようする、といい、いい、いいいい、よ、そ、そそれ、それで」 いじめっ子2「笑えない冗談ですなあー」 カズノリ「き、ききき、きみ、きみ、たち、は、あ、あ、あああ、あたあた、あま、あたま、がががわ、わ、わ、わるい！」

(570)

二人のいじめっ子は互いに顔を見合わせ、そして額に血管を浮かび上げながらカズノリをにらみつけてきた。いじめっ子1「なめた口きいてんじゃねーぞゴラァ！」 そして拳をボキボキ……鳴らないが、鳴らすふりだけした。いじめっ子2「歯あ食いしばれや！」 ルイ「か、カズ……！」 カズノリ「うぐっ！」

(571)

カズノリは右頬を思いつきり殴られた。いじめっ子2「どーだ、痛いだろう」 いじめっ子1「はやく謝らねーともう一発いくぞ？ あーん？」 カズノリ「うつ、うつ……くっ！」 カズノリは歯を食いしばって痛みをこらえ、そして殴られた反対側の頬、すなわち左の頬を少年らに向かって差し出した。

(572)

カズノリ「そ、そそ、そその、ほほほ、ほん、ほん、に、かかか、かいて、ああるよ」 カズノリが奪われた本、そのタイトルは「せかいのせいじんたち」だった。カズノリ「こ、ここ、こっち、こっ

ちの、ほほ、頬、ほおも、な、な、なぐ、なぐる、と、いいんだ……よ！」　その時、タイムラインが火を噴いた。

(573)

二人は本当にぶち切れて、カズノリに殴りかかってきたのだが、直前で動きを止めた。いじめっ子1「な、なんだこの感じ」　いじめっ子2「あ、頭が、頭があ！　わあああー！」　そして二人は頭を抱えてその場にしゃがみこんでしまった。ルイ「な、なんだ……」　カズノリ「こ、ここに、これ、は、は」

(574)

二人のＴＬに、ご近所の、いや日本中の説教好きな人たちからの説教リプライが押し寄せていた。バイオツイッターによるリプライは、その人の脳内回路に直接送信される。いっきにリプライが流れ込んだ影響で、脳がパニックを起こしたのだ。いじめっ子1＆2「頭が痛い！　痛いよー！　わあああー！」

(575)

すぐに先生たちがやってきて、炎上したＴＬの火消しにあたる。少年らのツイッターは自動的にログオフされたが、二人はしばらくその場に伸びていた。いじめっ子達への説教リプライは、彼らはおろか、彼らの両親、兄弟、親族にまで飛び火し、保育園の先生や、どういうわけかカズノリとルイのＴＬにまで送られて来た。

(576)

10分ほどでＴＬは鎮火した。後日、いじめっ子の二人は、知恵熱を出してしばらく休むことになった。その間うわごとのように「ごめんなさい」とか「もうしましえん」とかつぶやいていたらしい。その一件以来だった。ルイとカズノリの間、友情とはちょっと違った、仄かな感情が芽生え始めたのは――。

(577)

話は現在に戻る。ルイの家がある集合住宅が見えてきた。二人は暮れ行く夕日を眺めながら、とてもゆつくりと歩いていった。ルイ「なあ」 カズノリ「んっ？」 ルイ「いまどんなこと考えてた？」 そうルイの方から話を振ってきた。 カズノリ「ああ……む、昔のこと、とか」 ルイ「昔の？ いつのだ？」

(578)

カズノリ「ほ、保育園のとき、の……こと」 ルイ「ほあ？、そりやまたずいぶん昔の話だな」 カズノリ「ぼ、僕が、ま、まだ全然うまく、うまく呟けなかった、あのころ。よく、いじめられて、ルイに、助けられた」 ルイ「だなー、しょっちゅう喧嘩してたっけ。ま、今でもそうだけどさ」

(579)

カズノリ「む、昔頃から喧嘩っぱ、ばやかっただよ。ルイは」 ルイ「まーなー。アレでも精一杯抑えてたつもりだったんだけど、全然女として扱われてなかったなー。いや今でもだけどさっ」 そういつて自虐的に笑うルイだったが。 カズノリ「そ、そんなことないさー！」 ルイ「えっ……そ、そうか？」

(580)

カズノリ「る、ルイは……その、や、や、やや、優しい、い、じやないか、げっふげっふ！」 ルイ「お、おいつ、無理すんな……って、私は優しくなんかないぞっ」 カズノリ「そんなことない、ルイは、優しいよ、お、女の子らしいって」 ルイ「お、おま……うわわ、か、痒いじゃんか、そんな言われたら……どうしたんだよ」

(581)

カズノリ「だ、だだ、だつて。じ、じじ、自分のこと、女らしくない、とか、な、何度も言うんだもの。よ、よくないよ、自虐的に、なるのは」ルイ「そ、そうかな？」カズノリ「ルイは、お、女の子、らしいよ、大丈夫だよ」ルイ「だ、大丈夫とか！ なんか病気みてーじゃないか！ 逆にはら立つつてば！」

(582)

そうこうしているうちに、もうルイの家の前だ。5階建ての集合住宅、そのゲートの前で、なんとなく名残惜しそうな二人。ルイ「ついちゃったな……」って！ 別に深い意味はねーんだからなつ」カズノリ「う、うん、わかつてる」ルイ「わわわ、わかつちゃダメだろ！」カズノリ「ご、ごめん……」

(583)

ルイ「じゃ、じゃあな。また明日なつ。ちゃんとメシ食えよ？ じゃねーと筋肉つかねーぞ？」そう言つてルイはカズノリの肩をたたく。カズノリ「うん、ちゃんと食べるよ」ルイ「ちゃんと歯も磨けよ？ 黄ばむぞ？」カズノリ「うん、ちゃんと磨くよ」ルイ「お、おおつ、じゃあな！」カズノリ「うん、ま、また明日」

(584)

ルイを見送つて、少年はその場を後する。ルイとはずっとこんな調子だ。僕らはまだまだ子供なんだと少年は思う。でも僕達は友情とは違う何かでつながっていて、みんなも応援してくれている。カズノリ「うふふ」少年はそつと含み笑いをこぼした。ルイ「な、なに笑つてるんだぜ？」カズノリ「ううん、別になんでもないよ、ルイ」

(585)

そのころノルコは、自室でルイとカズノリのやり取りを眺めてニコニコしていた。早くもつと仲良くなつて、ノルコ達を結婚式に招待して、そして私に向かつてブーケを投げてくれたらいいのに……。そんなことまで妄想してしまうノルコ。もし二人を邪魔する人がいたら、じゃじゃ馬の如き後ろ回し蹴りで容赦なくお星様になつてもらう勢いだ。

(586)

ノルコ(……そうごかんし社会) 誰もが誰をも監視できる状況においては、空気こそが何よりも重要だ。世の中には、クラス内の男女が親しくすることを許さない空気というものもあるらしい。二人の名前が書かれた相合傘を電子黒板に描かれて、さんざん冷やかされる……とかなんとなか。ノルコ(そんなの絶対ゆるさない!)

(587)

空気はみんなで守らなければならないもの、という感覚がノルコの中にはある。しかし一方で、その空気のために思うようにならないこともある。例えばノルコは以前、従兄弟のお兄さんにほのかな想いを抱いたことがある。お兄さんは当時18歳で、ノルコは9歳だった。ノルコ(……かなわなない恋も、あるわ!)

(588)

そのお兄さんは、よくノルコをかまってくれた。しかし、ある一定の線を踏み越えてくることはけしてなかったし、こっちから踏み込もうとしてもそっけなくあしらわれた。ノルコにもその理由はわ

かっていた。そうだったことは一般常識的に認められない空気なのだ、ということくらいは。ノルコ（歳の差があと5歳少なければな……ちつ）

（589）

相互監視社会特有の問題というのは、やはりあるのだ。ノルコは先ほどのゲンとミギノウエのやりとりを思い起こす。……その気になれば、地球の裏側にいる人々の生活まで監視できてしまう。ノルコ（やってみよう……）そして耳たぶをクリックし、海外TLに飛んだ。ノルコはちつとドキドキしていた。

（590）

リオデジャネイロはちょうど朝日が昇ったところだった。それはついさつきノルコが見送った夕日である。ノルコ（……朝からラブラブな人達はさすがにいないか）と思いきやさすがはラテンの国明け方の公園のベンチで中むつまじくする若いカップルをノルコは発見した。

（591）

他にも、朝のカフェで二人静かにコーヒーを飲みながら本を読んでいるカップルも見つけた。ノルコはなんとコーヒーの銘柄と本の題名まで知ることが出来てしまった。店内にはゆったりとしたボサノバが流れており、その曲をピックアップして自分の部屋のBGMにすることも出来てしまった。

（592）

ノルコ（ちつと楽しいかも……ふひひ）下手すると時間を忘れて一日中検索してしまいそうだ。でもノルコには他にもっとやるべきことがある。今日の授業の復習をしないといけない。もうすぐ夕食の時間で、今日から単身赴任のお父さんとオンタイム会食があ

るので遅れるわけにはいかない。

(593)

何でも自由に調べられるといっても、調べられる時間には限りがある。検索できる情報が増えれば増えるほど、知ることの出来る情報は相対的に減っていく。そんなちよつとした無力感を誰もがぼんやり感じている。だからこそ一番大切な情報だけはけして見逃してはならない。情報の海に溺れないためにも。

(594)

ノルコはお父さんとお母さんの寝室のＴＬを調べた。今日からお母さんは一人で眠ることになる。寂しくないだろうか。ノルコ(…あつ) 最新ツイートは昨日の朝だった。昨夜二人は一言も会話することなく就寝したのだ。こんなことはノルコの知る限り一度もない。ログオフしていたわけでもない。

(595)

ログオフ…夜に夫婦が寝室でこの状態になるというのは、つまるところがそういうこと。この場合のログオフを追及するような行為は、常識的にありえないことで、ノルコだってそれくらい知っている。人は木の叉から生まれるわけではないし、ペリカンが運んでくるわけでもないのだから。

(596)

ログオフでもないのに、お父さんとお母さんが寝室で一言もツイートしないというのは、はっきり言って異常事態で、地球の裏側の恋人達の事情より、よっぽど重要度の高い検討課題である。ノルコ(……やっぱり喧嘩してるのかな) お母さんはホウさんと友達になると言ってるし、どうなることやら。

(597)

そのころ……。イイズカ「アフレルくん！ 2番バルブ閉めてー！」アフレル「は、はい！」ハッブル「ハリーアップ！ 破裂するゾー！」秘密基地の地下にある大規模試験場で、巨大な鉄の腕がガッコンガッコンと轟音をたてていた。アフレル「バルブ閉まりました！」全身オイルまみれだった。

(598)

アフレル（す、すごい……まさか初日からこんな仕事を任されるなんて）油圧駆動系試験のアシストとして雇用されたアフレルは、いきなり実動試験の現場に放り込まれた。ガンバールの腕、特に拳の部分は機構が複雑であり、試験はいくらやってもキリがないのだ。

(599)

ハッブル「hey、アフレル。いきなりきつかつちまって悪いネ」アフレル「いえいえ！ こんなすごいメカニズム……むしろ燃えってきましたよ！」イイズカ「いいねえ新入り。燃えすぎて火いつけねーよーにな！」昼からずっと試験にかかりつきりなアフレル。夕食の時間がすぎてしまっていることに……気づいていなかった。

(600)

ロボットアームは、ビルほどの大きさがある鉄骨製の支持体に取り付けられていて、油圧、電気系統、測定機器等々の夥しい配管・配線類とつながれている。アームの先の手が開いたり閉じたりするたびにアフレルが立っている支持体の足場が激しく振動する。アフレル（……うぶっ、揺れるし油くさいし大変……）

(601)

軽い吐き気をもよおしつつも、アフレルは試験場のメインTLに目を光らせ、測定装置のAR情報を常に確認してデータを拾い、さ

らに同時進行で装置の機構について学習していた。アフレル（いきなり実機に触れるなんてラッキーだ！） 視界を埋め尽くすほどのAR情報とタイムラインに、アフレルの頭脳はパンク寸前だった。

（602）

その時、計器の一つが異常な数値を示した。小指を制御する圧力配管3系統のうち一つが、異常な圧力上昇を示している。アフレル「いけない！ 小指3番下げてください！」 イイズカ「ダメだ、カットできない！ 故障か？！」 ハツブル「破裂スル！ テイク・カバー！」 次の瞬間、アームの小指付け根から黒いオイルが噴出した。

（603）

幸い、下にいた作業員は全員退避していたので人がはなかった。作動油は高温になっていて危険だ。ここで作業は一旦中止となり、後片付けが始まった。作業員総出で油の処理をする。ドラム缶にして10個分程度のオイルがこぼれた。全ての作業が終わるころには日付が変わっていた。

ツイトピア604〜635

(604)

アフレル「遅くなつてしまいましたね……僕がもつと早く気づいていれば」 イイズカ「いや、あれでいいんだ。半分は壊すのが目的の試験だからな」 アフレルは温泉で汗を流した後、他の職員とともに食堂に来ていた。食堂は24時間やっていて、ビュッフェ形式になっているようだ。

(605)

まずはライスと味噌スープをよそう。おかずは紅鮭とインゲン豆の煮物という純和風なチョイスにした。それに美味しそうなオムレツがあつたのでケチャップソースをかけてトレーに乗せた。アフレル(秘密基地というわりには、意外と普通だなあ……) するとイイズカがちよいちよいと肩をつついてきた。

(606)

イイズカ「ここに来たらやつぱりこれ食べないとな」 アフレル「……なんですかこれ？」 イイズカが指し示したのは緑色のグニヤグニヤした物体だった。よく見るとその中に、黄色いツブツブしたもののやら、半透明の細長いもののやらが入っている。見るからに怪しい食べ物だった。

(607)

イイズカ「まあ食ってみろつて」 ハツブル「だまされーたート、思つてネー」 アフレルはしぶしぶながらも、それを一さじずつてお皿のすみに乗せた。アフレル(……ぐによぐによしてる) そして食堂の片隅に何故か置いてある解析装置「MONOSUGOI」

にトレーを乗せ、料理の種類と量を記録した。

(608)

解析装置は料理中に含まれている有害物質の量も調べてくれる。アルデヒド、ダイオキシン、カドミウム、セシウム……。もちろん全て検出限界以下だが、それでもご丁寧に記録される。アフレル「なにか意味があるんですか？」 イイズカ「まあ……秘密基地だしな」 ハッブル「何がまざるかワカライ」

(609)

席につくとアフレルは、例の緑色のグニグニを箸でつついてみた。アフレル「……ホントに食べられるのかな」 イイズカ「ささ、食べた食べた」 ハッブル「体にいいYO！」 箸でつまんで鼻先までもつてくる。クンクン。なんだか病院の処置室みたいな匂いがする。なんともいえない薬臭だ。

(610)

アフレル「……もぐもぐ……ん？」 見た目はドロドロだが食感には不思議とサクサクしていた。たまに粒々が潰れてプチつとなる。半透明のこれは……クラゲか何かだろうか？ 味はすこし酸っぱくて磯の香があり、かつヨード臭もある。アフレル「なんだらう？ 魚介の漬物みたいなものですか？」

(611)

イイズカ「ふむ、俺も最初はそう思ったさ。でも実はこれ……地球の食材じゃないらんだ」 アフレル「えっ！」 イイズカ「……ここだけの話なんだが、この研究所の地下で、宇宙人を培養してるらしい……」 ハッブル「そうそう、宇宙人ね。エイリアン」 アフレルはみるみる青ざめた。

(612)

アフレル「そ、それとこれとどういう関係が……！」 イイズカ
「どうもこうも、宇宙人なんて公表できるわけがねえだろ？ でも
実験すれば残骸は出てしまうわけだ。それで手っ取り早い証拠隠滅
として……だな」 アフレル「じよ、冗談ですよな？」 イイズカ
「どうかな、だってここは秘密基地なんだから？」

(613)

アフレル「じゃ、じゃあこの料理はさしずめ、宇宙人漬け……」
ハッブル「そ、そ、宇宙人のピクルスという話だよ、ウヒヤヒヤ」
イイズカ「くくく……食べちまったねアフレル君。実はそのエイ
リアンの細胞はまだ生きていて、食べた者はみな宇宙人に体をのっ
とられててしまうんだ……」

(614)

アフレル「(ガタガタブルブル)……じゃ、じゃあイイズカさん
達はもう……う、ううっ！」 アフレルは突然自分の首を押さえて
苦しんだ。アフレル「ううあ……うガガツ……ゲボア！」と、
その時、ちょうど目の前をクサヨシ研究主任が通りがかった。なぜ
か割烹着姿だった。クサヨシ「……何してるんだい？ アフレル君」

(615)

アフレルは顔を真っ赤にしながら味噌スープをすすっていた。ク
サヨシ「はははっ、君も随分とノリの良いやつだなあ」 アフレル
「い、いやだって、そういう流れでしたし！」 イイズカ「まあ、
ここの洗礼みたいなものだ、悪く思わんでくれよ」 ハッブル「あ
そこまでノってくる人もメズラシイけどネー」

(616)

謎の緑色の正体は「松前漬け」だった。ただかなりアレンジさ

れている。クロレラ抽出物がたっぷり入っているため、毒々しいまでの緑色を呈しており。風味付けにアブサントを用いているため薬臭がする。クサヨシ「ガンバル基地特性の『エイリアン漬け』だ。バタートーストにのせてもうまいぞ」

(617)

割烹着姿のクサヨシ研究主任は、まかないのタコさんウィンナー茶漬けをサラサラとやっている。アフレル「あ、あの、調理師だったんですか？」 クサヨシ「最近はね」 イイズカ「ここは人事異動が激しいんだよ。主任、以前はリーダー室の担当でしたよね？」 いや激しいどころじゃないだろう、とアフレルは思った。

(618)

クサヨシ「料理とはいわば一種の科学だ。キッチンに立つことで得られる閃きもある」 アフレル「そうなんですか？」 ハッブル「チーフはニュータイプなリーダーのプロダクションがジャムってんだよアフレル」 アフレル「じゃ、ジャム？ ああ、煮詰まったってことですか」 クサヨシ「うむ」

(619)

クサヨシ「煮詰まった時はキッチンに立て。我が家の家訓だ」 本当かな？ とアフレルはいぶかしんだ。アフレル「新型のリーダーですか。僕は専門外なんでお役に立てそうにないですけど、どんなリーダーなんですか？」 クサヨシ「ふむ……一言でいえば、体重0キログラムの宇宙人を観測できるリーダーだ」

(620)

クサヨシ「もし君が地球侵略を目論むエイリアンだったとする。なんとかしてコッソリ地球に浸入したい。しかし、地球にはそれなりの文明があり、電波望遠鏡などで銀河系全域までをもリーダー観

測している状況だ。さて、どうする？」 アフレル「なんとかして観測網を潜り抜けないといけないわけですね。うーん……」

(621)

アフレル「あつ、それで体重が0というわけですか」 クサヨシ「そう、質量が0というのはつまり、光や電磁波などの光速エネルギー体のことだ。もし、宇宙人が純粋なエネルギーだけの姿で地球に侵入してきた場合、今の我々に発見する手立てはない」 アフレル「ま、まるでSF小説ですね……」

(622)

クサヨシ「ふふふ、我々は今、そのSF小説の真つ只中にいるのだぞ、アフレル君」 アフレル「確かに……。いやでも、そんなことが可能なんですか？」 クサヨシ「わからん。だからこうして毎日割烹着を着てキッチンに立っているわけだ」 アフレル「はあ……」 ハッブル「案外もう侵略されてたりネー」

(623)

イズカ「その可能性もあり、だな。今こうして話していることも、実はみんな筒抜けだったとか……」 一同、しばし辺りをキョロキョロとする。アフレル「……なんかゾッとしますね」 クサヨシ「我々はすでに監視されている……か。ま、それはそれで面白い」 ハッブル「おトモダチになれたらいいのにネー」

(624)

クサヨシ「ふふ、トモダチか。それがベストな状況ではあるな」 クサヨシは残りのお茶漬けをスルスルとかきこむと席を立った。クサヨシ「では失礼するよ」 そして鼻歌で「お化けなんてないさ」をハミングしつつ、軽いステップでどこかへ行ってしまった。イズカ「宇宙人とトモダチ……か」

(625)

その後三人は食事を取りながら、純エネルギー生命体を直接観測する方法をあれこれ話し合った。しかし、これといったアイデアは浮かばなかった。イズカ「そもそも物理的に可能かどうか……」

ハッブル「ライフディフィニションも考えないとネ」 アフレル「うーん、困難な課題ですねえ」

(626)

イズカ「そっぴやアフレル、遅くなっちゃったが家族には連絡したか？」 アフレル「……はっ」 アフレルの手から箸がこぼれ、カランカランと音を立てた。アフレル「あっー！」 ハッブル「どどしたノ？」 アフレル「しまった……今夜同じ時間に食事とろうって約束してんだ……」

(630)

イズカ&ハッブル「あちゃー」 アフレル「ちよつとすいません……」 そう言つてアフレルは、家族のTLを確認した。もちろん三人とももう寝ていた。次にダイニングのTLを確認する。夕食はいつもより遅めの時間にとったようだ。ワクのツイートが残されていた。ワク「ダッド・イズ・ノット・ヒアー？」

(631)

ヨコ「うん。お父さんは忙しいみたいなの。一日目だからきつと色々あるのね」 アフレルはハツとなった。そしてすぐさまDMを確認した。ヨコからのメッセージが残されていた。ヨコ《私達のことはいいいから、お仕事がんばってね。終わったらでいいから連絡してね》 アフレルは深くため息をついた。

(632)

イズカ「……どうなんだ？」 アフレル「いえ、大丈夫です……取り乱してすみません」 ハッブル「カーゾークはダイジーにしないとネー」 アフレル「ええ、まったく。でも仕事も大事ですから……」 イイズカ「まあ、あんまり無理はするな。今日はもう休んだ方がいいだろう。いつデカイ仕事が入るかわからんからな」

(633)

アフレルはそそくさと食事をすませると、割り当てられた自室へと向かった。巻貝のような形の研究基地、その地下3〜6階が単身者の居住施設になっており、海から見た反対側に扇状に広がっている。高速の動く歩道が完備されており、全員が10分以内で職場を行き来できる設計になっている。

(634)

宇宙船の船内を思わせるインテリア。アフレルはエアハッチのような自室の扉に手をあてる。すぐに生体認証され、プシューというエアシリンダーの音とともに扉が開いた。初めてこの部屋に案内されたときは、その凝った作りに思わず小躍りしてしまったアフレルだが、今はガツクリと肩を落としていた。

(635)

4畳ほどのスペースにデスク、ベッド、冷蔵庫、映像端末、シャワーといった、最低限の設備が配置されている。アフレル「少し寒いな」 アフレルは耳たぶクリックでエアコンを作動させ、ベッドに腰掛けて考え込んだ。アフレル(……ヨコになんて謝ろう) 秘密基地への単身赴任。初日の夜はこうして更けていった。

ツイトピア636〜664

(636)

ヨコ「ふんふん、ふんふん」ヨコは朝からとても機嫌が良かった。軽やかなステップでキッチンを動き回り、3人分の朝食を作っている。ヨコ「あらいけない」コーヒーメーカーの設定が、いつと同じ二人分になっていた。ヨコ「こんなに飲めないけど、まあいいわ」特に気にせず料理を続ける。

(637)

ヨコ「ノルコ、起きてたらワクを起こしてちょうだい」もちろん返事はないのだが、二階からドタドタと足音が聞こえてきて、それがリプライみたいなものだった。ワク「ムニヤムニヤ……アウチッ！ ウーオ！」ボディプレスとバックドロップを立て続けにくらったようなツイトを聞きつつ、ヨコはサンドウィッチを切る。

(638)

今日の朝食はサンドウィッチ、トマトオムレツ、シーザーサラダ。そしてヨコ特製の野菜ジュースだった。ノルコ（朝からやけに豪華だなあ）ヨコ「お父さんがいなくて寂しい分、頑張っちゃったのよ？」ワク「イテテ……hum？ Oh！」眠気まなこにむちうち気味のワクも一気に目が覚めたようだ。

(639)

ノルコはトマトオムレツを品定めするような目つきで眺めつつ、そろりとナイフを入れた。ノルコ（……か、完璧だ）しっかりと煮詰められたトマトソースが、一分のムラもなく卵につつまれてい

た。こんな手間も技術もかかる料理を朝から……。ノルコは何となく嫌な予感がした。オムレツは美味しく頂いたけど。

(640)

ワク「グッド・モーニン・ダッド、ホワッツ・ドゥーイング？」

ワクが何気なく送ったモーニングコール。ノルコは父の反応に注視した。アフレル「お、ワク、おはよう。今からシャワー浴びるとこだぞー」ワク「Oh! ショウ・ミー・プリーズ!」ワクは研究基地の部屋が気になるようだ。

(641)

ヨコ「ワク? お父さんのシャワーなんか見てどうするの?」

ワク「Wrong!」アフレル「ははは、ワクは基地の中が気になるんだろう? でもシャワーは普通のだぞ?」それでも見たいというので、アフレルは一通り部屋の中を見せてあげた。部屋はまるで宇宙船の中みたいで、ワクはよだれをたらしてしまった。

(642)

ヨコ「ワク、きたいわよ。ところであなた、なんだかひどい顔よ? ちゃんと眠ったの?」アフレル「いやあ、色々調べてたらね

……少しは寝たよ」ヨコ「大変なのねえ……」アフレル「あ、

き、昨日はごめん。夕食すっぱかしちゃって」ヨコ「いいのよ。

子供達の夢のためにも頑張ってね、あなた」

(643)

アフレル「う、うん、ありがとう……」ヨコはとても機嫌がよ

さそうに見えたが、それが返ってアフレルを不安にさせた。まるで自分がいなくなってせいせいしているかのような印象を受けたのだ。ヨコ「昨日は何を食べたの?」アフレル「……ん、社食で普通に食べたよ。ちょっと変わったおかずもあったけど」

(6 4 4)

そうツイートしつつ、アフレルはノルコ達の食卓Tしをチラツと確認した。アフレル(何を食べてるのかな……え!?) とても豪勢な朝食だった。こんなの朝ごはんを見るのは新婚の時以来かもしれない。アフレル「……こ、こんど帰る時、お土産に持っていくよ。エイリアンの漬物なんだけど」 ワク「エイリアン!？」

(6 4 5)

朝なのでそんなにゆっくり話していらなかったが、アフレルの新しい職場での話は、ノルコ達にとって刺激的なものだった。アフレルがシャワーに入ってしまったてからも、ワクはしばらく興奮状態にあった。ヨコ「職場の人とも仲良くやってるみたいで良かったわね、お父さん」 ノルコとワクはうんと頷いた。

(6 4 6)

ノルコ(……でもお父さん、すごく疲れた顔してた) それに、お母さんの表情を気にしている様子だった。ノルコ(……色々気にしてるんだろな) しかし、それよりさらに気になるのが、お母さんの異常なまでの機嫌の良さだ、まるで……これから好きな人に会いに行くみたいだ……。ノルコ(どうなっちゃうんだろ?)

(6 4 7)

ノルコとワクが、ランドセルをゆらしながら歩いていく。それを見送ったヨコは、ルンルンとステップを踏みながら、寝室のクローゼットへと向かっていった。ヨコ「……どれにしようかしら」まるで初恋を知ったばかりの女学生のように、ヨコは次々と衣服を身にあてがっては、鏡の前でクルクルと回る。

(6 4 8)

ヨコが青年ホウとデートの約束をしたのはつい先日、ツイッター互助会のチカコさんに事情を聞いたときのことだ。ホウがツイート能力を失った経緯を聞いたヨコは、その胸にしめつけられるような切なさを感じた。ホウ（あの人のこと、可哀想なんて思っちゃいけない……でも放っておけない！）

（649）

いきなりガンモドキを持って現れて、不可思議な言葉とともにナンプアってきてホウのことを、はじめは不審に思ったヨコだったが、フタをあけて見ればあら不思議。両親のネグレクトにより耳とツイート能力を失いつつもその傷を乗り越え、ツイッター互助会で世のため人のために尽力する好青年だったのだ。

（650）

ヨコ「是非とも一度お会いしたいですわ」それが開口一番、ヨコの口から出たツイートだった。ツイート能力を失っているホウと話すには、直接会うしかない。言づてをチカコさんをお願いして、ホウと連絡を取ってもらった。チカコさんの話によると、ホウは喜びのあまりその場で回転ジャンプをして気絶したという。

（651）

ヨコ（……こんな年増の主婦とのデートを、ジャンプして気絶するほど喜んでくれるなんて！）しかも回転よ回転、どんな状況だったのかしら？ そんなことを考えつつも、お化粧に余念のないヨコだった。衣服は水玉のワンピースにグレーのジャケット。バッグは花柄のトートバッグを選んだ。

（652）

水玉模様はヨコの勝負カラーである。ヨコ（水の色は私の色……）半端な気持ちで会うわけではない、という自分自身へのメッセー

ジでもある。しかし、あくまでも良い友達になることが目的なので、華美な色使いは極力さけ、バッグの花柄のワンポイントに限った。ヨコ（こんなものかしら？）

（653）

身支度を整えたヨコは、玄関の中でそわそわしながら時間が来るのを待った。ホウが車を手配してくれることになっている。ヨコ（そわそわ……そわそわ……）その時、外からクラクションが鳴った。ヨコ（ドキーン！）玄関を出るとそこには、とりわけ目立ちはないが、高級そうな白いセダン車が来ていた。

（654）

ヨコはサツと車に乗り込んだ。中は無人でドアが閉じられると自動で発進した。内装はとても豪華な作りになっている。助手席の部分は給仕スペースの付いたテーブルになっていて、クーラーにはお茶と白ワインが用意してあるようだ。クリーム色の本皮シートにゆったり腰掛けると、ヨコはそれだけでお姫様になったような気分になった。

（655）

隣の座席にバラの花束が置いてあり、手紙が挟まれていた。ヨコは花の香をそつと嗅ぎ、手紙を開いて読み始めた。【我が敬愛のミセス・イズミ様——】あくまでも年上の、敬うべき相手としてヨコは会食に招待されたようだ。手紙には、ヨコとデートできることがいかに嬉しいかが綴られており、独特のユーモアの中にも進るような情熱が伺えた。

（656）

会食の場所は、成田空港の近くにあるホテルレストラン。飛行機の離着陸を間近に見ながら食事をしようというわけだ。距離的には

呟音市から車で30分といったところ。道中、車窓に流れる景色を眺めつつ、先ほど読んだ手紙とバラを胸に抱いて、ヨコはうつとりとした面持ちだった。

(657)

ヨコ(こんなにも誰かに心を尽くされたのはいつ以来かしら……)そう自身に問いかけねばならないような気持ちだった。もちろん今でもその気になれば、そういった相手を得ることは難しくない。けれども今の家庭を持つ身。いくつもの幸せを同時に求めることは許されない。そう思い、ヨコはふうと一つため息をついた。

(658)

やがてキーンという飛行機のエンジン音が響いてきた。現在では殆ど使われなくなった液体燃料式のジャンボジェットだ。国際線の一部でのみ運用されている。そのジャンボジェットの数倍はあるのかという、巨大な太陽光飛空艇が、今ゆつくりと飛翔を始めているところだった。化石燃料が使えなくなったことで、空の事情は大きく変化した。

(659)

ヨコはその飛空艇を見て新婚旅行のことを思い起こした。空飛ぶホテルと呼ばれるエンタープライズ号に乗って、アフレルとヨコは二週間かけて地球を一周したのだ。しかしその間、アフレルはヨコに謝りっぱなしだった。アフレル「ごめんヨコ、せめて雨漏りだけはしないように頑張るから!」

(660)

いったい何がおこったのか? 世界トップクラスの豪華客船であるエンタープライズ号、その客室を予約することは非常に困難だ。以前ならお金さえ用意できればなんとかあったのだが、今はお金の

介在しない世界。客室のチケットを得るには、飛空艇の所有者さんを説得しなければならないのだ。

(661)

エンタープライズ号の所有者さんは非常に大雑把な方で、客室から溢れた人でも通路やらホールやらに泊めてあげることあった。アフレルはそんな船長さんの計らいで、二人は飛空艇の最上部にある空中庭園に泊めていただけることになったのだが……。アフレル「まさか天井がないなんて思わなかったんだよ！」

(662)

台風の近くを飛行すると聞いて、アフレルは必死になってテントを持っている人を探し、何とか借りて空中庭園に張った。そして雨がビュウビュウ吹く夜を、ヨコとともに過ごしたのだ。飛ばされそうになったり、雨がしみてきたり、高山病みたいになったり、それは大変なことだった。ヨコ(……一生忘れないわね)

(663)

もつとも今となつては笑い話。(所有者さんが一番笑っていたようだ) それに良い思い出がなかったわけでもない。アンデス山脈のウユニ塩原で見た星空は、それは素晴らしいものだった。もう一度あの星を見られるのなら、もう一度高山病にかかったって良いと思えるくらいには――

(664)

そんな追想に浸っているうちに、待ち合わせのホテルに到着した。ヨコはジャケットの襟を正して気合を入れた。ヨコ(しっかりとてなされない!) 車のドアが開く。ドアマンが指し示す道には赤いカーペット。そしてその向こうに、フォーマルな装いを定みなく整えた青年の、少し赤らんだ笑顔が待っていた。

(665)

そのころアフレルは、仕事を午前中で切り上げて、呟音市へ向かう電車の中にいた。アフレル(……やっぱり一度帰らないとダメだ) ヨコの態度がどう考えてもおかしい、そのことがずっと頭からはなれなかったのだ。アフレル(僕は一度、ヨコに怒られる必要があるんだ……きつと)

(666)

アフレルはこう考えていた——ヨコは僕の単身赴任のことを良く思っていないくて、本当は言いたいことが沢山あるのだけど、ノルコやワクのいる前での口喧嘩はしたくない、だからずっとニコニコ笑って我慢しているんだ——と。アフレル(……腹をわって話し合わなきゃいけない。それも、ちゃんと直接会って)

(667)

アフレルの手にはエイリアン漬けが入った紙袋が握られている。子供達が学校から帰ってくる前に話を済ませて、そして何も気兼ねすることなく、みんなで夕食を楽しもう。お土産話もいっぱいしよう。アフレル(就職して二日目で休暇とっちゃったけど……でも家族の方が大切だ) 複雑な思いを乗せて、電車はカタコトと進んでいく。

(668)

夫が家に戻って来ることなど思いもしないヨコは、優雅な昼食の真っ最中だった。程よく火の通った石鯛のムニエルに舌鼓を打っていた。ヨコ「すごく美味しいわ。こんな素敵なお店、どうやったら

予約できるのかしら？」　ホウ「直に会って交渉したんですよ。僕の場合、ツイッターが使えませんかね」

(669)

ホウ「不便ではないかと良く言われますが、こういう時は別ですよ。やっぱり、本当に熱意を伝えたいと思えば、直接会って話すのが一番ですからね」　ヨコ「まったくその通りだと思うわ。私達はこの体の中のツイッターに頼りすぎているのかもしれない」　ホウ「生まれつき備わったものですからね」

(670)

ホウの年齢は19歳と聞いている。ヨコは実際に会ってみて、想像した以上に大人びた青年だと思った。老成していると言って良いくらいだ。ヨコ(いたい、どんな人生を送ってきたのかしら……)　話題もツイッターのことになっている。ヨコは、今こそ彼の過去について尋ねる時だと感じた。

(671)

ヨコ「ホウさんも、元々はツイッターを使えたんでしょう？　なんとか元に戻すことは出来ないのかしら……」　ホウ「難しいですね。アンインストールが使われましたから。僕の中にはまだ、アンインストールの分子が生きていて、リインストールしようとすると拒絶反応が起こるんですよ」　ヨコ「まあ……」

(672)

ホウ「でもいいんです。僕はツイッターは失ったけど、その代わり、こうして貴女に出会うことができました」　突然の告白に顔を赤らめつつもヨコは。ヨコ「前向きなんですな……」　と言葉を返した。　ホウ「はい、このとおり髪がボサボサで、後ろが良く見えないものですから」　ヨコはそのユーモアにくすくすと笑みをこぼ

す。

(673)

ヨコ「私、ホウさんのユーモア好きですよ。なんというか、ツイッターで育った人にはないセンスがあるように思うわ」　ホウ「本当ですか?!　そう言ってもらえると凄く嬉しい」　ヨコ「でもきつと、色んな苦勞があつたんでしょね」　ホウ「ええ、それはもう!　でも今の一言で吹き飛びましたよ」

(674)

ヨコ「でもきつと、そのセンスの影には色んな苦勞があつたのでしょね……。もしよければ話していただけません?　少しでも貴方の心の荷を背負つてあげられればと思うから」　そう言つてヨコは、真摯なまなざしでホウを見つめた。ホウはその視線に、座つたまま昇天しそふになつた。ホウ「ああ……今日は僕の人生最良の日だ……」

(675)

ホウは、幼少時に耳を切り落とされた時のことを話した。ヨコはシヨツクのあまり、食事の手が止まつてしまつた。ホウ「しかし正直なところ、僕の中には悲しみも怒りもなかつたんです。なんというか、まるでそれが当たり前前の出来事だと思えた。きつとこの運命は、僕自身が選んだものなんだつて」

(676)

ホウ「その後、互助会に拾われた僕は何年間も外に出ませんでしたが。でもそれは塞ぎこんでいたからじゃない。僕には心を静かにして考える時間が必要だつたんです。それも、とても長い時間が」　ヨコ「まあ……私には想像すら難しい状況だわ。私だつたら三日と待たずに気がおかしくなつてしまひそう」

(677)

ホウ「もしそんな状況に貴方が陥ることがあれば、僕はいつでもお出汁とガンモドキを持って飛んでいきますよ」 そのジョークにヨコは思わず吹き出してしまった。なんだか一瞬で張り詰めていた気持ちさがほぐれたようだった。ヨコ「本当に、どうしてガンモドキが必要だつてわかったんです？ あの時」

(678)

ホウ「僕には未来が見えるんです、と言ったら信じてくれますか？」 ヨコ「ええ、もちろん。なんだか貴方の言うことなら何でも信じちゃいそうな気分よ」 ヨコはホウの不思議な能力についてもチカコさんから話を聞いていた。ヨコ「だって、こんなに上手にエスコートされたことなんて、今までなかったくらいなんですもの」

(679)

ホウ「氣に入って頂けて嬉しいです。でも、そんなにですか？」 ヨコ「ええ、まるで私のことも世の中のことも、何もかも知り尽くしているような感じですもの。貴方くらいの若さで、これだけのことが出来る人なんて、そうはいないわ」 ホウ「ああ………そんなに貴方に褒められたら、僕は………僕は………」

(680)

ホウ「ビヴァーチェー！！ クルミナーレ！！ エウフォリカメンテー！！」 ホウは爆発したように立ち上がり、フロアをクルクル回りながら窓に向かって歩いていった。ヨコ「えっ、えっ？！」 なんだなんだとざわめくフロアで、ヨコはただオロオロする。ホウ「今日は本当に良い天気だー！ イヤアアアホオオウー！！」

(681)

ヨコはなんとかホウに付いて行って、席に連れ戻した。そして水を飲ませたりおしぼりを首にあてたりして、血の上りきった頭をなんとか冷やした。フロアが落ち着きを取り戻したころ、ホウは我に返った。ホウ「ああミセス、僕はとんだ失態を……」　ヨコ「ううん、いいのよつ。私が褒めすぎたのがいけなかったの！」

(682)

料理はデザートに変わっていた。ジェラートの三種盛りだ。冷たくて甘酸っぱい一口が、二人のテンションを良い感じに冷ましてくれた。ヨコ「なんの話をしていたんだっけ……ああ、そうだわ、ガンモドキの話だったわね」　ホウ「はい……あれは、その、なんとというか、なんとなくわかるんですよ」

(683)

ヨコ「何となく私がガンモドキを買い忘れることがわかったんです？」　ホウ「そうなんです、そうしたら居ても立ってもいられなくなってしまうって……」　ヨコ「不思議だわ！　世の中にはまだ科学で説明できないことが沢山あるのね」　ホウ「ええ今はまだ。でも、この僕の実力はまもなく解明されるでしょう」

(684)

ヨコ「まあ、それも何となくわかるんですね！　一体どこまでわかっておられるのかしら」　古来より、高名な占術家は非常にもてることが知られている。未来を見る目を持つものに、人は本能的に魅かれてしまうようだ。今のヨコも、ちょうどそんな状態だった。ヨコ「私、ホウさんのこともっと知りたいわ……」

(685)

その言葉にホウの顔は再び赤くなった。ヨコはしまったと思った。ヨコ「わ、私ったらなんてことを……き、気にしないでくださいね

？」 ホウ「は、はい……。ゲフン……。どこまでわかっているのかというと、僕自身にもよくわかりませんね……。宇宙の終わりでわかってる気もするし、一瞬先のこともわからない気もする」

(686)

ホウ「思うに、未来が見えるのはきつと僕だけじゃないんですよ。誰もが誰も、未来を見つめる目をもっている。誰かが誰かの未来を発見して、その未来を変えようとしてしまったら、きつと僕が見ていたはずの未来も変わってしまう。そうして少しずつ未来も変化していくんです」 ヨコ「……深いお話ですわ」

(687)

その時ちょうど、飛行機が一機飛び立った。ホウ「例えばあの飛行機、行き先は誰でも調べられます。つまり未来がある程度はわかっているといえる。でも誰かがあの飛行機の行き先を変えてしまうかもしれない。その時に、見えていたはずの未来は少し違ったものに変わってしまうでしょう」

(688)

ホウ「僕はたぶん、人より少しだけ未来がよく見えるだけに過ぎないんです。おそらく、ツイッターを失っていることが、その原因の一つでしょう。僕にはツイッターを持っている人たちの行動が、自分とは関連性を持たない一塊のようして見える。そのことが、僕に未来を予見させるんです。きつと」

(689)

ヨコ「なんだか、ホウさんが前向きな理由がわかった気がするわ。貴方は自分がどんなものを持って生まれてきたかを、ちゃんと理解しているのね。大人でもなかなか出来ないことなのに」 ホウ「ええ。きつと人は何かを失った分、何かをちゃんともらっている。で

もそれに気づくには、人それぞれ時間がかかるんですよ……」

(6 9 0)

その後も二人は楽しく食事を続け、食後の紅茶まで飲み終えた。

ヨコ「ごちそうさま、とても美味しかったわ！」　ホウ「喜んでもらえて何よりです。ところで、このあとちよつと行ってみたい場所があるんですが……」　ヨコ「あら、どちらでしょう？　あまり遅くならなければ……」　ホウ「大丈夫ですよ、帰り道の途中ですから」

(691)

そのころ……。アフレルは眩音駅に着いたところだった。アフレル(ヨコ、今なにしてるかな……。) アフレルは自分のTシャツを開いて確認する。アフレル(ん……。成田？ 友達とでも出かけてるのかな？) まだしばらく帰ってこないようなので、アフレルは駅前で暇をつぶすことにした。

(692)

アフレルは書店に寄った。書店とはいっても、本そのものはもうどこにも置いていない。本のタイトルが書かれたARコードが、ジヤナルや出版社ごとに整理され、陳列されている。いまや書店は本を得るための場所ではなく、今の自分にはどんな書物が必要かということについて、じっくり考える場所になっていた。

(693)

アフレルはセルフサービスのエスプレッソをいただき、甘口のマキアートにアレンジして休憩所へ持って行った。書店の中央に設置された休憩所は、腰を据えて本探しが出来るよう、一人がけのソファが並べられている。アフレル「……。ふーむ」 アフレルは店内に流れるジャズを聴きながら、女心に関する書物を検索した。

(694)

ヨコ(この車を予約するのだったって大変だったはず……。) 帰りの車はワゴンタイプの迎賓車だった。後部座席が向かい合って座れるようにセッティングされている。目的地に向かう間、ヨコは家族のことについて話した。ヨコ「それでね、ノルコがのぼせてたのを勘

違いして、病気が悪化したのかと思っちゃったの」　ホウ「ほうほう」

(695)

話題の中心は、やはり失眩症になってしまったノルコのことになった。ホウはそのことを知っていたが、いま初めて聞いたように振舞った。ノルコとの間に面識があることは、彼女のために伏せておく必要があったのだ。ホウ「それで、その後どうしたんです？」

ヨコ「娘はいまPCをもつてましてね」　ホウ「ふむふむ」

(696)

ヨコ「それで何とか会話ができるんですよ。でなかったら私、無理やり娘を病院に連れて行くところでしたわ」　ホウ「ふうむ……呟けないというのも、なかなか大変なものですね」　ヨコ「本当にね。そうだ、ホウさんなら何かわかりませんか？　娘の病気がいつ治るかとか、そういったこと」

(697)

ホウ「現時点での予測でしたら申し上げられますが……しかし、あくまでも現時点です、先ほど申しましたように、未来はちよくちよく変化する」　ヨコ「それでもかわないわ。ちょっとでもわかることがあれば教えてもらいたい。もう、この頃は娘のことばかりが気がかりで」　ホウ「では僭越ながら……」

(698)

ホウはすこし考え込んでから言った。ホウ「ふむ……娘さんは3日以内にはツイートを取り戻すようです」　ヨコ「え？　そんなにすぐ？」　ホウ「はい」　何事もなければ——とは、ホウは付け足さなかった。実を言えばノルコのツイッター、もう治っているのである。ただそのことにノルコが気づいていないだけなのだ。

(699)

ヨコ「3日以内ってことは、今日にでも治る可能性があるってことね？」　ホウ「ええ、いつ咳いてもおかしくない状態のようです」
ヨコ「まあ……　ホウさんにそう言ってもらえて何だか安心したわ」
ホウはニツコリ笑ってそれに答えた。しかし、心の奥では厳しい表情をしていた。

(700)

今、ホウに見えているノルコの未来は、とても危うげなものだった。まるで見えない数多の蔓草に、ノルコの身が捕われてしまっているようなのだ。そしてその蔓草の動きは、ホウの予見眼をもつてしても予想不能だった。ホウ（あれがノルコ君の咳きを封じようとしているのか、それとも……。一体何をしようというのか……）

(701)

ヨコ「ホウさん」　ホウ「ううむ……」　ヨコ「ホウさん？」
ホウ「え、あ、はい」　ヨコ「着いたみたいですよ？　ここ、遊園地ですよ」　ホウ「ああつ、すみません。なんだかボーっとしていました」　ヨコ「あら、具合でも良くないの？」　ホウ「いえいえ、きつと貴方が目の前に居るからですよ」　ヨコ「まあ、ホウさんったら」

(702)

そこは呟音市の近郊にあるちょっとした遊園地だった。噴水広場にメリーゴーラウンド、野外ステージと、何軒かの露店。10分もあれば見て回れるような、こじんまりとした場所だ。ホウの目的はメリーゴーラウンドだった。ホウ「昔からの夢だったんです。……好きな人と一緒に、メリーゴーラウンドに乗ることが」

(703)

ヨコはハツと息を飲み、手で胸元を押さえた。ヨコ(きつとお馬の上で抱きしめられるんだわ!)　ホウ「一緒に、乗っていただけませんかしょうか。ヨコさん」　ヨコは真摯な眼差しでホウを見つめつつも、揺れ動く気持ちに翻弄されていた。ヨコ(……ダメよヨコ、私にはあの人、夫が、家族が……)

(704)

そしてヨコは意を決し、恐る恐るホウと向き合った。ヨコ「私が馬車で、貴方がお馬さん。それでも……良いです？」　それは否定の言葉だった。貴方とは恋仲になれない。でも、親しい間柄でいたい。そんな我儘を、ヨコはあえて押し通した。ホウはその答えがわかっていたかのように答えた。ホウ「もちろん、よろこんで！」

(705)

そして二人はメリーゴーラウンドに乗った。騎士のように白馬にまたがるホウ。お姫様のように馬車に揺られるヨコ。二人の間の距離は2メートルばかり。きらびやかなメロディーにかき消されるから、二人の声は通らない。(ツイッターが使えれば、問題なく話せるはずなのに……)　二人ともそう思わずにはいられない。

(706)

二人の時はゆっくり流れた。二人が恋に関するあれこれにを思い尽くすに十分な時間をかけて、メリーゴーラウンドはめぐり巡った。精一杯胸を張って白馬を駆る青年を、馬車の中で物憂げな表情を浮かべる美しき淑女を、何人かの幼い子供が指をくわえて見送った。そしてメロディーの終わりとともに、二人の夢は覚めるのだった。

(707)

ホウは白馬から降りて馬車へと向かい、ヨコの手をとり広場に下

りた。ヨコ「すごく楽しかった。これに乗るのは本当に久しぶりの」しかしその言葉には“でも昔はよく乗ったの”というニュアンスがこもってしまった。ホウ「ええ……僕は初めてでした」ヨコはただうつむいて、車へと歩いていった。

(708)

帰りの車の中はとても静かだった。プロポーズをするために招待し、されるために招待された二人。その目的が達成され、その結果が決まってしまった今となつては、どんな言葉も白々しく響くだけ。二人ともそれを承知していた。ヨコ(まだ私の倍は若いこの人が、どうして私のことなんか……)　ヨコはため息を抑えるので精一杯だった。

(709)

まもなく車はイズミ家に到着した。二人とも車を降りて、玄関の前で向き合った。あとは笑顔で再会の約束をするだけだ。ホウ「今日は忙しい中、本当にありがとうございました」ヨコ「こちらこそ。とても素敵な一時を過ごさせてもらいました」ホウ「こんなものでよければ、またいつでも招待……いたします」

(710)

ヨコ「うん。あ、そうだ。今度はうちに遊びに来ませんか？　チカコさんも一緒に。旦那が単身赴任なものだから、昼間はちよつと寂しいの」ホウ「……はい、是非、伺わせてもらい……」そこでホウはこらえ切れなくなってしまった。空を見上げて涙を流してしまった。ホウ「ああ……神さま……」

(711)

ヨコ「ホウさん……」　ホウはこう思っていた。自分はこの先、人として異性と結ばれることはないだろう。なぜならば僕の場合は、

GPTLを覗いてしまったことで、神のTLに触れてしまったことで、社会的生物としての階梯を飛び越えてしまったのだから。ホウ「僕はもう、誰からも愛されないんだ……」

(712)

ヨコ「そんなことないわ！」　そう言ってヨコはホウの腕を掴んだ。ヨコ「しっかりなさって！　貴方はすごく素敵な人よ！　もうはつきり言っちゃうけど、わたし、これまで付き合ってきた男は数え切れないくらいだけれど、その中でも貴方はダントツよ！　だからきつと間違いないわ、自信を持って！」　ホウ「よ、ヨコさん……」

(713)

そういう次元の問題ではないんだけど……そう思いつつもホウは、あまりになりふり構わないヨコの姿に、どことなく心温まるものを感じた。ヨコ「他にもっと若くて素敵な女の子が、貴方に声を掛けてもらえる日を待ってます。だから私なんかのために絶望しちゃダメ」　ホウ「……はい」

(714)

ヨコ「うーん、まだ納得していない様子なのね……。じゃあ、こうしてあげる」　ホウ「えっ！」　そしてヨコはそっとホウの体を抱きしめた。包み込むように優しく。ヨコ「一回限りの大サービスよ。私は貴方の二倍も年上で、夫も子供もいて……わかるでしょ？　これ以上は……」　ホウ「……ヨコさん」

(715)

ホウはただ素直に、ヨコの善意に身をあずけていた。しかし彼女が自分の“二倍年上”とは感じていなかった。ホウには全てが自明のことのように思えていた。彼女が自分を振ることも、こうして慰

めてくれることも知っていた。自分はもう、普通の人間が何度生まれ変わっても達することのないような境地に、すでに在るのだ……。

(716)

ホウ(……僕はもう、誰からも愛されないかもしれない。でも、僕が誰かを愛することは出来るんだ)　ヨコが抱擁を解くころには、ホウの涙は乾いていた。二人はもう一度、互いの姿を見つめなおす。ヨコ「こんなところ、もし家族にみられてたら大変ね」　ホウ「ええまったく、すみませんでした……はははっ」

(717)

ホウが笑ったことで安心したヨコは、バイバイと少女のように手を振ってから、家に入って行った。ホウはその姿を爽やかな顔で見送る。そして達観したように空を見上げてから、車に乗り込んでその場を後にした。しかし——自分は全てを知っていると思い込んでいた彼の眼に——道端で呆然と立ちすくむアフレルの姿は映らなかった。

ツイッター718〜737

(718)

ノルコ(……大事件だわ!) 帰りのHRの時だった。ノルコはその場に棒立ちになり、カタカタと震えていた。一体何がおきたのか? レイタ「すつげー! ノルコすつげー!」 先生「やったわね! ノルコちゃん!」 リン「こんなことが呟音小で起るなんて!」 カズノリ「よ、世の中、わ、わからないね!」

(719)

突然だが、ノルコは『国会議員』に選出された。公衆洗面所におけるツイッター常設に関する法律、通称『トイレ法』の法案審議に参加することになったのだ。ノルコ(どうしてもこうなったあ!?) どうしてもこうしても、ツイッターの選挙管理システムに選出されてしまったのだから仕方ない。

(720)

パチパチと拍手が降り注ぐ中、ノルコはひとまず立ち上がってペコペコと頭を下げた。そして座った。先生「というわけで、このクラスから国会議員が誕生しました! なんと呟音小学校が始まってから3人目の国会議員さんですよ! みんなでノルコちゃんを応援してあげましょうね!」 パチパチパチパチ。

(721)

2100年現在の日本では、全ての国民に被選挙権が認められている。国会議員は法案ごとに出され、その法案が議決されれば解散となる。それぞれの法案にとって一番ふさわしい人達を集めて審議するという訳だ。つまり総選挙は引つ切り無しに行われるわけで、

投票活動はごく日常的なものになってしまっている。

(722)

選挙の仕組みは単純で、みんながみんな誰でも好きな人に投票して、その投票数を累積していくというものだ。普段、ノルコのクラスで一番累積投票数が多いのは、色んな分野で何かと注目されているヤマオ君その人である。しかし当のヤマオ君は、どういうわけか今まで誰にも投票してこなかった。

(723)

ルイ「なにがビックリしたかって、ヤマオがノルコに投票したってことだよなー」ルイの言う通り、ヤマオの投票によってノルコの累積投票数が一気に増加した。システム上、ヤマオがノルコに投票したことはノルコにしかわからない。ノルコはヤマオの同意を得た上で、それをみんなに伝えたのだ。

(724)

ルイ「あとやっぱ、眩けなくなったせいで、変に注目されたってのもあるんだろうなー」リン「うんうん」ノルコ（それは喜ぶべきことなのか、さてはて）確かに、投票してくれた人を調べてみると、知らない人がずいぶんいる。あのミギノウエという人もノルコに投票している。ノルコ（でもぶっちゃけメンドクサイなあ）

(725)

ノルコは家の前でバイバイと手を振りみんなと別れ、そそくさと家の中に入った。リビングには母のヨコがいた。テーブルに座って両肘について、どことなく陰鬱な雰囲気だ。ノルコ（あれ？……朝はあんなに機嫌よかったのに）ノルコは何となくそっとしておいた方が良くと思って、そのまま素通りした。

(726)

洗面所で手を洗ってうがいをする。アフレルのコップと歯ブラシが目の前にある。ノルコ（お父さん、今頃なにしてるかな？）ノルコはぬるま湯にうがい薬をいれて丹念にうがいをする。ガラガラガラガラ……ぺっ。タオルで手と顔を拭く。特に用はないのだけどトイレにいつて、便器が清潔かどうか注意深く確認する。

(727)

ノルコ（トイレ法……か）それはトイレにツイッターを設置できるようにするための法案らしい。ノルコはそのメリットについて考えてみる。ノルコ（ツイッターと便器のセンサーをつないだら、いつでもトイレが綺麗かどうか確認できるかな？）それはそれで便利かもしれないとノルコは思う。

(728)

ノルコの将来の夢は「良いお嫁さん」になることだ。ごくありふれた女の子の夢。でも女として生まれて、それ以上に叶える価値のある夢があるだろうか？ そうノルコは思っている。良いお嫁さんとは、自分達の暮らす家を最高の状態に保つことのできる人であり、トイレの管理はその最重要項目の一つなのだ。

(729)

ノルコ（あつ、そうだ） 国会議員になったこと、お父さんとお母さんに知らせなきゃ。そのことを思い出したノルコはトイレを後にし、二階の自室へと上がっていった。そしてPCを立ち上げ、ツイッターを起動させた。ゲン「ノルコはこっかいぎいんにえらばれましたー」 ノルコ（あれ、フォロワーさんがまた増えてるな）

(730)

ノルコはこっかいぎいんにえらばれましたー……ノルコはこっか

いぎいんにえられましたー……ノルコはこつかいぎいんにえられ
れましたー……。そのツイートは静かに、しかし確実に拡散してい
った。野を越えて山を越えて、電子の海の遥かまで。ココロの穴を
くぐり抜け、遠い天の彼方まで。

(731)

ヨコ「ええっ?!」　ヨコがそのツイートを讀んだのは、呟かれ
てから2分30秒後だった。ヨコ「え?　ええー?!　なんでノル
コが?!　お、お父さんにも知らせなきゃ……あれ?」　ヨコが
アフレルの状況を確認すると「オフライン」になっていた。ヨコ「
あらら、仕事の関係かしらね?」

(732)

チカコ「あらあらまああ」　ツイッター互助会のチカコさんが
そのツイートを讀んだのは呟かれてから4分01秒後だった。チカ
コ「ホー、大変よ、ノルコちゃんがね!　国會議員に選ばれたっ
て!」　しかしホウは部屋の中でGPTLを見て氣絶していた。チ
カコ「もう!　まったくこの子ったら」

(733)

クメゾウ「ブフーツ!」　盛大に麦茶吹いたクメゾウ。ウメナ「
きつたないな!　何をそんなに驚いて……なんだってー!」　二人
がそのツイートを讀んだのは、呟かれてから10分49秒後だった。
クメゾウ「ゲッフ!　ゲッフ!　とんだビックリ水だな!」
ウメナ「大変なことになったね……法案のこと調べねば」

(734)

ユウタ「うわっ、すごい!　ノルコお姉ちゃんおめでとう!」
みんなとサッカーの練習をしていたユウタが、そのツイートを讀ん
だのは呟かれてから15分55秒後だった。カントク「こらユウタ

「よそ見るなー！」　ユウタ「すみません！　友達が国会議員になったんですう！」　カントク「なにー！　おいみんなー！　練習中止だ！」

(735)

カイザワ「小学生議員キター！」　ヨシシゲ「キタアアア！」　ギンジ「イエーッ！」　養老会の集まりでゴルフをしていた3人がそのツイートを読んだのは、呟かれてから18分後だった。その場にいたお爺ちゃんお婆ちゃん全員がゴルフを中断し、法案についての井戸端会議を始めた。カイザワ「トイレは生活の基本じゃ！」

(736)

クサヨシ「イズミ・ノルコ……おお、アフレル君の娘さんか、なんと」　割烹着姿でだし汁の味を見ていたクサヨシがそのツイートを読んだのは、呟かれてから28分30秒後だった。クサヨシ「そして彼女は……我が敬愛のイズミ・ゲン御大、そのひ孫さんでもあったか。うーむ、世間とは狭いものだ」

(737)

イズカ「アフレルのやつ、まだログオフしてやがるぜ」　ハツブル「ナンカ変ジャナイ？」　二人がそのツイートを読んだのは、呟かれてから1時間32分後、クサヨシから連絡を受けてのことだった。イズカ「いくらあいつが絶倫だからって、このログオフ時間は異常だ」　ハツブル「ナニやってんだろうネ？」

ツイートピア738〜759

(738)

そのころノルコは、ゲンの名前でつぶやいたツイートが、ビックリするほど沢山の人に読まれていることなど露も知らず、母と弟の三人で夕食後の家族会議を開いていた。ヨコ「さて、まずは当選おめでとう、ノルコ」　ワク「コングラッチュレーション！」　ノルコは（いやはや……）といった感じで頭をかいた。

(739)

ヨコ「お父さんと連絡がつかないんだけど、きつとお仕事の関係だと思うの。だからひとまず3人で考えましょ？」　ノルコとワクはうんうんと頷く。3人は「トイレ法」を可決すべきかどうかの検討を始めた。ヨコ「まず！　この法案の発起人はミタ・セイさん。32歳の男性よ。発起人としては、かなり若いほうね」

(740)

ヨコ「出身校はケイオウで、法学部を出ているわ。とても頭のいい人なのねえ。しかも会社の社長さんよ？　この若さで本当にすごい人だわ」　本当に、思わず唸ってしまうほどすごい経歴だと、ノルコとワクは思った。ワク「ホワッツ・カンパニー？」　ヨコ「B・ソーシャルの会社よ」

(741)

B・ソーシャルは社会生活を便利にしたり快適にしたりするためのプログラム製品の総称である。ワクがはまっている「救星機神ガンボール」もB・ソーシャルの一種だ。バイオツイッターのネットワーク環境に上乗せする形で使用される。バイオツイッターをOS

として駆動するアプリケーションソフトのようなものだ。

(742)

バイオツイッターそのものは誰でも自由に好きなように使っている。しかし、B・ソーシャルの開発や使用には様々な法的制限が加わる。そのためソーシャル・アプリの開発者には、高度な情報工学の知識のみならず、法学、社会環境学、心理学など、広範にして深厚な知識が必要とされるのだ。

(743)

ノルコ(ふむむ……ただものではないわ) やっぱ法案の発起人になるような人はすごい人だとノルコは改めて思った。そんなすごい人の考えたことを、平凡な小学生である自分にいったい何が言えるというのか? ヨコ「『さわやか日常』っていう会社ね。通称サワニチ。あの『不審者チェッカー』もここの製品ね」

(744)

ヨコ「ところでノルコ、実はつぶやき治ってたりしない?」 ノルコ(え?) いきなりだなあ、なんだろう? そう思いつつもノルコは、頑張つて咳こうとしてみた。ノルコ「……………」 ?」 ヨコ「無理そう?」 ノルコはうなずく。ヨコ「そう、残念ねえ。でもきつともうぐ治るから大丈夫よ!」

(745)

母がやけに確信めいてそう言うので、ノルコ少し首をかしげる。ノルコ(あっ!) その時、重要なことに気づいた。ノルコ(つぶやけなくても国会に出られるの?!) ヨコ「国会までに治ればいいんだけど、もし治らなくても大丈夫よ。みなさんの議論をちゃんと聞いて、きちんと自分で判断して決議の投票すればそれでいいんだから」

(746)

ノルコ(そうだったのかー) ノルコは国会議員というと、あれこれと難しい話し合いをしなければならぬイメージを持っていた。しかし言われてみれば確かに、国会議員の最終的な仕事は議決をすることなのだ。ノルコはトイレ法に関して最終判断を下すことを、多くの人達から任されたのだ。

(747)

ヨコ「国会決議の仕組みについておさらいしておきましょうか。まず、誰かが発起人になって法案を常設議会に出さなきゃいけないのね。発案自体は誰でもなれるけど、だいたい企業の役員さんとか、大学の教授さんとか、市民団体の人とかがやることが多いわね。とにかく法案を作って常設議会に提出するのよ」

(748)

ワク「ジョーセツギカイ？」 ヨコ「常設議会っていうのは、提出された法案を審査して、優先順位をつける議会のことね。月に一回、何もなくても選挙をすることになってるでしょ？」 ワク「オーイエス！」 ヨコ「常設議会には他にも、政府や裁判所を生暖かく見守るお仕事とかがあったりするのね」

(749)

ヨコ「そして常設議会で決められた優先順位の高い法案から順に、議決国会で決議していくのよ。ノルコが選ばれたのが『トイレ法案 衆院議決国会』で、これとは別に『参院議決国会』というのがあるわ。これは、衆院議決国会での議決が、本当に間違のないものかどうか、改めて審議するための国会なのね」

(750)

ノルコ（なんだかコムズカシイ話だな）　ヨコ「これは二院制と
いって、議会制民主主義が確立したところから連綿と続く、古式ゆか
しき伝統なのよ。何事もよく何度も考えてから決めなさいってい
う、先人達のありがたい教えなのね。だから二人ともちゃんと覚え
ておいたほうがいいわよ」　ワク「イエア！」

（751）

ノルコ（シューインとサンインは何か違うのか？）　ヨコ「ノル
コ、頭の上にクエスチョンマークが出てるわよ？　いい質問ね。衆
院は庶民が選ばれる傾向があつて、参院はインテリさんが選ばれる
傾向があるわ。これも昔の二院制の名残ね。でも権限は衆院の方が
強いだよ」　ノルコ（ふむふむー）

（752）

ヨコ「じゃあ、いよいよ本題に入るわよ。トイレ法案の中身！」
そう言つてヨコは、法案の条文をテーブルの上に表示させた。ヨ
コ「本法案は、公共領域における犯罪抑止を目的とし、そのために
必要となるバイオツイッター関連機器を、公衆トイレ、及び公共施
設のトイレの内部に設置することを許可するものである」

（753）

ノルコ（やけに長つたらしい文章だなあ）　それがノルコの最初
の感想だつた。そしてその次に思ったことが。ノルコ（ん？　公衆
トイレ限定なの？）　ヨコ「公共施設つてことは、学校とか市役所
とかね。あと野球場なんかも。とにかく不特定多数の人が使うトイ
レにツイッターを設置できるようにしましょうってことね」

（754）

ワク「コンビニも？」　ヨコ「そうね、入るかもね。スーパーと
か映画館とかもきつとそうなるわね」　何となく外出しにくくなり

そうだな、とノルコは思う、がしかし。ヨコ「お外で急にトイレに行きたくなっても、ツイッターが付いてればきつと安心ね」 ノルコ（！？） 母とは意見が食い違っているようだ。

（755）

ノルコは知らず知らず表情が複雑になってしまふ。ヨコ「ん？ ノルコは何か思うところがあるのね？」 ノルコはハツとなって顔を上げた。近ごろ、何も言わなくても色々と伝わるようになってしまった。ノルコは腕を組んでしばし考え込んだ後、大きく一つ「うむ！」といった感じで頷いた。

（756）

ヨコ「まあ、そんなに簡単な問題ではないかもしれないわね。トイレにツイッターがあると最低でも『いつ、誰が、どれだけそこにいたか』ってことがわかってしまうものね」 だからこそ犯罪抑止の効果があるのだが、そのぶん人は公共領域におけるプライバシーを失ってしまうことになる。

（757）

ヨコ「ただ、この法案で重要なのは、ツイッター設置を『許可する』って所よね。許可なのよ許可。義務じゃないわ。だからきつと気の利いたお店とかなら、ツイッターのあるトイレとないトイレの両方を作ってくれるはずよ」 ワク「イツ・ソー・ワンダフル！」 ノルコ（トイレが四つに分かれるってこと？ えー？）

（758）

これまでの母の話でノルコが感じたことは三つ。母がどちらかといえはこの法案に賛成だということ。世の中にはトイレへのツイッター設置を待ち望んでいる人も少なからずいるのだらうということ。そして、トイレが四つに分かれるかどうかは、法案を成立させてみ

ないとわからないんじゃないか、ということだった。

(759)

ヨコ「ワクはどう思う？ 賛成？ 反対？」 ワク「mu……」
ヨコ「まだわからない？」 ワク「ガッテム！」 ヨコ「うふふ
っ、こんなこと普段考えないものね。でも大事なことからこれを
機によくよく考えてみるといいわよ？」 そんなこんなで夜も更け
てきたので、今夜はこの辺でやめることにした。

ツィートピア760〜786

(760)

その後ノルコはお風呂に入り、歯を磨き、明日の学校の準備をし、自室の床をコロコロで丹念に掃除した。そして寝る前に部屋ＴＬを確認しようと、耳たぶをクリックした。ノルコ（あれ？） 部屋ＴＬが開かない。どうやら壊れているようだ。ノルコは部屋のドアのすぐ横に取り付けてある部屋用ＴＬを手にとった。

(761)

据え置き用のＴＬは、だいたいマッチ箱くらいの大きさだ。コンビニとかスーパーとかで簡単に入手できる。内部に組み込まれた各種センサーが部屋の大きさを認識し、部屋の範囲内でやりとりされる情報をＴＬ上に記録していく、いわゆるユビキタスコンピュータの一種だ。これを部屋に取り付けることが、現在の常識になっている。

(762)

ノルコ（明日新しいの買ってこなきゃ） 部屋用ＴＬは電池が切れたり、踏んずけて壊したりしても大丈夫な仕様になっている。すぐ近くに別のＴＬ機器があれば、そこに全てバックアップされる。ノルコが明日やるべきことは、部屋用ＴＬを買ってきてスイッチを入れて部屋に置く、たったそれだけなのだ。

(763)

ノルコの部屋のＴＬは、子供の部屋にふさわしい設定がすでになされているタイプだ。デザインも花柄だったりウサギの絵が描かれていたり、いかにも子供用っぽい。ノルコはその部屋ＴＬをひっ

くり返して、その裏側を見てみた。「サワニチエレクトロニクス」と書かれたステッカーが貼ってあった。

(764)

ノルコは机の上のひよこ型B O T「ピヨッター」にアクセスし、今はもう電池が切れてしまった部屋T Lの、情報バックアップを引き出した。ノルコ（ほおお） サワニチエレクトロニクスは、あのトイレ法の発起人ミタ・セイさんが経営する「さわやか日常」の関連企業だった。ノルコ（世の中せまいなあ）

(765)

ノルコはその情報をたどって「さわやか日常」社のビジターT Lにアクセスし、そこから社長室T Lに飛んだ。ミタ・セイさんは今日の昼すぎに一時間ほど社長室にいて、秘書の人といくつかの会話をしたようだ。ノルコはそのT Lをまじまじと眺める。ノルコはさながら、さわやか日常の社長室にいるようだった。

(766)

セイ「きみの教えてくれたレストラン、すごく美味しかったよ。先方もずいぶんと気に入ってくれたみたいだ。何より知名度が低くて予約しやすいからね。またあんな隠れ家的な場所を見つけたら、是非とも教えてほしいよ」 レオン「お役に立てて何よりです。足で検索すると結構見つかるんですよ」

(767)

セイ「そうなんだろうね、あれはネット検索じゃまず見つからないお店だよ。藪とか茂みとかで入口を隠してるレストランなんて初めて見たね。とことん目立たないようにって店主の配慮がいたるところに伺えた。あるんだねえ、あんな店が」 レオン「とっておきですから。あと、あまり眩かれない方が」

(768)

セイ「おっとそうだった。うつかりしてたよ、せつかくの隠れ家に行列でも出来たら大変だ、はははっ」 レオン「はい。ところで取引の方はうまくいきそうなんですね？」 セイ「ああ、先方はこちらの提案にとても好意的だった。予定通り進めてかまわないよ」
レオン「かしこまりました」

(769)

ノルコ「お仕事の話？ レストランの話？」 社長室ＴＬをちまちまと読んでみたが、それがどういうやり取りなのかは今ひとつわからなかった。Ｂ・ソーシャルの会社の社長さんが、誰とどんな取引をしているのかなど、ノルコには想像もつかなかった。ただ、人柄だけはなんとなくわかった。ミタ・セイさんは明るくて誠実そうな人だ。

(770)

ヨコ「よるほーよるほー」 ノルコ（あつ） ノルコは時計を見た。夜の十時を回るところだった。ノルコ（寝なきや、あう？）
キンツ……ノルコの頭に頭痛が走る。ノルコ（なんか頭痛が痛いよ？） ノルコはキンキン痛む頭を、両手で「ぎゅう」と圧迫する。
ノルコ（治った！） そして何も気にせず眠りについてしまった。

(771)

——深夜１１時。まもなく終電もなくなるという時間に、ギンザの街をうろつく男が一人……。アフレル「うい……ヒックッ」
ずいぶん泥酔しているようだ。顔は赤いのを通り越して白みはじめており、髪の毛ボサボサだ。よろよろと千鳥足でまっすぐ歩くこともままならない。アフレル「ああ月がキレイだな、アハハ」

(772)

昼間、ヨコの浮気現場を目撃した(と勘違いした)アフレルは、そのまま呟音駅に引き返し、あてもなく彷徨った。電車を何本か乗り継いで、どういいうわけか海芝公園に行き着いた。神奈川県鶴見工業地帯にある海芝浦駅は、昼間は利用者が殆どいない。出来るだけ人のいない電車をと、乗り継いでいった結果だった。

(773)

その名の通り、海の上に浮かんだ芝地のような作りの海芝公園。アフレルはひとまずベンチに腰掛けて海を眺めた。ときおり飛び魚がぴちゃんぴちゃんと跳ねる海原。その向こうに見える赤茶けた古い工場。アフレル(まるで世の果てだ……) そう思うアフレルの背後にあるのは、実は世界トップクラスの電気メーカーだったりするのだが。

(774)

アフレルはそのままたっぷり1時間、そのまま海を眺めていた。子供のころから続く、ヨコとの思い出が脳裏に駆け巡っていた。アフレル(思えば僕の人生は、失恋そのものだった……) 物心ついたころから思いを寄せていたその少女は、アフレルの目の前で次々と知らない男たちのものになっていったのだ。

(775)

幼稚園児の時、知らない少年と手をつないで歩いているヨコを見て、アフレルはショックで体重が半減してしまった。小学3年の時ヨコが知らない友達とキスをしたことを知って1週間学校に行けなくなった。中学1年の時、ヨコに恋の相談をもちかけられて、毎晩逆立ちして過ごすほど苦悶した。

(776)

しかしアフレルは、めげずにその試練を一つ一つ克服していった。そして高校生になるころにはそのカタルシスをバネにして勉強に励めるまでになっていた。アフレル（だから今もきつと……）ヨコが浮気したという現実をバネにして、より仕事に精を出すことが出来るはずだ。アフレルは何度もそう自身に言い聞かせた。

（777）

が。アフレル「……………」何かが事切れていた。アフレルは何も言わずにバイオツITTERをログオフした。両耳をクリックしたまま5秒間。たったそれだけでアフレルは、この世界の誰ともつながらない状態になった。アフレル「…………ふっ」ほくそえんでも一人、その声はさざ波の音にかき消されていく。

（778）

やがて閉園時間が近づいてきたので、アフレルは海芝浦を後にした。途中、鶴見駅のキオスクでワンカップ酒を大量購入した。キオスクのおばあちゃんはアフレルがログオフしていることに気がつかなかった。気づいてたら止められただろう。そしてアフレルは電車に乗りながらお酒を飲んだ。それから先の記憶は定かではない。

（779）

——深夜11時20分。うらぶれた夜のギンザを歩く男が一人。もう電車はなくなつた。ログオンすれば車を呼べるけど、そんなこととはしたくなかつた。街角にはもう誰も歩いていない。店も開いてない。時折わら草の塊が風に吹かれて、砂っぽいアスファルトの上を転がっていった。まるでやすい西部劇のような光景だった。

（780）

歩きつかれたアフレルは、何に使われているかもわからない、薄汚れたビルの隙間にうずくまつた。かつてバブルと呼ばれた時代が

あった。ここギンザは世界の中心だった。地球上でもっとも高貴で、華やかで、富に溢れた場所だった。人々はこの場所にありつた金の金と見栄とを持ち寄って、競うように消費したのだ。

(781)

だがそれも昔の話。ありつたけの金と見栄は、ありつたけの借金と無気力に変わり、貨幣制度に基づいた大量消費社会の終焉とともに、この街は歴史の遺物となったのだ。東京の至る場所が農地化され、人々は地方に分散して暮らすようになり、そして最後にはお金そのものが地上から消えうせた。

(782)

ヒヒーン——どこからともなく、馬のいななきが聞こえてきた。

アフレル(……誰か馬を飼っているのかな?) 心なしか空気中に、獣じみた匂いが感じられる。昔々誰かが言っていた『ギンザでベコ飼う時代』というものが、もうそこまで迫ってきているかのようだ。アフレル(ああ……僕らはいったい、どこへ行くのだろう)

(783)

アフレルは馬のいななきがどこから聞こえてくるのか気になった。その馬の姿を見てみたいと思った。ひとまず立ち上がり、いななきが聞こえる方角へヨロヨロと進んでいく。ヒヒヒーン、ブルルル——そう遠くはないようだ。そしてなんとなく馬小屋くさい。アフレル「ここを曲がったところか……?」

(784)

目の前にほのかな明かりが差し込んだ。ランタンの明かりだ。ロボロのビルの間に、木造の馬小屋がある。ちよつと冗談みたいな光景だなとアフレルは思った。丸太を大雑把に組んだだけの簡単な馬小屋に馬が2頭つながれているのだ。アフレルは夜の街灯にむら

がる夏虫のごとく、その光景に引き寄せられていった。

(785)

目の前には間違いなく馬がいた。栗毛の馬が二頭、つぶらな瞳でアフレルを見つめている。気にするわけでもなく、嫌がるわけでもなく、ただアフレルがそこにいることを認めている。アフレル「いい馬だなあ」そして馬がいるということは、飼い主もどこかにいるということだ。いったいどこに？

(786)

すぐ隣のおんぼろビルに目をやると、看板に一つだけ明かりがついていた。地下一階『BARオールドウエスト』バー？ いったい誰が来るんだろう？ そう思いつつも気になって仕方なくなつたアフレルは、馬に別れを告げてビルの階段を降りていく。その先にはいかにも西部劇に出てきそうなあの扉、スイングドアが待ち構えていた。

ツイトピア787〜815

(787)

スイングドア。押しても引いても開く、扉というよりはただの中仕切りに近いような代物だ。アフレル（なんでギンザにこんな西部劇なお店が？）しかし、やけに威圧感のある入り口だった。中には荒くれどもがたむろしていて、よそ者は容赦なく暴力沙汰にまきこまれてしまうような。そんな威圧感だ。

(788)

アフレル（……ふっ、まあそれも面白いかもね）もういつ東京湾の魚のエサになってもいいような心境だったアフレル。その扉のかもしれない威圧感など、今の彼にはどうでもいいものだった。手で開けて入るのも芸がないなと思ったアフレルは、そのドアを背中を押しかけた。しかし千鳥足がからまって、転げるように突入してしまった。

(789)

そしてそのままゴロンと倒れこむ。古びた木の床がギシギシとなった。バーへの進入の仕方としては、おそらく最低な部類に入るだろう。アフレルは恐る恐る顔をあげた。マスター「おやまあ」カウボーイハットを被った老年のマスターがグラスを磨いていた。マスター「とんだよそ者のおでましですな、ほほほ」

(790)

マスターはそのまま無言でグラスを磨き続けた。アフレルはその姿をボーっと見つめた。店内はとても狭く、テーブル席が二つだけ

あつてあとはカウンター。椅子の代わりに丸太の横木が取り付けられている。アフレル（あの横木、座りにくそうだなあ……） アフレルはしばらく目をぱちくりとさせていた。

（791）

マスター「お座りになつたらどうです？」 アフレル「……はい」
言われてアフレルは立ち上がる。そしてカウンターの前の横木をまたいで座ろうとした。マスター「ああ、またがなくてもいいです。こちらに背中を向けて結構」 アフレルは何もいわずにそれにならった。カウンターの反対側を向いて座り、上体だけマスターの方を向く姿勢だ。

（792）

アフレル「なんだか変な感じた」 マスター「慣れるとこれが中タイケてるんですよ？ 今のあなたはさながら、さすらいガンマンです」 はあ、しかし残念ながら僕のピストルは折れています……とアフレルは心の中で呟いた。マスター「失礼ですが、お金はお待ちですか？」 アフレル「……え！？」

（793）

予想外の言葉だった。この国の貨幣制度は、アフレルが生まれるずっと前になくなったのだ。マスター「その様子だとお持ちではないのですね。ログインもせず、お金も持たず。冷やかしいところですね」 アフレル「すみません……でもお金なんて、今時どうやって手に入れるんです？」

（794）

マスター「おや、ここにございますが？」 そういつてマスターはレジから一万円札を取り出した。福沢諭吉の絵が描かれている。アフレル「！？」 本物？ 初めて見た……」 マスター「まあ無理

もありません。私が子供の頃はまだ使えたのですがね。時代の流れとは恐ろしいものです」 アフレル「はあ……」

(795)

アフレル「この店ではまだお金のやりとりを続けているんですね。お金なんて遺残国債の平衡処置をするためだけのものと思ってた……」 マスター「まあ、おまごともいたいなものですよ。昔を偲ぶ者達同士のね。何か飲みますか？ つけておきますよ？」 アフレル「つ、つけ？」 マスター「貸しにすることです」

(796)

アフレル「お、お任せします」 マスター「かしこまりました」 マスターはそう言っただけのグラスを取り出した。スコッチを注ぎ、水で割る。最後に氷を一個浮かべる。マスター「どうぞ」 なんの変哲もない、ただの雑な水割りだった。冷えてもいない。のどが渴いていたアフレルは、一気に半分ほど流し込む。味も薄かった。

(797)

アフレル「貸しって、お金で返せばいいんですか？」 マスター「ええ、どんなことをしてもお金を手に入れてください。もしくは今すぐログインしてください」 アフレルは「……ぐぐ」とひとつ唸ってから。アフレル「……必ずお返しします」 と答えた。 マスター「ほほ。よほどログインしたくないんですね」

(798)

アフレルはそれ以上にも言わず、店内をちまちまと眺めながら水割りを飲んだ。店の内装はおおよそ木製だ。しかも、朽ちた廃屋から拾ってきたような、小汚い木材ばかりだった。店内をほのかに照らすランタンからは、油の匂いがもれている。アフレル「ケロシ

ンの火が……」 マスター「よくわかりで」

(799)

アフレル「油はしょっちゅうさわってるから」 マスター「なるほど」 アフレル「この木材はどこから集めてきたの？」 マスター「そこかしこから」 アフレル「ところでこの水割りおいしいね」 マスター「それは何より」 アフレル「マスター、トイレ借りていい？」 マスター「そちらです」

(800)

アフレルはトイレに入り、ゆっくりと放尿した。ずいぶんと溜まっていたようで、いつまでたっても途切れなかった。生まれてこの方、こんなに長く放尿したことなどないというくらい、ゆっくり時間をかけて用をすませた。トイレを出るとマスターがお絞りをくれた。マスター「トイレに手洗いがいいもので」

(801)

アフレル「マスター、外の馬ってマスターの？」 マスター「ええ、趣味で飼っています」 アフレル「とても綺麗な目をしていた」 マスター「馬ですから」 アフレル「乗ったりするの？」 マスター「ときおり」 アフレル「ところでマスター寡黙だね」 マスター「それほどでもございません」

(802)

アフレルは水割りを飲みきった。マスター「おたばこは」 アフレル「吸いません」 マスターはグラスを下げてカウンターを拭き、代わりに小さなコップを置いて水を注いだ。アフレルは軽く会釈をした。アフレル「マスター」 マスター「なんでしょう」 アフレル「僕って困ったお客かな？」

(803)

アフレルはマスターに言われた通り、カウンターに背を向けて座っていた。だからマスターの表情はわからないはずだった。しかしアフレルにははっきりわかった。マスターが背後で、自信満々の表情を浮かべていることが。マスター「あなた様なぞ、困った客のうちには入りませんなあ」

(804)

アフレル「む、まだまだ上がいるってこと？」　マスター「ええ。世の中には実に凄絶な困ったお客さん方がいる。他の客にからむ。延々クダを巻く。ずっと寝てる。大声で自慢話ばかりする。嘔吐する。ひたすらいちゃつく。ウーロンハイありませんかって聞いてくる。実に様々です」　アフレル「ウーロンハイ？」

(805)

マスター「ええ。そして私が無いというと、『ちつ、ウーロンハイも置いてないのかよ!』と吐き捨てて帰ってしまわれる。本当に困ったお客さんですよ」　アフレル「……バーで飲むお酒じゃないね」　マスター「まったくです。お子様用のミルクは出せても、ウーロンハイはちょっとお出しできません」

(806)

マスター「いやしかし。せめて不満を心のうちに留めておいてもえれば良いのです」　アフレル「え？」　マスター「本当に不満に思っているのなら、言わなくともわかるんです。それが、バーが寡黙な場所である意味だと私は考えております」　アフレル「……マスター」　マスター「何かお作りしましょうか？」

(807)

アフレル「お任せします」　マスター「かしこまりました」　そ

う言つとマスターは、アフレルの背後でそそくさと作業をはじめた。どうやらカクテルを作るようだ。アフレル（何作ってくれるんだろ？）　アフレルは、もし自分がマスターだったら、何をこの客に作ってやるだろうかと考えてみた。

（808）

二日酔いに気をつけなさいという意味でブラッディー・メアリー？　もうすぐ12時ですよという意味でシンデレラ？　今の自分の姿はまさしくこれだという意味でソルティ・ドック？　もうこれで最後だよという意味でXYZ？　まだふてくされるには早いという意味でギムレット？　あたって砕けるという意味でカミカゼ？

（809）

マスター「どうぞ」　言われてアフレルはカウンターの方を向く。置かれていたカクテルグラスには、うつすらと青みのある液体が注がれていた。アフレル「……なんだろう？」　マスター「一息にグイっとやるタイプです」　飲み方まで指定されてる？　どんなカクテルだろ？　アフレルは言われるまま、一気にそのカクテルを飲み干した。

（810）

アフレル「?!@　＼＼＼＼＼＼＼！」　瞬間、すさまじい刺激がアフレルの鼻腔を襲う。とにかく滅茶苦茶な味がした。アフレル「げほっ！　げほっ！　な、な、なんですかこれ！」　頭に酒気が駆け上がり、視界がぼやけ、平衡感覚がマヒしていく。相当に強いカクテルだ。マスター「アース・クエークでございました」

（811）

アフレルはひったくるようにしてコップを取り、ゴクゴクと水を

流し込む。しかし、アルコールで熱くなった胃の底は全然おさまらない。アフレル「ま、まさかこんなすごいのが……ゲフッ、ゲフッ」
マスター「元気でました？」アフレル「むしろ死にそうですよ！」
マスター「またまたご冗談を」

(812)

マスターが面白そうにヒツヒと笑ったので、アフレルは流石に危機感を覚えた。もう本格的にお帰りになったほうが良いようだと思える。マスター「まだまだ後から効いてきますんで、お早めにタクシーを呼んだほうが良いですよ」アフレル「そ、そそ、そうします……うう」アフレルはしぶしぶ両耳をつまんだ。

(813)

アフレル「ご、ご馳走様でした……」マスター「はいお気をつけて。つけは2600円ですからね。ちゃんと手に入れてくださいよ、お金」アフレル「は、はい……ヒック！」何とかビルの外まで這い出たアフレルは、ツイッターにログインして車を呼んだ。車を待つ間、またあの二頭の馬が目に入った。

(814)

馬は立ったまま眠っていた。鼻息がふうふう聞こえてくる。ふうふう、ふうふうアフレル(……ああ生きているんだな)その馬たちは、今あそこで確かに生きていた。酔いにぼやけた意識のなかでアフレルは、何故かそう実感せずにはいらなかった。やがて車が来る。何とか体を押し込んで行き先を設定する。

(815)

ガンバル基地までは1時間以上かかるだろう。アフレルは後部座席にぐったり横たわり、そのまま目を閉じた。アフレル(……ああ、ひどい目にあつた)視界がグワングワンする。天と地が入れ

替わる。アフレル「……お金どうしよう」しかしそう呟くアフレルの頭の中からはもう、ヨコへの執着はすっかり消え去っていたのだった。

(816)

翌朝――。ノルコ(あうう……) ノルコはベッドの上で頭を抱えていた。ズキン、ズキン。ノルコ(頭いたい!) ヒトまず顔を洗ったり水を飲んだりしてみよう。そう思いつつノルコは自室を出る。今日は水曜日だが、祝日が入っているためお休み。こんな日に頭痛とはもつたない限り。

(817)

ノルコはいろいろ試してみたが、どうにも頭痛がおさまらない。ノルコ(家に頭痛のお薬置いてあるかな?) そう思い、ＴＬを開いて確認してみる……すると。ノルコ(なんじゃこれー!) ノルコのＴＬは訳のわからない政治的リプライでゴツチャゴチャになっていた。ノルコ(頭痛の原因これかー) 国会議員も大変だ。

(818)

大量のリプライが一度に押し寄せると、脳内回路に負荷がかかって頭痛のような症状をきたすことがある。特に子供に多いのだ。ノルコ(こういう時はログオフ!) ノルコは両方の耳たぶを同時につまんでログオフする。ふと思う。ログオフしたら喋れるようになつたりして。ノルコ「あーあー」 !?

(819)

ノルコはあわてて口を塞いだ。ノルコ(声でた……どうしよう) 別にどうしようもこうしようもないのだが、反射的にノルコは口を塞いでしまった。――神は言っている、今はまだつぶやく時ではない――何故だかそう思えてならない。ノルコはあわてて自室に駆

け戻ると、ゲンお爺さんのPCを立ち上げた。

(820)

頭痛がひどいのでしばらくログオフします——そうゲンお爺さんの名前でツイートしようと思ったのだが、途中でノルコの手は止まっていた。ミギノウエ「やあ、やっぱりログオフしたんだね。いま君に直接リプライしても、TLの流れが速くて届かないと思うたから、このタイミングを待たせてもらったよ」

(821)

ノルコは反射的に全思考を停止させた。それが最大の防衛行動だと本能的に察知したのだ。ミギノウエ「まずは議員選出おめでとうね、僕の言ったこと当たったろう？ 君には並ならぬものを感じていたんだ。なにかこう、魂の導きみたいなものをね」ノルコは彼の言うことをさっぱり頭に入れなかった。

(822)

ミギノウエ「でもきつと君は困っているんだろうね。読みきれないほどたくさん意見リプライが来てるはずだから。それでだね、お節介とは思いつつも、それらの意見を勝手にまとめさせてもらったよ。なあに、なんてことはなかったさ。ただ君と近い人たちのリストを作っただけだからね、5分もかからなかったよ」

(823)

ミギノウエ「このリストを使うかどうかは君しだいだ。僕はどうにも信用されていないようだね。でもこれだけは覚えておいてほしいんだ。僕は人々のよりよい未来を常に願っているし、人の生き方について君のひいお爺さんから教えてもらったことを、なにより心から感謝しているんだ」

(8 2 4)

ミギノウエ「それじゃあ、そういうことで。またいずれ時がくればアプローチするよ。あと、僕は別に君の心を覗き見たりはしてないから、そんなに心を閉ざさなくても大丈夫だよ！　あと、それから、たぶんもうログインしても大丈夫なんじゃないかな。TLもだいたいぶ落ち着いたろうしね。じゃあまた」

(8 2 5)

ノルコはミギノウエのリプライを一通り流すと、両耳を再びつまんでログインした。そして一つ大きく深呼吸した。すううううう、はああああああ。ノルコ（頭痛がなくなった……まじまじ）　そして、今日一日なにして過ごそうかと、途方にくれてしまった。ヨコ「ノルコー、朝ごはんよー？」　ノルコ（ひとまずご飯なう！）

(8 2 6)

そのころ――。クオ「じゃえ、ジエネ先生。それじゃあ行くんだお！」　ジエネ「はあーい、わくわく」　呟音市近郊にある丘の上。クオとジエネは、今まさにパラグライダーで飛び立とうとしているところだった。クオ（ジエネ先生と空のタンデム……夢のようなんだおっおっお！）　二人を乗せたグラライダーが、一気に風をはらんだ。

(8 2 7)

ジエネ「すごい、本当に飛んだー！」　クオ「まるで人がゴマ粒のようなんだおっ」　そのままぐんぐん上昇し、空の彼方へ。クオ「怖くないですかお？」　ジエネ「そんなことないですよ！　むしろ風が気持ちよくて眠く……」　クオ「おっ、お？　ジエネ先生、寝ちゃだめなんだお！」

(8 2 8)

ジェネ「……すやすや」 クオ「おっー!？」 実はジェネ先生、ここまで来る間、眠くてしかたがなかった。なんといてもデートの相手は眠りのウィスパーボイスの持ち主、クオ先生であるのだから。飛んだら眠気も吹き飛ぶかと思ったが、どうやらだめだったらしい。クオ「あつ、バランスが! おつ、おー!」

(829)

二人を乗せたグライダーは、そのまま山の中に突っ込んでいってしまった。クオ「ひいひい!」 ジェネ「……むにやむにや、もう食べられなあい」 木に引っかかって失速し、そのままずるずると地面まで落ちていった。クオは必死に身をよじってジェネをかばう。そしてお尻からドスンと着陸した。クオ「あ”っー!」

(830)

ジェネ「むにやむにや……はっ!」 流石にジェネは目を覚ました。お尻の下でクオが伸びていた。ジェネ「あら、どうしちゃったの……ここは?」 あちこちと見回すと、一方に崖があった。クオ「いつつ……もう少しそれてたら崖に突っ込んだところだおお」 二人とも殆ど怪我がなかったのが、まさに不幸中の幸い。

(831)

ジェネ「……あら?」 ジェネが何かに気づいた。ジェネ「ここ圏外!」 クオ「ええ?」 クオは耳たぶをクリックしてT1を確認する。クオ「本当だ、圏外になってるんだお」 山奥とかでは圏外になったりするが、まだそこまで深くは入っていないはずだった。クオ「どういうことだお……?」

(832)

ジェネ「電波障害がでてるのかもー?」 クオ「うーん。何はともあれ、森を出るんだおっ」 ジェネ「あつ、ちょっと待ってクオ

先生。あそこ、何か変じゃない？」 クオ「なんだお？」 ジエネが指差した先は、ちょうど崖の付け根だった。ジエネ「岩の形がちょっと変な気がする。まるで何かを隠しているみたい」

(833)

ジエネがやけにウキウキしているのを見て、クオはちょっと戸惑った。クオ(この人、僕よりアウトドア志向なんだお……) ジエネ「ちょっと探検してみましようよ！」 クオ「だ、だお」 言われてクオはジエネについていく。ジエネは岩の前まで来ると、ポケットから電灯を取り出して岩の隙間を照らした。

(834)

ジエネ「やつぱり奥に空間がある！」 クオ「鍾乳洞みたいなものお？」 ジエネ「それにしても形が不自然だわ。ねえ先生、ちょっとこの岩どかしましようよ？」 クオ「ええ！ 何が出てくるかわからないんだお」 ジエネ「だって気になるじゃない！ ほらほら！」 クオはしぶしぶ岩の隙間に手を入れる。

(835)

クオ「ジエネ先生のためならエーンヤコーラっと！ おっおっお！」 クオ先生が渾身の力を込めて引つ張ると、岩はゴゴオンと音を立てて倒れた。ジエネ「わあお、先生意外と力持ち！」 クオ「はあはあ、コッソリ鍛えてるんだお…… って、おおお！」 クオ先生は言葉を失った。洞窟の中にはなんと…… 大きな箱があつたのだ！

(836)

ジエネ「宝箱！」 クオ「え、ええー？」 そんなバカなと思いつつも、二人は箱に近づいていく。クオ「結構大きな箱なんだお。五月人形が入りそうなくらいなんだお」 ジエネ「大きい箱って、確かお化けとかが入ってた方よね？」 クオ「お、おー！ 開けな

いでおくかお!？」 ジエネ「まさか!」

(837)

ここまで来たら開けないわけにはいかなかった。二人は顔を見合
わせ、お互いに「うん」とうなずき合う。そして二人で箱のふたに
手をかけた。クオ「じゃあ、いくんだおっ」 ジエネ「せーの!」
パカッ。ふたは開けられた。二人は中をのぞきこむ。ジエネ「
……」 クオ「……」 そして何も言わずに閉じた。

(838)

ジエネ「クオ先生」 クオ「だお」 ジエネ「入ってましたね、
中身」 クオ「だお」 ジエネ「何かこう……人の形をしたもの
が」 クオ「……だお」 ジエネ&クオ「ひええええええええ
!……!」 二人は一目散にその場から逃げた。ジエネ「け、警察に
……!」 クオ「知らせるんだお!!」 はたしてどうなることや
ら。

(839)

クサヨシ「おおつ、それはいいアイデアだアフレル君！」 アフレル「え、そうですか？」 アフレルはガンバールの腕の試運転をしながら、昨夜の車の中で思いついたアイデアを伝えていた。クサヨシはやっぱり厨房にいて、ネギを刻んでいた。クサヨシ「なかなか大胆不敵なアイデアを思いつくじゃないか」

(840)

アイデアというのは、純エネルギー生命体のエイリアンを発見する方法のことだ。光と一体化した彼らを発見することは、通常の方法では不可能なのだ。アフレルは昨夜のバーで見た2頭の馬から、アイデアの着想を得た。クサヨシ「言われてみればなるほど、生命体を認識できるのは生命体以外のなものでもないわけだ」

(841)

アフレルのアイデアは単純に言うと「バイオツイッターの相互ネットワークそのものをパッシブレーダとして使用する」というものだ。アフレル「はい、生命って、どこか生命自身にしか感じとることのできない『波動』みたいなものを持っていると思ったんですよ」
その着想を、昨夜馬を見たときに得たのだ。

(842)

クサヨシ「ふむふむ。さながら、われわれ自身の魂を受信機とするわけだな。いやはや、君も恐ろしいことを思いつく」 アフレル「そ、そうですね？」 クサヨシ「ああ。だってね君、その受信機は我々自身の心の実感であって、科学的に存在を証明できる代物で

すらない。ある意味、科学への反逆、カルトと思われるても仕方のない発想だ」

(843)

クサヨシの言葉に、アフレルはしたたか冷や汗を流した。クサヨシ「しかしまあ、やってみる価値はある。科学は常にそれ自身を超越していくものだからね。それに、そのアイデアならすぐに実行できる」アフレル「ええ?!」クサヨシ「我々の技術力をなめてもらってはいけけないな、2時間以内にプログラムを組み上げてみせよう」

(844)

クサヨシは「すたたたんっ」と鮮やかにネギを刻み終わると、その場で割烹着を脱ぎ捨ててリーダーシステム開発室へと向かっていった。アフレル「ほへえ……」アフレルは鉄の腕をがっこんがっこん動かしながら嘆息した。イイツカ「おいアフレルもういいぞ、昼飯にしようぜ!」ハッブル「腹へったネー」

(845)

アフレル達は食堂へと向かうムーブワークに足をかける。イイツカ「なあアフレル、言いくければ言わんでいいんだが、昨日のやたら長いログオフは一体なんだったんだ?」アフレル「え? 気になる?」イイツカ「そりゃあな。殆ど半日ログオフしてたんだぜ?」ハッブル「ファミリーとナニがあつたん?」

(846)

アフレル「いや、家族とはうまくやってるよ」イイツカ「ならいいんだが」ハッブル「インダガ」そしてアフレルは少しためてからこう言った。アフレル「なんだって僕の奥さん超美人だしっ」しばしポカーンとする二人。イイツカ「こ、このやるお!」

ハッブル「やっぱりゼツリンだったんだな!？」

(847)

アフレルが職場で先輩に頭をグリグリされているころ、妻のヨコはリビングでテレビを見ていた。テレビ「本日の午前、呟音市近郊の山林で意識不明の状態の男性が発見されました。男性は洞窟の中に放置されていた箱の中から見つかりましたが、命に別状はないようです。呟音市警察にて現在、身元の確認が進められています」

(848)

ヨコ「あら、怖いわねえ。一体なにがあったのかしら？」 テレビ「それでは第一発見者のインタビューをご覧ください。クオ」は箱の中に人が入っていて本当にビックリしたんだおっ、誰かの手によつて隠されたような感じだったんだおっ。あ、カメラマンさん眠っちゃだめなんだおっ」

(849)

テレビ「ジエネ」なんとというかこう、岩盤でフタをしてあつたんです!」クオ「そ、そうなんだおっ、結構重かつたんだおっ。ちなみに僕たちはデート中だったんだおっおっ」ヨコはふうむと唸りつつ、お茶を一口すすった。ヨコ「何はともあれ、怪我が無くてよかつたわね」気がつけばテレビとお喋りしていたヨコだった。

(850)

ヨコ「ふう……なんだか退屈」ワクは祝日のガンバールフェスタに行っているし、ノルコは自室にこもって色んな人の意見に目を通しているらしい。ヨコも何か手伝ってあげたかったけど、何か聞かれたときに答えてあげる以上のことは出来ないのだった。ヨコ（あくまでも、ノルコが決めなきゃいけない問題なのよね……）

(8 5 1)

ヨコ(そうだ！　ホウ君は今なにをしているかしら！?)　すっかりホウの友達になった気持ちでいる魔性の女ヨコは、チカコさんにリプライしてみた。チカコ「あら、ヨコさんこんにちは。ホウならさつき出掛けていましたよ？　なんだかとても焦っているみたいだったんだけど、何かしらね？」

(8 5 2)

ヨコ「え、そうなんですか？　お茶にでも招待しようかと思っただんですけど」　チカコ「うふふ、うちのホウを気に入ってもらえて何よりですわつ。ホウは午前にGPTLを見て気絶して、目を覚ましたかと思っただけ飛び出て行っただですよ」　ヨコ「まあ……それはちよつと気になりますねえ」　チカコ「ほんとにねえ」

(8 5 3)

チカコ「そうそう。今ですね、アップルパイ焼いてるんですよ？　もしお暇でしたら食べにきませんか？」　ヨコ「えつ、良いんでございますか？　我が家にも今ちょうど、良いお茶がございますのよ？」　チカコ「まあまあそれは！　是非と遊びにおいらしあそばせ。ホウもそのうち戻ってくるでしょう、おーほほほ」

(8 5 4)

ヨコとチカコが優雅なティータイムを画策しているころ、ホウは近くの公園に向かって猛ダッシュしているところだった。ホウ「くっ……これは大変なことになりそうだ！　GPTLが僕を裏切るなんて！　一体どういうことなんだ！」　GPTLが裏切った？　それは一体どういう状況なのか？

(8 5 5)

ホウはGPTLを見ることにより、大まかな未来の出来事を知ることが出来る。しかし今回、予想外の事件がおきたのだ。そう、咳音市近郊の山林で見つかった意識不明の人物のことである。ホウ「誰だ、一体誰なんだ。GPTLをかき乱しているやつは！」　ホウはGPTLのかく乱の根源が、近くの公園に現れることを予知していた。

(856)

ホウは全体力を注ぎ込んだ猛ダッシュにより、約3分で公園にたどり着いた。ホウ「はあはあ……」　何の変哲もない、ただの公園。ブランコがあつて鉄棒があつて砂場があつてベンチがあつてトイレがある。ホウ（どうやら、まだ来ていないようだ……ディッセスタール）　ホウはベンチに腰掛けて『その者』の訪れを待った。

(857)

そのまま3分の時が経過した。まだ誰も来ない。木の上で小鳥がピーピーさえずっている。ホウ（……一体相手は誰だ……そして何が目的だ）　ホウにわかっていることは唯一つ、正体不明の誰かが、人知れず人類の営みに干渉してきているということだ。その目的も、手段さえもわからない。

(858)

ホウ（まさか……地球外文明の干渉？）　どうにも人間の仕業ではなさそうだとホウは思う。今の人類の文明レベルでは到底不可能なことが起こっているのだ、と。地球外生命体……もとい、エイリアン。ホウ（なんて荒唐無稽な……むっ！）　その時、公園の入り口に人影のようなものがよぎった。

(859)

ホウ（……あれは）　人影はそのまま公園の中に進入してきた。

背の低い、小太りなシルエット。しかしその存在感は尋常ではない。切れ長にして眼光するどい目。恐ろしい程ふくよかな福耳。ホウ（確か彼は、ノルコ君のクラスメートの……）カスガイ・ヤマオー――何故こんなところに？　ホウの表情が、いつそう険しくなった。

(860)

そのころ、ノルコは自室で煮詰まっていた。ノルコ（あれがあれであれなっぺばっばらばーのぴー〜だ！）色んな人の色んな意見を読み比べるうちに、ノルコは自分が今どこにいるのかさえわからなくなってしまった。ノルコ（頭痛い……痛くないけど痛い）そして頭をかかえてうんうん唸った。

(861)

ゲンお爺さんの友達の、お爺ちゃん三人組からは「トイレは心のオアシスじゃからＴＬ設置はイカン！」との意見。ツイッター互助会のチカコさんからは「トイレで起こった犯罪が原因で互助会を尋ねてくる人もいるの、賛成」との意見。ユウタ君からは「いつでもみんなと繋がっていられる方が安心だよ、賛成！」とのご意見。

(862)

お父さんの同僚のイズカさんからは「一人でじっくり考え事できる場所ってやっぱり貴重だと思うから、ＴＬいれるのは嫌だなあ、反対」との意見。お父さんの上司のクサヨシさんからは「全ての発明のトイレより生まれる。トイレへのＴＬ導入は、人類の発達過程に甚大な影響を及ぼすだろう。保留」と、どっちつかずの意見。

(863)

ウメナお姉さんからは「ゲンお爺さんならきつと反対したろうね。何事も慎重な人だったからね。だから反対」との意見。クメゾウお爺さんからは「俺は別にどっちでもいいなあ。要はみんなの心がけしだいだろうが、保留」との意見。てんでんばらばら自由自在、ときおり支離滅裂。ノルコ（……うー！みんな好き勝手言って！）

(8 6 4)

ノルコはいい加減疲れてしまっていて。ノルコ（気分転換しないと……あつ）部屋のＴＬが壊れていることを思い出した。買いに行かなければ。ノルコは上着を着ると、壊れたＴＬをもって玄関に向かった。ノルコ（お母さんに言っていかなきゃ）そう思っ
てりピングを覗くもいなかった。キッチンにもいないようだ。

(8 6 5)

ノルコ（寝室かな？）お昼寝してたらどうしよう？ そう思いつつヨコとアフレルの寝室を覗く。ヨコ「ふんふんふん」あらノルコ、どうしたの？」ヨコはお化粧をして出掛ける準備をしていた。服装からみて、どうやらお茶会にでも行くみたいだ。ヨコ「お母さん、これからちよつと出掛けてくるからね」

(8 6 6)

ノルコは壊れたＴＬをヨコに見せた。ヨコ「あら壊れてる。買ってこなきゃね」ノルコはそこで手を大きく上げて（自分で買いに行く！）と宣言した。ヨコ「え？ 自分で行くの？ そうね、すぐそのコンビ二で買えるしね。買ってきたらお母さんが戻ってくるまでお留守番してくれる？」ノルコは大きくうなずいた。

(8 6 7)

コンビ二は歩いて2分もかからない場所にある。ノルコは壊れたＴＬを回収ボックスに入れると、新しいＴＬを手にとった。色んな絵柄のものがあるが、今回はイヌの絵が描かれたものにする。耳たぶクリックで部屋用ＴＬの商品情報を確認すると『仕様変更あり』とのロゴが赤々と点滅した。

(8 6 8)

ノルコ（なんだろう？） さつそく調べてみる。どうやら壁にピタッと取り付けるテープの部分が変わっているらしい。ノルコ（子供がガムと間違って食べても大丈夫な粘着テープになりました……？） ちなみにペパーミント味であるらしい。ノルコ（そんなもの誰が作ったのかな？） ノルコはさらに調べてみる。

（869）

ノルコ（！？） 食べられる粘着テープの開発者はイズミ・アフレルとなっていた。ノルコ（お父さん！？） ノルコはしば口をあんぐりと開けたままポカーンとしてしまった。ノルコ（これってすごいこと？） いや、きつと凄いことなんだろう。日本中の部屋ＴＬに使われるような品物を作ったのだから。

（870）

家に帰る途中、ノルコは何回かそのＴＬ装置を眺めた。そしてその度に言い知れぬ感慨に打たれた。ノルコが小公園の前を通り過ぎようとしたとき、なにやら騒ぎ声が聞こえた。ホウ「ヘイボーイ！ そんな耳たぶゆらしてどこに行くつもりだい？」 ノルコ（ホウさんの声だ！） そして公園を覗き込んだ。

（871）

ノルコ（あれは…… ヤマ才君?!） ヤマ才とホウが公園のトイレの前でにらみ合っていた。ノルコにとってそれは、まるでシューリリズム絵画の如き不可解な光景に見えた。ホウ「僕にわかるはずのことがさっぱりわからなくなった！ でもボーイ？ 君がその原因だってことはわかってるんだぜ、ビバーチエ！」

（872）

ノルコ（何を言っているんだろう？ ヤマ才君が何かしたの？） ヤマ才はホウの言葉を事も無げにやり過ごし、いつもの変わらぬ

微笑を満面にたたえていた。かすかに後光が差しているかのようだった。ホウ「なんとか言いたまえよボーイ？」 ヤマオは何も答えなかった。その代わり――ノルコに視線を向けた。

(873)

大出力レーザーの如く強靱にして確固たる視線に、ノルコはおでこの真ん中を打ち抜かれてしまった。ノルコ(うひゃう?!) そのままビーンと硬直する。ホウ「……ふふ、このタイミング。偶然とは言いがたいなボーイ&ガール？」 するとヤマオは招き猫のような仕草で、ノルコにこっちへ来るよう手招きした。

(874)

ノルコはカチコチとした動作で二人のもとへ歩いていった。ノルコ(一体何をしているの?!) 聞いてみたかったが呟けない。もちろんヤマオも呟かない。ホウ「そして僕は喋れても呟けない」 奇しくも全員ツイト能力が欠如していた。ヤマオ「……」 ホウ「……」 ノルコ「……」 三人はそろって空を見上げた。空は青かった。

(875)

ノルコ(この状況……一体どうなるんだろ?) ノルコがそう思うやいなや、ヤマオが自らの両耳をつまんだ。ログオフしようというのだ。そしてノルコをジーと見つめてきた。まるでノルコにもログオフを進めているかのように。ノルコ(……てやんでえ!) ノルコは半ばヤケクソ気味にログオフした。

(876)

ノルコのログオフを確認すると、ヤマオは何も言わずトイレに向かって歩いていった。二人ともそれに続いた。ノルコは引き返すなら今しかないと思った。この先トイレに入って、そこで『なにごと

も起らない』わけがなかった。ノルコ（……それでも） それでもそこはトイレだった。今のノルコにとって、最も重要な場所だったのである。

（877）

ヤマオは多用途トイレの扉を開けた。体が不自由な方などのために、広々としたつくりになっている。もちろんＴＬ装置を含むすべての監視・記録装置が設置されて『いない』。ホウとノルコが中に入ると、ヤマオはその扉を閉め、そして鍵をかけた。これで完全な密室。情報工学的に言って、どこへも繋がっていない場所が成立した。

（878）

ヤマオ「やあ、わざわざごめんね。ノルコちゃん。そしてホウさん」 ノルコ（！？！？） 驚天動地の出来事だった。ホウ「……ほほう！」 ヤマオ「ノルコちゃん、声を出して驚いてもいいんだよ？」 ノルコ「なにことだわ！？」 そして自分が喋れることをヤマオが気づいていることに気づいて、さらに驚いた。ノルコ「ほんじゃらげー！？」

(879)

ノルコはしばし白目を剥いていた。やがてヤマオは語りだす。ヤマオ「あまり時間もないから手短にね。まずはノルコちゃん」そう言つてヤマオはノルコの方に向き直つた。ノルコは何とか白目むき出し状態から回復した。ヤマオ「ミギノウエという人を知っているよね。実はあの人、僕の知り合いなんだ」

(880)

ノルコ「ふ、ふうん……」ノルコはもう大して驚かなかつた。驚くという感覚がマヒしていたのだ。ノルコ「そ、それで？」ヤマオ「それだけ」そっけなくそう言つと、ヤマオは今度はホウに対して向き直つた。ヤマオ「次はホウさん」ホウ「ふっ、耳の穴かっぽじつてよく聞いてさしあげようじゃないか！」

(881)

ヤマオ「GPTLは体によくないんだよー？」ホウ「そんなこと、言われるまでもないことさ……それで？」ヤマオ「それだけ」またしてもそっけなくそう言つて、ヤマオは二人から視線をはずした。ヤマオ「じゃあ、もう出よう。人がきちゃうから」ヤマオはそれ以上何も言わず、トイレの扉を開けた。

(882)

まぶしい外の光がトイレの中に差し込んできた。ヤマオはトイレから一步踏み出すと、両耳をつまんでログインした。ノルコもそれに続いてログイン。ホウは髪をかきあげて無い耳に光を当てた。ホウ「そして君はもう眩かないんだね？」ヤマオは何も言わず、穏

やかな微笑を浮かべてホウを見つめた。

(883)

ノルコはヤマオに聞きたい事が溢れんばかりだったが、ログインした以上は呟くことが出来ない。ただヤマオの横顔を見つめ、その表情の奥にある彼の意思に思いを馳せる他にないのだった。ヤマオはそのまましばし空を見上げていた。何かを呟こうかどうか迷っているように、ノルコには見えた。

(884)

ノルコ(ヤマオ君……本当はもっとつぶやきたいのかな?) ヤマオ君の一声は、きつと私のつぶやき一万回分の重みがあるに違いない、ノルコはそう思わずにはいられなかった。ヤマオ「……」ヤマオ君がわずかに口を開いたように、ノルコには見えたのだが……。ノルコ(やっぱり気のせい?)

(885)

ヤマオがノルコの方を向いた。その表情には、いつもと同じ微笑が浮かんでいて、かすかに後光がさしてみえた。ノルコ(……!!) その瞬間^{とき}だった。ノルコ(……そうか、わかったよヤマオ君!) ノルコの表情の変化に気づいたヤマオは、なんとも満足げな表情を浮かべた。そして何も言わずに歩き去って行った。

(886)

通行人1「おい、たしかこの辺だ」 通行人2「あつ、いたぞ、ヤマオ君だ!」 彼らはヤマオが公園の中で突然ログオフした理由を探りに来た人達だ。有名になると、ろくにログオフも出来ない。ヤマオはその人達の前を、軽く会釈をしてから通り過ぎた。二人の男は、ただ呆然とヤマオを見送った。

(8 8 7)

ノルコ(ヤマ才君はきつと、大勢の人に注目されることの意味さを教えてくれたんだ!) そう思いながら、ノルコは無意識に空を見上げていた。日本中、いや世界中から注目されるなかでつぶやくということは、もしかすると、何も無い空に向かってつぶやくのと同じことなのかもしれない。

(8 8 8)

ホウ「……やれやれ、つまりはGPTLを見るなという警告か。一体彼は何者なんだろうね？」 ヤマ才が何者なのかはノルコにはわからない。もしかしたら宇宙人かもしれないし、弥勒菩薩の化身かもしれない。未来からの使者かもしれない。ただ一つ間違いなく言えることは、ヤマ才君が大切な友達だということだ。

(8 8 9)

ホウ「ところでノルコ君、ミギノウエというのは？」 そんなのは私の頭の中を読めばいいでしょ! とノルコは思う。ホウ「今の僕はGPTLの恩恵がまったくないんだ」 ノルコ(心を読めないってこと?) ホウ「そうなのかもしれないし、そうじゃないかもしれない」 ノルコ(どっちなの!?)

(8 9 0)

ホウ「ああ……どうしよう。GPTLの使えない僕なんてただの変質者じゃないか」 ノルコ(自覚してたんだ?!) ホウ「こんな状態じゃ誰も救えやしない。また昔の僕に逆戻りだ」 ノルコ(そんなことはないんじゃない?) ホウ「ああ困った。ずっと未来を読める前提で生きてきたから。今僕は何をしていいかわからない」

(8 9 1)

ノルコ(とりあえず家に帰ったら?) ホウ「ああああー、今夜

のおかずは何だろう！ それさえもわからないなんて！」 ノルコ（ちなみに我が家はアジフライなのです） ホウ「あああー、ムズムズする！ いやクサクサか？ むしろウサウサするのか?!」
ノルコ（う、ウサウサ？）

（892）
ホウ「……ごめんよ、君に言っただってどうしようもないね。まだツイート直らないのかい？ うち来てGPTL見るかい？」 ノルコは目を閉じ耳を塞ぎ口をつぐんだ。ホウ「見ざる言わざる聞かざるかい？ ふつ、まさに人が到達しえる最高の境地じゃないか。オールインワン」 ノルコ（ホールインワン？）

（893）
ホウ「ふふふ……なんだか君を見てて元気が出てきたよ。君はつぶやきを失ったのに、そんなにも明るく今を生きているだね。僕も見習わなきゃね」 ノルコ（なんだかムズ痒いわっ） ホウ「ああ、人は未来が見えずとも、前を向いて生きていけるのだろうか……」
ホウはそのまま、力なく歩き去っていった。

（894）
何をそんなに落ち込む必要があるんだろう？ ノルコは率直に思う。ノルコ（未来が見えてる方がどうかしてるの……） 今のノルコは国会議員で、考えることは山ほどあるのだ。ノルコ（私も帰ろつと） ということで、余計なことは後回し。ノルコ（……そういえば、ミギノウエとヤマ才君が知り合いってどういうこと？）

（895）
どの程度の知り合いなのだろうか？ 親しいのか？ ただ顔を見知っているだけなのか？ また、何のためにそのことを伝えてきたのか。ノルコ（わからぬ……） でもまあ、そのうちわかるだろう。

ノルコはそのくらいに考えて、それ以上深く追求することをやめた——もとい、やめることを自らの意志で選択したのだ。

(896)

山林の奥で発見された意識不明の人物が目を覚まし、自らカスガイ・トシオと名乗って、子と妻がいることを告白するのが、今日から一週間後のことである。しかし、それをまだノルコは知らない。知ろうと思えば知ることが出来ることだったが、ノルコは自らの意志でその可能性を放棄したのだ。

(897)

カスガイ・トシオが光情報生命体であり、宇宙全天に遍在する種族『光文明』の端末素体であることを、ノルコはもう一生知る術はない。ヤマオが彼と地球人女性との間に生まれたハーフであることも、地球人に情をよせてしまったトシオを更正するために派遣されたエージェントこそがミギノウエであることも、一生知る術はない。

(898)

人知れず地球圏に侵入した光情報生命体、もといエイリアン。その存在に、ホウは危うく気づきかけたのだ。故に光文明は、彼の下にヤマオを派遣した。ヤマオはこういうわけか、その工程にノルコを巻き込んだ。それは光文明にとってイレギュラーな事態であり、現在その意義が全力で検証されているところだ。

(899)

光文明の目的は人類と友達になることである。しかし彼らからすれば、人類はまだ相当に幼い。ゆえに対話が可能になるまで人類の成長を見守るというのが、彼らのポリシーだった。しかし、こともあろうか、その幼い文明の生命体に恋して、子供まで作ってしまった端末素体が発生した。これにより彼らのポリシーは大きく動揺す

る。

(900)

光文明は現在、そう遠くない時期に自分達の存在が地球人に知られるだろうと予期している。そしてその事態を可能な限り先延ばししようと、持てる全知能を結集させている。幸い、ホウとノルコの二名は無力化できたようだ。しかしいずれその時は来るだろう。彼らの存在は、ヤマオという名の銕かすがいを通して、にじみ出てしまうのだから。

(901)

たとえヤマオが宇宙人だったとしても、友達であることには変わらない。ノルコが心の中でそう宣言してくれたことは、光文明にとつてこの上ない喜びとなった。おそらく、ここ数億年の間で一番の喜びであつたろう。彼らは最大限の自制を保ちつつも、やはりどこかで浮き足立ってしまった。地上の光に、揺らぎが生じるほどには。

(902)

ノルコ(……ん?)　　なにか光ったような気がした。よく見れば、体の周りにキラキラと、光の粒子が踊っているようだった。ノルコ(あれあれ?)　　目をゴシゴシこする。やっぱりキラキラしたものがまとわりついている。ノルコ(なんだろう、なんか不思議だな……)　　キラキラはまもなく消えてなくなった。

(903)

ノルコは再び歩き出した。ポカポカといい天気で、自然とアクビが出てしまう。ノルコ(はしたないふわああ)　　帰ったらちよつとお昼寝して、それからまた皆のご意見シートを読もう。そんな他愛も無いことを考えつつ、ノルコは歩く。彼女が今まさに世界の中心にいるということは、知る由もないことだし、知る必要もない

ことだつた。

ツィットピア904〜934

(904)

時計の針が15時を回ったその時、突然アフレルはクサヨシに呼び出された。それも直接会ってだ。ツィッターは使わない方がよいと判断したのだろう。それほどにクサヨシは切羽詰った表情をしていた。アフレル(な、なにことだろう……) クサヨシは何も言わず、ただ自室に向かって歩みを進めている。

(905)

アフレルはクサヨシの自室に招き入れられた。クサヨシの部屋は和風な趣で、戦国時代の茶室を思わせるような作りになっていた。掛け軸には【人は人なり】と、なかなかの達筆で描かれていた。アフレル(ど、どうするんだろう……ドキドキ) クサヨシはアフレルに座布団をすすめ、自らも座した。

(906)

アフレル(……え、ええっ！) クサヨシは何も言わずにログオフした。クサヨシ「君もログオフしてくれないか、大事な話がある」 アフレル(え、えええ！) じ、自室で二人っきりでログオフって、そ、それは！) 男同士であっても、そういうことをする際はログオフするものだが……。クサヨシ「……何か勘違いしてないか？」

(907)

アフレルはあわててログオフした。そして、アフレル「か、勘違い？ 何のことですか？」 と、とばけた。クサヨシ「ふむ、ならば良い。実はとてもとても大変なことになったんだよ、アフレル君」

アフレル「な、なんです？ まさか宇宙人が見つかったとか言わないですよ？」 クサヨシは口元にニヤリとした笑みを浮かべた。

(908)

アフレルの頬に冷や汗がつつた。アフレル「……ま、まさか本当に」 クサヨシ「そうだ。本当に見つかったのだ。しかも大変なことに……」 アフレル「……なんです？」 クサヨシ「アフレル君。宇宙人の反応はね……君の娘さんの、すぐ近くで起ったんだ」 アフレルの表情が凍りつく。アフレル「え……？」

(909)

アフレル「この人たちが悪戯好きなのは良く知ってますけど、さすがにその冗談は無いですよ」 アフレルは目がマジになっていた。その眼光の険しさは、クサヨシでさえ息を詰まらせるレベルだった。アフレル「なんでわざわざノルコのそばに現れなきゃいけないんです？」 父は怒っていた。

(910)

クサヨシ「それはわからない……、ただこの白衣に誓って言わせてもらおう。こんなバカな冗談を私は言わない。反応が出たのは事実だ」 アフレル「……すみません」 クサヨシ「いいんだ。私だってまだ半信半疑なのだから」 クサヨシは開発用の情報端末を取り出した。クサヨシ「この端末は、私のPTLだけに繋がっている」

(911)

アフレル「PTL？」 聞きなれない単語だったが、それはハウがパーソナルタイムラインと呼ぶもの、そのものだった。クサヨシ「バイオツイッターを駆動させているソースコードのようなものだ。暗号化された個人の思考情報と言い換えても良い。バイオツイッターの中核をなすものの一つだ」

(912)

クサヨシ「PTLは個人の無意識のコードであると同時に、全人類の集合的意識に対する《影》でもある。私自身のPTLを解析することで、全人類の無意識的感覚を利用できるのでないかと私は考えた」 アフレル「そんなプログラムを作っていたんでうすか？ たった2時間たらずで」 クサヨシ「正確には1時間58分だ」

(913)

アフレルはそんなことはどうでも良いと思った。重要なのは、本当にその反応は宇宙人のものなのかということだ。アフレル「端末を見せてもらっていいですか？」 クサヨシ「もちろん」 アフレルは端末を受け取る。画面には宇宙人との接触が疑われる人物がリストされており、その最上位にノルコの名前があった。

(914)

アフレル「なんだかよくわかりません……どういう基準なんですか？」 クサヨシ「人間が地球上で生きていて、おおよそ経験するはずもない経験をした者を抽出している」 アフレル「その経験って具体的にはどんな経験なんですか？」 クサヨシ「その選定に私自身のPTL情報を利用しているのだ」

(915)

アフレル「そのPTLというのは、本人にもわからないように暗号化されているから……」 クサヨシ「そうだ。私にもなんだか良くわからない」 アフレル「うーん……」 クサヨシ「ともかく、君の娘さんが現在、通常では体験しえない体験をしていることは間違いないんだ。心当たりはないかね？」

(916)

心当たりもなにも、アフレルはもうずいぶんノルコと会話をしていなかった。アフレル（娘がそんな状態になっているのにも気づかないなんて……僕は父親失格だ）　クサヨシ「君の娘さんは最近、国会議員に選ばれたようだ、それについては何か話していないのかい？」　アフレル「……え？」

（917）

アフレルの頭の中に、クサヨシの言葉が幾度も反響した。国会議員に選ばれた？　ノルコが？　国会議員に選ばれた？　ノルコが？　え？　クサヨシ「……まさかとは思うが、知らなかったのかい？」　アフレルは頭の中が真っ白になった。ヨコの浮気現場（勘違い）を目撃した時から、色々なものが吹っ飛んでしまっているのだ。

（918）

アフレル「少し、時間をください……。家族とちよつと話してみます……」　クサヨシ「うむ、それがいいだろうな。心ゆくまで団欒すると良い。なんなら休みを取ったらどうだ？」　アフレル「いえ、それには及びません……では、失礼します」　クサヨシ「ああ　アフレルはクサヨシの部屋を後にした。

（919）

アフレルは近くのムーブウォークに乗ると、すぐさまＴＬを開いて家族のＴＬに目を通した。そしてトイレ法のことを知り、ヨコがノルコに日本の政治システムの説明をしたことを知り、ワクがガンバールフェスタで好成績を収めたことを知った。無我夢中で目を通していたので、アフレルはすっかり基地の端っこまで来てしまった。

（920）

アフレル「げげっ、ここどこ！？」　そこは人気のまったく無い、廃倉庫のような場所だった。アフレル「はあ……」　アフレルは

頭を抱えた。どうして僕はこんなに間抜けなんだ。自分自身に呆れて言葉もでなかった。アフレル（こんなんだから、奥さんを知らない男に取られちゃうんだ……）

（921）

引き返す気にもならず、アフレルはしばしそこに佇んだ。彼はけして間抜けというわけではない。ただ並外れて集中力が高いため、それ以外のことが目に入らなくなってしまう傾向があるだけだ。ひとまず気分を落ち着けて、状況をしっかりと把握できれば、大抵のミスは取り戻せるのだ。

（922）

アフレル（……ここは試作品の投棄場なのか）よく見ると、暗がりの中にガンバールのパーツが見え隠れしている。長さ15mの巨大なバールが一本横たわっている。アフレル（もったいないな）そこはとても静かな場所だった。ここなら案外、落ち着いて家族と話せるのではないかとアフレルは考えた。

（923）

アフレル「ヨコ、今なにしてる？」　ヨコ「あらあなた。今ね、チカコさんとお茶しているのよ？」　アフレル「チカコさん？」　チカコ「あら、ヨコさんの旦那さん？　始めましてー」　ヨコ「チカコさんはお菓子作りの達人なのよ？」　アフレル「そ、そうなんだ。いいなあ、僕もなんだかお腹すいてきちゃったよ」

（924）

ヨコ「あなた今、休憩中なの？」　アフレル「うん、そうなんだ。ちょっとみんなの様子が気になってね」　ヨコ「そう……。ところでノルコがね」　アフレル「うん知ってる。国会議員に選ばれたんだよね。僕も今、法案を読み込んでいるところなんだ。ノルコは今

なにしてる？」 ヨコ「お昼寝してるみたい。疲れてるのよ」

(925)

アフレル「そうか……。頑張つて勉強してるみたいだしね、政治のこと」 ヨコ「あなた、あんまり驚かないのね。私なんか驚いてしばらくになにも言えなくなっちゃったけど」 アフレル「ん？ そうかな。それでも結構驚いてるんだけどな」 ヨコ「ふうーん」
アフレル「うんうん」

(926)

ヨコとアフレルのリプライを聞いていたチカコは、妙なよそよそしさを感じていた。チカコ（なんだか距離感のあるご夫婦ですこと！） そしてお節介かとは思いつつ、口をはさんだ。チカコ「ご主人は単身赴任なんですつてね。家族と離れて寂しくありませんこと？」 アフレル「ええ？ そりゃあ寂しいですよ」

(927)

ヨコ「えー？ ホントに？ 仕事に我を忘れてたりしない？」
アフレル「そ、そんなこと……」 そんなことありだった。チカコ「うふふ。家庭のことを忘れるくらい楽しい仕事なんだったらそれは良いことじゃないですか」 ヨコ「まったくだわ。私にも半分分けて欲しいくらいね！」 アフレル「ううっ」

(928)

アフレルは流石にいじめてしまった。アフレル（……人の気も知らないで） しかし、すぐに気を取り直す。今のアフレルは、超重要な懸案事項を抱えているのだ。アフレル「いやでもさ、ノルコのことがかく気になるんだよ。いまノルコつぶやけないから、離れていると調子とか様子とかわかりにくいからさ……」

(929)

チカコ「うんっ、それはご主人とっても心配だと思う！」　ヨコ「それもそうねえ」　アフレル「何かこう、疲れてるとか塞ぎ気味とか挙動不審とか、なってない？」　ヨコ「国会のことで煮詰まってるようではあるわね。でも、気持ち的にどうこうってことはなさそうよ？」　アフレル「ならいいんだけど……でも心配だな、国会議員かぁ……」

(930)

ヨコ「大丈夫よ。私もちゃんと見てるから。……あ、でも強いて言うなら」　アフレル「な、なに？」　ヨコ「あなたが単身赴任する前の日の夜だったんだけど、ノルコ、お風呂でのぼせちゃったのよね。そんなこと今まで一度もなかったのに」　アフレル「え？　お風呂？」　アフレルはその夜のことを思い起こす。

(931)

アフレル（そういえば、テレビを食い入るように見ていたな……確か弓道講座）　ヨコ「お風呂でなにか考え事でもしていたのかしらね？　本人に聞こうにもノルコつぶやけないし」　アフレル「まあ……そうなんだよなあ」　ヨコ「でもきつと、もうすぐ治ると思うから、そしたら聞いてみるわ」　アフレル「うん、頼むよ」

(932)

そこでアフレルはいったん会話を切り、そしてその場を後にした。アフレル（お風呂で考え事してた？　じゃあなんでその後、テレビの弓道講座に見入っていたんだろ……？　なにか変じゃないか？）　アフレルはさらに記憶を探り、テレビを見ていた時のノルコの様子を詳細に思い起こそうとした。

(933)

アフレル（……なんとなく、目の焦点がテレビに合ってなかったような気がする……はっ！！）　そこでクサヨシの言葉とリンクした。クサヨシ『宇宙人の反応はね……君の娘さんの、すぐ近くで起ったんだ』　アフレル「せ、せん……！？」　咄嗟にアフレルは口を塞いだ。宇宙人に聞かれてはまずい。アフレル（洗脳された！？）

（934）

もう一刻の猶予もなかった。光情報体の宇宙人に、自分の娘が洗脳された可能性がある。傍から見ればバカげた妄想に聞こえるかもしれないが、わずかでも可能性がある限り、最悪の事態を想定して行動する必要がある。アフレル（どうすればいい……考える僕！）　高鳴る胸を抑えつつ、アフレルは猛ダッシュでムーブウォークを駆け抜けていった。

ツイトピア935〜955

(935)

タケシ「すげーぜワク！ いつの間にあんな上手くなったんだよ？！」 ワク「イツ・シークレット」 ワクはガンバールフェスタの帰りだった。今日のワクは絶好調で、なんと撃破ポイント289をたたき出したのだ。これは国内では7位、世界では321位という、超がつくほどの好成績だ。

(936)

ワクは帰り道でずっとガンバール仲間の少年達に問い詰められていた。あまりにもいきなり強くなったからだ。だがワクはその秘訣を誰にも明かさなかった。そういう『約束』をしたのだ。ある人とワク（ミスター・ミギノウエ……アイ・ウィル・ウィン！） み、ミギノウエ？！

(937)

このところ、毎晩のようにワクをガンバール対戦にさそってくる大人がいる。その者の名はミギノウエ。ノルコにちょっかいをかけているゲンお爺さんのお友達だ。もちろん大人なので、いくらがんばっても撃破ポイントは少ない。しかし、大人の知識を駆使したえげつない戦法でワクを翻弄してくるのだった。

(938)

ミギノウエ「ふはははー、まだまだ修行が足りんぞワク君！」
そう言っただけで挑発してくる彼のことを、ワクは『なんて大人気ない人なんだろう……ホワツ・ア・チャイルディッシュ・マン！』と思っていた。しかし、彼と対戦するうちに、ワクのガンバール操縦技

術はどんどん進歩していったのだ。

(939)

ジョージ「なあ教えるよ、なんであんなに上手くなったんだよ？」
リュウヤ「あの翼の衝撃波でバーンってやつ、どうやってやるんだ？」
タケシ「もったいぶってないで教えるYO！」
ワク「……大事な人との約束だから、いまは教えられないんだ！」
ワクに日本語で言われては、誰もそれ以上追及できなかった。

(940)

ミギノウエはワクにこう言った。ミギノウエ「ワク君、おじさんはもついい年なんだけど、このガンバルというゲームが大好きなんだ……。こんなこと恥ずかしくて他の人には言えやしない。だからこのことは秘密な？　な？」
ワクも、大人に教わったえげない技で強くなったとは、あまり人に言いたくなかった。

(941)

途中で友達と別れると、ワクは家に向かってダッシュした。すごくお腹が空いていた。ワク「アイム・ホーム！」
家に入るとキッチンへ行く。おやつのタイヤキがおいてあった。ワク「hum？」
姉のノルコの分が手付かずになっている。もう4時になるというのに。ワクは二人分温めて、ノルコの部屋に持っていくことにした。

(942)

ワク「Knock Knock」
しかし返事はなかい。ワクはソートとドアを開けて、ノルコの部屋を覗いてみた。ワク「??」
ノルコは机の椅子に正座して、ゲンお爺さんのPCとにらみ合っていた。そうとう髪の毛をワシヤワシヤしたらしく、アホ毛が数え切れないほど跳ね上がっていた。

(943)

ワク「シスター？」 ノルコ(!!!) ノルコがガバつと振り向いた。そしてズカズカとワクの方に歩いてきて……ガッ! ワク「ノー!」 襟首を掴んだ。ワク「ちゃんとノックしたよう!」 ノルコはワクの持っているタイヤキに気がついた。ノルコ(あ……ごめん) そしてワクの襟首を離して、頭をナデナデした。

(944)

ひとまずタイヤキを一つほおばる。甘くて熱々でおいしい。ワク「ホワッツ・ドゥーイング？」 ノルコはフウと一つため息をついて、ノートPCを指差した。ワク「トイレ法？」 うんうん。ワク「ベリー・デイフィカルト」 うんうん。ワク「お父さんに相談してみた？」 ノルコ(……そういえば、お父さんの意見聞いてない)

(945)

ゲン「いま仕事? 終わってからでいいから、トイレ法の賛成か反対か教えてー」 と、ノルコはゲン名義でリプライを送った。しばらくかかるかと思っただが、返事はすぐに来た。アフレル「お、お爺さん! じゃなくてノルコ。あ、あー、うわわわ。いやなんでもない……。大変なことになったなー、アハハー」

(946)

なんだか調子が変わだ。ゲン「いそがしい、無理しない」 アフレル「いや、そんなことないぞ! 今ちょうど休憩中だ」 とは言っただものの、実はクサヨシと対策会議を開いているところだった。しかも筆談で。ゲン「トイレ法を知ってる？」 アフレル「ああー、もちろんだとも。そんな大事なこと、お父さんが見過ごすわけないだろー?」

(947)

なんだが無理をしている様子だったが、ノルコは気にしないことにした。アフレル「あれはなー、すごく微妙な法案だなー。父さんは反対だ」 ゲン「その心は」 アフレル「今は公共のトイレだけってことになってるけど、そのうち家のトイレにもＴＬ付けたほうが良いって雰囲気になりそうな予感がするんだ」

(948)

ゲン「ふむふむ」 アフレルはドキリとした。ゲンお爺さんもよく『ふむふむ』と言って人の話を聞いていた。まるでノルコの体にゲンお爺さんの魂が乗り移っているみたいだった。ゲン「雰囲気は流されると良くない」 アフレル「ま、まあ、そうだな。雰囲気っていうのは人の手では制御できない不安定なものだしな」

(949)

ゲン「もう少し考えてみる」 アフレル「ああ、あんまり気負わないようにな。……ところでノルコ。国会議員になって色々注目されてると思うけど、最近変わったことはないかい？」 ゲン「んー……」 あると言えばある。ヤマ才君のこととか、ミギノウエという人のこととか。でもそれをお父さんに言っているのかどうか。

(950)

ノルコ(……どうしょ?) ヤマ才君との密談はきつと言わないほうが良い。ログオフしてまでヤマ才君が伝えたかったことだ。でもミギノウエさんのことは言った方が良いかなとノルコは思う。ルイちゃん達も知っていることだし、ゲンお爺さんのＴＬを読めばすぐにわかってしまうことだから。

(951)

ノルコ(なにより家族内の隠し事は少ない方がいい!) ゲン「ミギノウエさんというゲンお爺さんの友達と知り合いになった」

アフレル「ミギノウエさん？ んー、聞いたことないな……。そんな知り合いが爺ちゃんにいたんだ」 ゲン「お爺さんとは政治みたいな話をいっぱいしてたんだって」

(952)

アフレル「へえー、知らなかったなー」 ゲン「私が国会議員になることを予言した」 アフレル「……え、まじ？」 ゲン「まじまじ」 アフレル「……ねえノルコ。その人は本当にゲンお爺さんの友達なんだね？ お父さんもあとで調べてみるけど」 ゲン「うん。ルイちゃん達とＴＬを読んだ」

(953)

ワク「僕もその人知ってるよ?!」 ノルコ(え?) ワク「最近よくガンバルで遊ぶんだ」 アフレル「ええ？ 一体おいくつなの？ その人」 ワク「サーティー・エイト！」 アフレル「父さんとそんなに変わらないじゃないか……いくら上手くてもポイント稼げないよね」 ワク「オールライト！」

(954)

アフレル「そうか、ワクもお世話になっているんだな。じゃあ父さんもちゃんとご挨拶しておかないとな」 アフレルは本当はこう言いたかったはずだ。『なんでそんな大事なこと、もっと早くいわなかったんだ!』と。しかし、単身赴任でゴタゴタしていた時期でもあった。ノルコ達も言い出しにくかったのだ。

(955)

アフレル「おっと、そろそろ休憩時間も終わりだ。トイレ法のこととはまた後でゆっくり考えよう」 そこで会話は終わった。ノルコとワクは、タイヤキを食べたので喉がかわいてきた。とてもお茶が飲みたかったので、二人でドタバタとキッチンに下りていった。ノ

ルコはお父さんに怒られなかったことを、少し不思議に思った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4987o/>

ツイートピア

2011年10月26日14時59分発行